

私はその恐ろしい眼の前の光景に打たれて、身を戦慄しながらどつかと尻餅をついた。「どつち道悪い奴なんだ。」と善助伯父は悟つたやうに云つた。

村夫子は何にも云はなかつたが、暫らくすると口の中で、「併し一人分だけの酸素が助かつた。」

私にはよく分らなかつたから、何の意味かと聞くと、

「いや、飛んだ事を云つて退けたわい。」

「なぜ？」

「人間は麵麩と空気で生きて居るんだ。其麵麩は一片も無いが、空気もモウ十分でない。此重い空気で後幾日われ／＼が生きて居られるか分らんが、八蔵が吸ふ分量だけが助かつたので、そこで乃公はそれを云つたのだ。もう云つて了つたものは仕様が無いが、こんな不人情な言葉の出た事を乃公は一生悔むだらう。」

不思議なもので、眼前に見た八蔵の最後は、一般に恐怖の印象を與へたけれども、迷信深い坑夫等には却つてまた希望をも生ぜしめた。そして彼等は新たな勇氣を以て「袋」の壁を叩き始めた。それは彼等の間には極つた呼出しの叩方があるの、それを繰返すのであつた。尤も今迄とても合間々々にはたゆまず試みて居たのだ。

その中刻一刻に堪へ難くなるのは、胃の腑の慾望で、終ひには水際に降り、浮いて居る朽ちた木などを拾つて来て、それを食べようと試みた。

私等の中で一番飢を想へて居るで、松は、残つて居る片々の靴を剪刀で切刻み、ひつきりなしにそれを齒齧んで居た。

こんな有様を見て居ると、私はまた何とも知れぬ新しい恐怖に襲はれるのだ。私が美登里老人からいろ／＼の冒險譚を聞いた中に、こんなのがあつた。それは或時難船があつて、水夫等が無人島に漂流したが、食物の無いところからとう／＼一緒に上つた小童を殺して食つたといふのである。私は源助、吉、で、松の三人が絶えず飢を想へて居るのを聞くと、私とその小童と同じ運命に逢ふのではないかとさへ思はれた。善助伯父と村夫子だけは私を保護して呉れるだらうが、併し最後まで村夫子の命令が行はれようとは思へない。野獸のやうな天性を持つた坑夫等は最後の時が来ればどんな事でもするだらう。私は取分けで、松が眼を光らせながら、白い大きな齒を剝出して靴を食べて居るのを見ると、何だか安心する事が出来なくなつて来た。

それはかういふ恐怖は、冷静に考へれば馬鹿らしい事に違ひない。けれども私等のやうな境遇に出逢ふと自分が自分の主人でなくなり、自分の感情を支配するものは、最早分別でも、冷やかな判断でもなくなるのだ。

殊に私の恐怖を深めるのは、燈火の無い事であつた。限りある私等の石油燈は段々に油が盡き、今では二個ほか残つて居ないので先程から、必要のある時でなければ點ぬといふ事にしたのであつた。

かうして眞黒闇の中に居るので、いよ／＼物恐ろしいのみか、ひよつと身體を不器用に動かすと、忽ち奈落へ落ち込む懸念があるから、その危険も一通りでは無くなつた。

八藏が死んでから、上の段も下の段も三人宛になり、身體はよほど楽になつて居た。そして私はいつも善助伯父と村夫子の眞中に居た。すると私がう／＼と眠つて居る或時、村夫子は夢でも見るやうに低い聲で話し出した。私はすぐ眼を覺して耳を欬てると、よくかう云ふ時があるものだが、誰も彼も魔がさしたといふやうに眠氣ざして、寢て居るやうに私には思はれた。

「お、大變な雲が出た。」と村夫子は續けて「雲といふものは見て居て氣持のいゝものだ。や、風が吹いて來たぞ。風もまた格別嬉しいいな。」

私は村夫子が夢を見てるのだからと思つて、手を探つて揺ぶつて見た。それでもなほ云續ける。

「なに六つの卵子を入れる？ そればかりのオムレッツではどうにもならん。十二にして置け。」

「伯父さん。」と私は善助伯父を揺起して「村夫子が寢言を云つてる。」

「ウム、寢言を云つてるな。」

「なアに、ちやんと起きてるんだ。」と上の段で誰かが云つた。

「冗談云つてるんだよ。」

「い、や、起きてるんだつて事よ。」

「おい、村夫子。」と善助が聲をかける。

「お、善助、お前乃公の家に晚餐を食に來るがい、たゞ云つて置くが、大風だからな……」

「村夫子は氣が變になつたぞ。」と善助は心配さうに呟いた。

「なに、死んだんだよ。」と源助の聲で「魂魄が今口を利いてるんだアな。ウム、風が吹き出してゐる。」

南國風だ!!

「地獄に南國風があつてたまるもんか。だから己やアお前に地獄に行くなと云つたんだ。」とこれは吉の聲であつた。

吉の聲も源助の聲もいつもの聲とは違つて聞えた。みんな囁語のやうな事を云出したのは、發狂にでもなるのではあるまいか。いよ／＼發狂すれば毆合もし、喰合もするだらう。何とも云へぬ不安が私の胸に食入つた。

可なり長い間、村夫子と吉と源助の三人は囁語のやうな、少しも聯絡のない事を云合つて居た。

突然私の頭に石油燈を點けようといふ考へが閃いた。私の石油燈は村夫子の傍の方に燐寸と一緒に置いてあつたから、私は手探りでそれを取上げた。

燐寸の光がバツと「袋」の中を照すとその刹那に、めい／＼長い眠から覺たやうに顔を見合はせて、何事が起つたのかと尋ねた。

「お前達は今熱に浮されて居たんだ。」と善助伯父が云つたが、皆信用しない顔で、

「誰か？」



「誰がつて、村夫と吉と源助と三人でよ。風が吹くとか、空が曇つたとか、地獄がどうの、かうのと取留もない事はかり云合つて居たんだ。己やアお前等が氣でも違やしねえかと、大きに心配してたところだつたぜ。」

「いや、氣も違ふだらう。」と源助は長い嘆息をついて腕を組んだ。

村夫子が答めるやうに石油燈に眼をつけたのを見て、私は説明するため、

「みんなが變な事はかり云出したから黙けたんだよ。消して置かうね。」

「民、一寸待つてくれ。」と源助は私をとめて「己やア逆も助かりさうもねえから死ぬ前に遺書をこへ殘して置きてえんだ。」

「そんなら己も書く。」

「いや己も……。」

「ぢやア村夫子一つ書いてくんねえ。」

源助は隠しに紙と鉛筆の端を持つて居た。

「己はこんな風に書いて貰えてえんだ——『己達善助、吉、村夫子、でこ松、民、源助の六人は『袋』の中で今死ぬところだ。』」

「己——源助は女房と子供に接吻を送る。女房と子供の身の上は幾重にも、耶穌、聖母、炭坑會社にお頼み申す。」

「善助、お前は？」

「善助は所有品一切を甥の太吉へ記念に遣はす。」

「己——吉は神様が女房——寡婦には亭主孤兒には父親となつて、お救ひ下さるやうにと。」

「村夫子、お前は？」

「乃公は誰に遺言を残すものもない。」と悲しげに、

「乃公のために泣くものは一人も無いわ。」

「でこ松、手前は？」

「己等ア、あのな、籠の中に入れといた栗が腐ると大變だから、誰でもあの栗を出して……。」

「おい——この紙はな、そんなたは言を塗くる紙とは違ふんだ。」

「たは言ぢやアないや。どつきり栗があるんだから。」

「手前、お母があるだらう。お母に接吻でも送らねえかよ。」

「お母アは情夫と逃げちやつたア。」

「置やアがね。それから民、お前は？」

「民はカビと立琴を町也に遣る。太吉を強く接吻する。そして太吉への頼みは——一度泥内の小菊のところへ行つて、私の代りに小菊を接吻し、私の背囊の中に入れてある、乾干びた薔薇の蕾を小菊に返してくれるよう。」

すべてこの通りを村夫子が書きつけて、

「さアめいしくが署名をするのだ。」

「己は無筆だから十字を書いて置く。」と吉は云つた。

「さア、これで遺言が出来上つたから己やアいつ死んでもいいんだ。みんなもう己に詞をかけねえでくれ。そして静かに死なしてくれ。これがみんなと訣別だ。」

源助はかう云ひながら、私等の段へ降りて順番に私等三人を接吻し、それからまた上の段へ歸つて、吉とでこ松を接吻した。そしてみなと遠ざかり、石炭屑を盛上げて枕としながら、ころりと横になつたが、それから死んだやうに身動きもしなかつた。

遺書を書いた事と源助がこの通り死ぬ覺悟をした事は、全く一同の勇氣を失はせて了つた。石油燈は消されて再び舊の闇に返つた。われわれはまだ十三本の燐寸を持つて居た。それからは言葉を換すものもなく、死のやうな沈黙が『袋』の中を鎖して居たが、突然上の段のでこ松が叫び出した。

「おい、鶴嘴の音が聞える！」

でこ松が初めに、運搬車の音を聞出さなかつたら、誰も眞面目に聞かなかつたらうが、今かう叫ぶのを聞くと、みな飛立つやうに胸を躍らせながら、

「何だ、鶴嘴の音が聞える？」

源助までが起きて来て壁に耳をあてながら、その音を聞取らうとした。

「大丈夫だ！ みんな助かる！」と善助伯父は叫んだ。

「ウム、確かに聞える、こちらから叩いて見るが、い。」と村夫子の言葉に、一同は力の限り拍子を揃へて壁を打始めた。

すると程を隔てて同じ拍子の返事が壁を傳はつて聞えて來た。

「あ、助かつた！」

一同は感極まつて抱合つた。

救助

一寸茲でどうしてこの大浸水が起つたかを記さう。私等が坑内に降りた日の朝は、空がどんよりと曇つて居て、蒸暑く、今にも荒れでも來さうであつた。割葉を流るるデボヌ河の上流には夜來大雨があつたと見え、この朝恐ろしい勢ひで水嵩が増して居たのだ。然るに私等が坑内に降りてから一時間

もすると、空は一面凄まじい雲で蔽はれ、嘗て見た事もない大雨になつた。この土地は樹木の無い石許りの山間なので、少し雨が降れば今迄とてもすぐ出水の害がある位だから、今朝は左なきだにドン／＼増して來る水嵩の上に、この驚くべき雨を加へて谷々の水は一時に川に落ちこみ、遂に堅固の堤防を破壊し、その水は皆この第二炭坑の低地へ落込んで來たので、防禦の手段を取る間も何もない中に、すつかり坑内を水にし畢つたのであつた。

上に働いて居るものは手のつけやうも何もなかつたが、それでも決して手を束ねてはゐなかつた。會社の技師は人夫を指揮して落込む水を防ぐと共に、坑夫等の救助に取かゝつた。それでも第一の仕事場に働いて居たもの五十人許りは辛くも坑外に逃れ出て助かつたのである。残る二百五十人を助くる方法は、「村夫子」の想像した通り、まづ坑内の水を汲出す事と、直接に穴を掘下げるより外無かつた。

この二つの方法は直ちに實行に着手された。三つの坑井から運搬車で、また唧筒で水を汲上げに取かゝり、また掘下は技師の意見で、浸水の懸念がないと信ぜらるゝ舊坑の方に行ふ事とし、それも同時に着手した。そしてこの二つの方法は晝夜間斷なく繼續された。

掘下にかゝつたところは途中から地盤が非常に固くなつたために、少からず仕事の進行を妨げられた、その九日目には坑夫等の救助の望みなきに斷念し、この無益の勞力を續くる事を拒んだが、技師は漸くに宥め賺して、なほ勞働を續けしめたその翌日、坑夫の一人はどこかで幽かに大地を叩いて居る音を聞取つた。早速鶴嘴を捨てて耳をその片岩の層に當てて見たが、若しや間違ひではないかと、仲間の一人を呼んで自分の疑を話し、二人は暫らく靜かに耳を當てがつて居た。するとたしかに幽かな音が聞えた。

この報道が上へ傳はると、技師を始め、降りて來られるだけのものが皆降りて來た。技師は耳を壁にあてがつたが、餘り氣が昂ぶつて了つたので少しも聞えない。

外の坑夫にも聞えないので、皆が心の迷ひで聞いたのだと云ひ出した。

けれども音を聞き取つた二人の坑夫は、餘程老練の坑夫なので、技師は彼等が心の迷ひとは信ぜず、外のものは皆上へ追ひやり、自分と二人の坑夫だけ残つて、二人に命じ、鶴嘴で例の拍子を取つた場合の叫出しをさせ、それから三人は耳を壁につけ息を殺しながら返事を待った。

すると間を置いて幽かながらも、同じ拍子の返事が聞えて來た。二三度繰返して見たがその都度返事を受取つた。

最早少しも疑の餘地がない。坑内には確かに生残つて居るものがあるのだ。

この報道が火藥の導火線の如く町に傳はると、町中のもものはわれもくと、この第二炭坑に押かけた。それは浸水の報せの傳はつた第一日より寧ろ甚だしいかと思ふ混雜であつた。殊に犠牲になつたものの妻子や同胞や兩親などは、誰も彼も胸を躍らせ身體を震はせながら集まつて來た。

どれほど助かつてるだらう。お前家のもきつと無事に違ひない。私家のも大丈夫だらう！ 群集は皆こんな希望を持つて話し合つた。

けれども群集の好奇心を満足せしむる迄には、猶日を要した。

音響の極めて薄弱なところから、その距離のなほ甚だ遠い事は明かであつた。そしてその方向を確める事さへ困難だつたが、まづそれと鑑定さるゝ方向に穴の向をかへる事とし、坑夫も第一炭坑の方から腕拔のものを選抜つて來て、これに取かゝらせる事とした。

坑井の運搬車の方もいよく勇氣を得て、全力を濺ぎ始め、なほ水も餘程減つたところから、崩壊した入口の廻廊の發掘にも取かゝつた。

水の減つて来る事は私等の居る「袋」の中でも分つた。けれどもそれは空氣の抵抗を受けて居た水なので、はたがよほど減水するまではこゝでは分らなかつたのだ。

私等は拍子を取つた合圖の音響を聞取つて、今度こそもう助かつたやうに喜び合つたが、その時から二日も三日もたつやうに思ふのに、まだ救はれないで居ると、次第にまた減入り始めずには居られなかつた。その上に呼吸がもう大分に苦しくなつて來た。

口を利く氣力もなく沈み返つて居る折柄、忽ち何か「袋」の中の壁をひつかきながら走るやうに細かい連續した異様の音と、小さな土砂が水に落ちるやうな音が聞え始めた。

異様の音を確むるため、石油燈を點して見た。それは「袋」の下の方を走る鼠の群であつた。思ふにこれ等の鼠は、私等同様どこか空氣の袋を見つけて今迄忍んで居たのが、水が減つて來たので、食物を求めに、その隠れ家を出て來たのであらう。鼠がこゝまでやつて來たからは廻廊の方も天井まで水のつかつて居ない様になつた事は明かだ。

此等の鼠は私等の囚獄に取つては、ノアの船の鳩で、正しく大洪水の終りと知られた。「民、鼠を取つて呉れ、みんなで食べるから。」とで、松は私に聲をかけた。

鼠を捕まへるには鼠より敏捷こくなければならぬ。其中に鼠は皆どこかへ行つて了つた。

私は靜かに水際迄降りて、何程水が減つたかを見た。もう餘程引いて、水と廻廊の天井の間には可なりの隙が出来てるやうに見えた。突然私には或考へが浮んだから急いで私等の段々に歸つて來て、

「村夫子、鼠が駆廻り出したからは、もう廻廊の方へ行けるに違ひない。だから己等泳いで梯子段のところへ行つて下から呼んで見よう、そしたら誰かすぐ梯子段から助けに來て呉れるだらう。その方が掘下げて來るよりよつほど早いんだから。」

「いやそんな危険な事は乃公が許さぬ。」

「だって、村夫子、己等水の中では鰻のやうに泳げるんだもの。」

「空氣が腐敗してゐるかも知れぬ。」

「でも鼠が歩いてる位なら、大丈夫だらう。」

「民、それほどに云ふなら行つて來いよ。」と吉は口を挿んで「その代り己の時計をやる。」

「善助、お前、どう思ふかな。」と村夫子は善助伯父の意見を尋ねた。

「梯子段まで行けると思ふなら、やつて見るが、い。」

村夫子は暫らく考へて居たが、私の手を取つて、

「民、お前は勇氣のある兒だ。それほど行つて見ようと思ふなら、いつて見るもよからう。どうも乃公は無益と思ふけれども、出來なさうに見ゆる事が、却つて往々成功するものだ。どれ乃公等を接吻

して行くがよい。」

私は村夫と善助伯父を接吻して水際へ降りた。

「みんなで代り番に己等の名を呼んで下さい。それでないと方角が分からなくなるから。」

かう云つて私は水へ入つた。果して私の泳げるほど廻廊の天井は隙てるだらうか。隙てるも私の目的は果して達せられ、皆を救ふ事が出来るだらうか。それとも廻廊の彼方に私を待迎へて居るものは「死」といふ恐ろしいものであらうか。

私はそろ／＼泳いで進みながら、振返つて見ると、石油燈の光が丁度燈明臺のやうに、黒い水に映つて淡く見えた。

「どうだ。大丈夫か。」と村夫の聲が聞える。

「あゝ、大丈夫。」と私は答へた。

若しや頭を打ち合せぬかと用心して進んだが、天井との隙は次第に廣く、やがてその懸念を無用にさせた。併し私等の「袋」から梯子段に行く道の方向を確かむる事が甚だ困難で、そここゝに横道があるからそれに紛れ込んだら大變だ。廻廊の屋根や、壁を手探りにして行つただけでは不十分だが、それでも唯一つの手が、りがあつた。それは大地に敷いてある軌道である。この軌道を傳はつてさへ行けば必ず梯子段へ行けるのだ。

そこで私は時々足を下ろしては軌道を探つて見ながら、泳ぎ進む必要があつた。仲間の聲は遠くはる聲を後に、この軌道を頼りながら、私はそろ／＼と進んだ。

やがて仲間の呼ぶ聲が幽かに聞えるばかりとなつたので、私は可なり泳いで来た事を知つた。もう運搬車の音が「袋」で聞くより餘程強く聞えて居た。あゝ、私は程なく日の目を見る事が出来るだらう。そして仲間のものは私のために救はれるだらう。かう考へるので、私は一方ならず力附いた。

ところが氣がついて見ると、いつか私は軌道を失くして了つて居た。いくら足で探つて見ても無いのだ。そこで今度は潜つて手で探して見たが、やはりどうしても見當らない。

私は道を間違へたのだ。飛んでもないところへ來て了つたのだ。

此上は舊來た道へ引返さなければならぬ。けれどもどうして？

眞暗闇で右左も分らぬ上に、いくら耳を澄しても仲間の呼聲が聞えなかつた。呼聲も聞えぬところへ入り込んで了つたのか、それとも彼等が中休みして居るのだらう。

私は後へも先へも行けず、水の中にすくんで了つた。此まゝ死んで了ふのかと、何とも云へぬ果敢ない感じに襲はれたが忽ちまた仲間の聲が幽かにく聞えて來た。

方角が分つたので、手さぐりに引返しながら、凡そ十二尋ほど來て、また足を下ろして探ると今度は軌道に行當つた。どうも不思議と思ひながら、また少し後返りして探つて見ると、いかなこと、そこで軌道が中斷されて行方が失くなつて居た。

私は初めて軌道が恐ろしいあの水の勢ひに洗はれて押流され、どこかへ行方を失つた事を確めた。

東道が無くなつては、最早梯子段を尋ねる譯に行かぬ。残念ながら引返す外は無かつた。引返すとすると、もう危険のないことも分つて居るから、仲間の聲を頼りに、速力を早めて泳ぎ出した。不思議に仲間の呼聲には何だか新しい力があるやうに思はれた。私は程なく「袋」へ入つて来て聲をかけると「早く来いよ、早く来いよ。」と村夫子が喜ばしげに云つた。

「どうしても途が分らなかつた。」と私が云ふと、

「なに、分らんでもよい。掘下げが大分捗取つて来た。追つけ談話が出来るやうになる。もう人の聲も聞えるぞ。」

私は袋の斜面を匍上りながら耳を敏てた。

なるほど鶴嘴の音が、近くに聞え、坑夫等の話聲までが、繩の羽音のやうに幽に聞えた。

私は俄に元氣づいたが、同時に身體が氷のやうに冷たくなつた事を感じた。私は乾かし、暖める衣服がないので、傍に掻退けてあつた細かい石炭屑の中へ、顎まで私を埋め、善助伯父と村夫子はその上から私によりかゝつて呉れた。石炭屑はいつでも或温度を保つて居るものなのだ。

私はその通りに石炭屑に埋まりながら、仔細の話をした。

村夫子は、梯子段は見つからんでも、もう掘下げで助かるから大丈夫だと云つた。

その中に私の身體はいくらか暖まつて来ると、何とも云へぬ疲勞に襲はれ、夢圖となくうとうとなつて居た。

どれほど時間が立つたか知れぬが私が正氣づいたやうに、眼を開いた時には、彼方の坑夫等の音聲はよほど間近に聞え、もう蠅の羽音のやうでは無かつた。そして内にも談話が出来たらうと思はれた。

暫らくすると、私等は靜に發音された次の詞を明かに聞取つた。

「何人居るな？」

私等の中で一番大きい明瞭した聲を持つて居るのは善助伯父なので、皆に代つて答へた。

「六人！」

暫らく沈黙が続いた。疑もなく外ではもつと大勢居るものと思つて居たからだらう。

「おい、早く助けてくれ。もう死にさうだ。」と善助伯父は呼ばはつた。

「お前等の名は？」

「源助、吉、村夫子、で、松、民、善助」と善助は順々に呼上げた。

これ等の名が繰返された時は、外のものはみな片唾を呑んで聞き取つた。如何に感動的の刹那であらう。

これより先程なく交通が出来るとの噂が町へ擴ると、もう一時間も二時間も前から生理になつた二百五十の坑夫等の妻、子、兩親、兄弟、朋友などみなこゝへ集まつて来たので、生存者が僅かに六人と聞いた時の彼等の一般の失望は、想像に餘りあつた。それでも猶この六人の間にめいゝの待設け

た男を見出し得る事も、最後の望みをかけて、その名を知らんと犇めく刹那に、あはれ六人の名は續いて發表されたのである。

あ、二百五十の母、また妻の中で、希望の夢を事實にし得るものは、僅かに三人ほか無いのだ——それは善助と吉と源助の妻。かくて新たな希望と涙とは、再び割菓の町を漂よはした。

何人助かつたかを知りたい情は、袋の中の私等とても同じ事であつた。そこで善助伯父が聲を張上て、

「何人助かつたかえ？」

「けれども返事がない。」

「正太郎はどうしたか聞かしてくれ。」と源助の依頼に、善助伯父はまた聞いて見たが、それも返事がない。

「聞えないのかな。」

「なに、態と返事をせんのだらう。」

「もう幾日になるか聞いて見てくれ。」

これは向うから返事があつた。

「十四日」

あ、十四日間私等は「袋」の中に閉籠められて居たのだ——

「もうすぐ助けてやるから確かりして居る。そして仕事の手を動かせようと思ふなら、もう誰を仕か

けないで居れ。」

けれどもまア何といふ待遠しい事だらう。鶴嘴の音を聞取る毎に、それが最後で穴が明かと思ふ

と、またその次の音が聞える。今度こそと思ふと、次々といつまでも果しがないのだ。

「お前達は飢じいだらうな。」

「口も利けない位だ。」

「どうだ。最少し辛抱が出来るか。出来なきやアこゝから管を通して、汁でも注込んでやる。だがさ

つすると、よつほど時間を取るがいゝか。」

私等は相談の上、腹も腹だが、半時間や一時間なら辛抱するがよからうといふに一致した。

「それぢやア辛抱してるから急いで掘つてくれ。」

運搬車の方も勢ひ込んでやつてると見え、水は驚くほど分量が減つて來た。廻廊はもう脊が立つに

違ひないと村夫子は斷言した。

「水が減つた事を知らしてやれ。」

善助伯父がそれを傳へると、

「イヤ分つてる。ひよつとすると掘下より早く、廻廊の方から行けるやうになるかも知れぬ。——まア

暫時の辛抱だ。」

鶴嘴の音は却つて弱くなつた。それは一遍に突抜けて了ふと、土塊と一緒に私等を水に埋めて了ふ

危険があるからであつた。尤も穴は横に掘つて来たのである。

村夫子はまた私等に注意して、もう空気の爆發する心配もあるまいが、それでも若し穴が明いたら、大砲のやうな恐ろしい勢ひで、空気がそこから逃出すため風が起るに違ひない、怪我のないやう身を伏せて用心して居るがよいと云つた。

鶴嘴が岩を打つ響のために「袋」の上の方からは小さな石炭片が、壁を離れて水に落始めた。

不思議に私等は、救助の瞬間が近づいて来れば来るほど、氣力が無くなつて来た。殊に私は自分の身體が自分でどうにもならぬほどの懶を覚え、石炭屑に埋もれたまゝ、肘をついて半身を起す事さへも出来なかつた。そして私の身體はふる／＼と震へて居た。けれどもちつとも寒い感じは無かつた。

さうかうする中程なく、前より大きな石炭塊がバラ／＼と上から私等の段々へ轉げ落ちて来た。今度こそ穴が、上の方へ明いたので、私等はいくつもの石油燈の光でぐら／＼と眼の眩むを覺えた。

併しその瞬間に私等は再び黑白も分らぬ眞黒闇の中へ閉されて了つた。それは穴が明くと同時に起つた恐ろしい通氣が、龍卷のやうに土砂を捲いて穴から吹上げたから、石油燈が一時に消されて了つたのである。

風の抜ける凄まじい音は暫らくにして止んだ。すると私は突然廻廊の方の水の中、騒々しい音響の起るのを聞き取つた。何事かとその方を見ると、忽ち強い光明が廻廊の方からさして、幾人か水を極分て、こなたへ進んで来る姿を認めた。

「確かりしろ！ 確かりしろ！」

人々は口々に叫びながら進んで来た。「袋」の上からも光明がさして、上からも下りて来た坑夫等は、上の段のものの手を取つた。廻廊の方から眞先に「袋」へ上つて来たのは技師で、私は一言いふ間すらもなく、その手を抱取られた。

あゝ助かつたと思ふと、私は全く失神者のやうになつて了つた。

それでも私は全く知覺を失つた譯でもなく、自分が人に運ばれて、毛布に包まれ坑内から引揚げられてる事を知つて居た。

私は眼を閉ぢて居たのだが、忽ち眩しいやうな感じを覺えて、思はず眼を開けると、それは日の光で、まさしく私は坑内から運び出されたところであつた。

其瞬間白いものが私に飛びかゝつた。それはカビで、私を抱いて居る技師の腕に伸かゝりながら私の顔を嘗め廻した。同時に私は兩方の手を取られた。そして熱い接吻をされた。それは町也と太吉であつた。

私は四邊を見廻したが、恐ろしい群衆は眞中に通路を開けて、二列に竝んで居た。この群衆は少しも口を利かず、黙つて私等を見て居た。それは叫び立てたり何かして、私等の感情を刺戟せぬやうと、像て云ひ渡されて居たからであつた。口は利かなかつたけれども、より多くを語つて居た。

群衆の第一列に、私は眞白な僧衣と太陽に輝く金びかの裝飾具とを認めた。それはこの割菓の御堂

の坊さんが正装をつけて、私等の救助を祈るために来て居たのであつた。

私等が表れると坊さんは塵埃の中に跪いて祈禱を捧げた。

私等は事務所の中に設けられた寢床の上へ運ばれた。

二日たつと私は町也と太吉に連れられ、カビを従へて割菓の町を散歩が出来るやうになつた。私が通るのを見ると、町の人は皆立止つて私を眺めた。

中には私の傍へ来て、眼一杯涙を浮かべながら強く握手して行くのもあつた。

それかと思ふとまた苦々しげに私を見たり、また顔を反けて行くものもあつた。それは喪の服を着て居る人々で、一家の父、または働き手の倅が皆死骸となつて水に運ばれ、残る家族に憂目を見せて居るのに、なぜ誰一人泣く人もない風來の孤兒が助かつたのかと、苦々しく思ふのであつた。

中にはまた私を晝餐に引張込んだり、珈琲店の中に呼入れたりするものもある。

「さア一つ生理になつた話を聞かしてくれ。」

この通りにそちこちから引張風になされたが、大抵は断つた。それも一皿の料理や一杯の麥酒で、誰彼なしに話をして聞かせるのは、これほど辛いことは無かつたからである。

萬戸の音楽家

私は町の人に自分の物語りをするよりは、太吉や町也にその間の話を聞く方が餘程楽しかつた。

太吉は云ふ。

「僕は君が僕の身代りになつて死んだと思つたので、どんなに悲しかつたか知れなかつた。」

けれども町也のいふ事は違つて居た。

「僕は決して君が死んだとは思はなかつた。たゞ上の仕事が始まつて、こちらから降りて行ける迄に、君が生きててくれるかどうかと、そればかりを案じてたんだよ。僕は君が土左衛門になる筈はないと思つてたから、もしこつちの手當が早く運びさへすりやア、きつとどつかで君を見つけるに違ひないと、かう思つてね、太吉が失望して泣いてる時でも、僕は『なアに民は死んでやアしない、たゞ死にかゝつてるかも知れない。』ツてね。僕は逢ふ人に『人間は幾日食ずに生きて居られるだらう？ 幾日経つたら水が乾せるだらう？ 何時穴が開いたらう？』ツて聞いて許り居たんだよ。でも誰も僕の安心の出来るやうな返事をしてくれる人が無かつたんでどんなに心配してたらう。だから最終の日に技師が君等の名を聞いてで、松の次に民と呼上た時には、僕は泣出して地べたへ倒れて了つたのさ。その時誰か僕の背中を踏んで通つたけれども、そんな事にも氣がつかなかつた位、僕は嬉しくつて、何もかも忘れて泣いてたんだよ。」

町也が私の死なぬことを信じて居たといふ物語は、少なからず私に町也に對する満足と誇を感じしめた。

生残つた六人の間には離れ難い友情が成立つた。艱難を共にし希望を共にした事は私等の心を一つ

に結びつけた。

取分け善助伯父と村夫子とは私に對して深い愛情を持ち始めた。この二人の外に私等を助けて、眞先に私を抱取つて呉れた技師も、また殊の外私を可愛がり出し、丁度死ぬ兒を助けた親のやうな感情を持つやうになつた。一度私はその家の晩餐に招かれ、その娘のために、「袋」の中に閉籠つた十四日間の物語をして聞かせた。

誰も彼も皆私を割巢に留て置かうとした。

善助伯父は云つた。

「己はお前を坑夫に出世さしてやる。これから己達と一緒にこゝで暮すがいい。」

技師は云つた。

「何も坑夫をせずと、事務所でお前を使つてやらう。お前ならだんく〜技手に出世が出来る。必要な學問を教へてやらう。」

善助伯父は自身が再び坑夫の生活に返る事を少しも苦にせぬのみか、私が坑夫になつて、また坑内に入るといふ事を極めて自然の成行のやうに考へて居るのだ。けれども私には善助伯父の勇氣も無ければ、また押方の職業を二度とやつて見る氣はさら〜無かつた。炭坑といふものはなかく、廣大な、そして珍らしいものであつた。私はそれを見たのを満足に思ふけれども、もう堪能するほど見てゐた。

私は土の中で働くやうな性分には出来て居なかつたのだ。頭の上に空がないと私は生きてゐる氣がしないので、空なら雪空でも石炭の天井より遙かにました。云悪かつたが、その通りを善助伯父と村夫子にいふと、善助伯父は意外に思つて喫驚し、村夫子は私が鑛山生活に興味を有たぬ事を嘆息した。で、こ松に出逢つた時にその話をする、私は大馬鹿の臆病ものだといふ。

技師に對しては、私は善助伯父にしたと同じ返事をする事は出来なかつた。なぜならば技師は事務所でお前を使はうといふので、穴の中で働かせようといふのでは無かつたからである。そこで私は思ひきつて、自分の感情を打明けると、技師も失望しながら、

「どうも致し方がない。お前は冒険と自由の生活が好きなのだ。乃公にはこの上お前を留る權利はないから、好きにするがよからう。」

かう話が結着する迄には可なりの日がかつた。人々が私を割巢に引止にかゝつて居る間、町也は元氣のない顔をして何か考へ込んで居るやうであつた。どうかしたのかと聞いて見ても、どうもしないといふ答へて居た。ところが私はあと三日で割巢を立つといふ話をする、町也は私の頸に抱きついて、ほんとの事を白状しながら、

「ぢや君は僕を打捨らかしはしないんだね。」と叫んだ。

この詞を聞くと、私はちよつと平手で町也の頬邊をお見舞ひ申した。それは私を疑つた罰を思知らせるのと、この友愛の詞を聞いて、泣きたくなつたのを隠すためでもあつた。

實際に町也が斯う叫んだのは、深い友愛の情からのみ出たので、微塵も利害問題のためでは無かつた。町也は麵麩を得るためには、最早私の必要は無かつたので、相棒の私が無くとも、十分に獨立して行けるのであつた。

實際のところ町也の方が私よりも多くの才能を持つて居た。第一に私と違つて大抵の樂器は何でも行る。その外歌ふ事でも踊る事でも、狂言をする事でもみんな上手だ。美登里老人の口上ではないが、見物お歴々の方々のポケットに手を入れさせる事も、私より巧みだ。町也の笑を含んだ顔、優しい女の子のやうな眼、眞白な齒、憎氣の微塵もない、おッ開いた容子を見ると、見物は知らず識らず誘ひ込まれて、財布の口を弛めるのだ。町也には人がいや／＼遣るのではない。遣る事を喜んでやるのだ。そこに町也の人を惹つけるところがある。町也が一人で立派に稼ぎの出来る證據は、私が穴の中で押方をして居る間、町也はカビを連て稼ぎに出て居たが、人口も少い、儲けもない、悪い近所ばかり打つて居たにも拘はらず、八圓ほど稼ぎ貯て居たのでも知れやう。

その八圓と今迄に貯て居た五十圓を併せると、五十八圓になり、六十圓で王子様の牝牛が買へるものなら、あと二圓稼ぎ出せばいい譯になつたのだ。

炭坑に働くのは厭だつたけれども、割葉の町を立去る事は流石に悲しかつた。なぜなら太吉や善助伯父や村夫子に訣別しなければならなかつたから、併し私の愛した人、また私を愛して呉れた人から訣別するのは、私の定めつた運命であつた。

前へ！

立琴を肩に、背囊を背に、喜んで跳廻るカビを従へ、私等は再び青天井の下、垣々たる大道の眞中に立つた。

いよ／＼割葉の町を出外れた時には、私は勝誇つたやうな満足を感じずには居られなかつた。大地を足踏すると、心地のよい踏みごたへがあつて、坑内の泥を踏むのとは違つた爽かな音を立てる。ああ晴れやかな日の光、蒼々とした立木の色！

私等は割葉を出立する前日に長い間かゝつて道順の相談をしたのだ。其結果こゝから直接に鯖野へ行かずに、今が丁度温泉場の盛時だから、大變な廻り路にはなるが、まづクレルモンに行き、それからロワイヤー、モンドル、ブルブルと温泉場廻りをして行かうと極めたのだ。この發案者は町也で、割葉を打つて廻つて居る間、熊使ひの香具師と懇意になり、その香具師から金儲けをするなら温泉場廻りをするがいと教へられたので、その通り温泉場行を主張したのだ。町也はもつと錢が儲けたいので、町也の意見によると、六十圓ではまだどうも足りない、もつと出さぬとい、牝牛は買はれぬ。だからもつと金儲けして、飛切の牝牛を買つて行つたら、お直は一層喜ぶだらう、お直が一層喜べば、私等の幸福も一層大きくなるではないかと、斯ういふのであつた。

そこで割葉を出ると、私等はクレルモンの方向を擇んで進んだ。巴里から割葉に来る三月の間、私は町也に本と樂譜を讀む事を教へて來たのだが、今度もクレルモ

ンへ行く迄の途中暇さへあれば、稽古を續ける事にした。

併し先生が善い先生でないからか、それとも生徒が善い生徒でない爲なのか、まアどつちもどつちなのだらうが、前にも云つた通り、勉強の捗がちつとも行かない。町也は空想的なものはすぐ覺えるが、眞面目な文字はちつとも覺えない。

私はしびれを切らして、腹を立てながら本を叩いて、

「君のやうな感じの鈍い固い頭を持つてゐるものはないなア。」と叫ぶと、町也はちつとも怒らず、その優しい大きな眼で私を見て笑ひながら、

「全く僕の頭は固くつて鈍いんで、只擲つて瘤を拵へると、恐ろしく柔かくなるんだ。我太堀は抜目なくそれを發見しちやつたんで。」

かう云はれると私は腹の立てやうもなくなり、笑つてまた稽古を續けるのだ。

けれどもこれは本を読む話で、音楽の稽古になると全く違つて居た。今度はすつかり先生の方が弱らされて了ふのだ。先生の返事の出來ないいろくの疑問を連發するので、その都度先生は行詰つてどれほど威嚴を損ずるかも知れない。

一寸先生の行儀も質問の例を擧げると——なぜ樂譜は同じ原音譜の上のみ書かれぬか？なぜ上る時に嬰音譜を用ゐ、下る時に變音譜を用ふるか？なぜ一曲の初めの節と終の節とは時間が不規則なのか、なぜグキオロンの調子を合せる時、或音に合して、外の音に合せぬのか？

この最後の質問に對しては、グキオロンは私の習つた樂器でないから、合し方の研究はしないと云ひ逃れた。併しその外の問は音楽の原理に關する事だから、返事が出來ぬと、音楽の先生の威嚴は、全く失はれる譯だ。

併し私は決して知らないといふ事は云はなかつた。善助伯父が私に石炭はどうしてあると聞かれた時に「掘つたら有るから有るんぢやア無いか」と返事した通り、私も濟して答へた。

「それはみんなさうする事になつてゐるのさ、音楽の規則なんだよ。」

町也は規則だと云はれて、規則に反抗して、不平顔をするやうな兒ではなかつた。けれども口をあんぐり開いて、眼をバチ／＼させて、私を見る容子といふものは、決して私の心に誇りを感じしむる性質のものではなかつた。

すると或日町也は一日何か考へ込んで居て、私が誘ひ込まうとしても決して口を利かない。いつもお喋舌で陽氣に笑つてばかり居る町也に取つてはよほど不思議の事實だ、

なぜ黙つて居ると責抜いた結果、町也は漸く口を切つた。

「そりやア君はね、い、先生に相違ないけれども、誰だつて僕を、君のやうに親切に教へてくれる人なんか無いんだから——だけでもね——」

「だけでも、なに？」

「僕はね、多分君にも知らないことがあるんだと思ふよ。だつて君、學者でも知らない事があるたら

う。ね、さうぢやないか。君はいつでも『さうする事になつてからさうするんだ。』ッていふけれど、もね、それは君が先生に教はらなかつたからなんだらう。だからもし君が許してくれるなら、音楽の本を買つて——本と云つても古本か何かで安いのをさ。そして君と一緒にそれを讀んで見たらどうかと考へてるところなんで——。」

「ウム、そりやアい、考だ。」

「あ、君もさう思つてくれると嬉しい、君は本で習つたんぢやアないから、本の中にはきつと君のまだ教はらない事があると思ふよ。」

「だがどんな、本でも、い、先生には叶はない。」

と私はいくらか當つて云つた。町也は巧くこの詞を利用して、

「お、君がさう思ふなら僕はまだ云ひたい事があるんだ。實は僕は一度、たつた一度でい、から、眞實の先生のところへ行つて、いろいろ質問して來たいと思ふんで——。」

「ぢやア此間君が獨りで稼いで居た時にすれば、善つたのねえ。」

「でも眞實の先生のところへ行くと、どつさり金を出さなけりやアならないもの、僕は君の金に手をつけては濟まないから——。」

町也が眞實の先生といふので、私の自尊心は大分に傷けられたが、同時にこの最後の詞は深く私を動かした。

「君はあんまり人が善過る。だつて僕の金は君の金ぢやアないか。君は僕よりも餘計に儲けるんだもの。君の好きなほど先生のところへ通つたらい、んだ。ぢやアかうしよう。君がその氣なら、二人で先生のところへ行かう。そして僕も知らない事を教はらう。」と私も本音を吐いた。

私等の求める眞實の先生といふのは、村の舞踏の囃方などの事ではない。眞實の藝術家——大音楽家で、小さな村などには逆も住んで居ず、大きな重要な都會にはか見出せぬ眞實のえらい先生なのだ。私が早速地圖を出して調べて見ると、温泉場の方に行く途中に、萬戸といふ町がある。重要な大きな都會であるか、どうかちつとも知らぬが、地圖には太い文字で書いてあるところを見ると、きつと大音楽家なども居る大きな町なのだらう。私は私の地圖を信用しない譯には行かなかつた。

そこで私等はこの萬戸へ行つた上で、大音楽家を見つけ、思ひきつた金を奮發まうと、かう覺悟を極めて道中を急ぎ始めたのだ。

丁度萬戸に行く道中はロゼール縣の淋しい山や荒地つゞきの原の中に、そこ、に散らばつて居る貧しい村々を過ぎて行くので、われ々の收入とても至つて手薄なものであつた。この調子では萬戸といふ町も大した都會ではあるまいと悲觀しながら、進む中に、やがて萬戸に辿り着いたが、その時は夜に入つても居たし、疲れ抜いても居たから、取敢ず旅籠を見つけてそこへ落ちついた。

町也の眼には萬戸の町が、どうも音楽の大先生などの住んで居さうな重要な都會に見えなかつたので、頻りにそれを氣にし始めた。そこで私等は食堂へ下りた時に主婦に向つて、若し此町に音楽を教

へる善い先生があるかどうかと聞いて見た。

すると主婦は、問ふものも問ふものだといふやうな呆れた顔をしながら、

「まアお前さん等はよくく物を知らない人達だね。ぢやア雁寺先生の名を聞いて来たんぢやアないのかえ？」

「私達は遠方から来たんで。」と私は云つた。

「ぢや、よつほど（と力を入れて）遠方から来たの？」

「伊太利から。」と町也は答へた。

主婦の呆れ顔は漸く舊に返つた。そしてそんなに遠方から来たのなら雁寺先生の名を知らぬのも無理もないといふ顔をした。若し私が里昂から来たとかマルセイユから来たとか云へば、雁寺先生を知らぬやうな、そんな無教育の子供に用はないと、相手にならなかつたに違ひない。

「大分巧い工合らしい。」と私は伊太利語で町也に云つた。

町也の眼は輝いて居た。疑ひもなく雁寺先生は町也の間に答へてくれるだらう。さうする事になつ

てるからさうするのだといふやうな事は云はないだらう。たゞ或恐怖心が私の胸に湧いた。そんなに有名な大先生が、私等のやうな見る影もない子供等に教

へてくれるだらうか？

「大變に忙しいんでせうね、雁寺先生は？」と私は主婦に聞いた。

「あ、それはね、忙しいだらうともね、あの人が忙しくない筈は無からうぢやアないか。」

「私等が明日の朝行つたら逢つて呉れませうか？」

「それは逢つてくれるだらうともさ。お金さへ持つて行く人なら。」

そこで私等は安心しながら、寢床に入つたが、翌日そのえらい大先生に聞いて見ようといふ質問の個條を二人は長い事相談し合つた。

さて翌日になると、注意してお化粧をしながら——と云つても別に着換がある譯でもないから、綺麗に塵埃を取つて、町也はヅキオロンを私は立琴をめぐり用意しながら宿を立つた。

カビは例の通り私等について出ようとすることを、今日ばかりは綱でちやんと厩の中へ括りつけた。

萬戸の有名な大先生のところへ犬と一緒に推參するのは、いさゝか體面に關すると心得たからである。

私等は先生の宅だと教へられた家の前へ来て見たが、何だか間違つて教へられたのか、自分達の間違つたのか、ちと容子が怪しい。この家の店先には理髪道具香水などが置いてあつて、鬚剃に使ふ二つの銅の皿が入口の左右に吊つてあつた。どうもそれが音楽の先生の看板とは受取兼ねた。

如何に見ても理髪店とほか判断しかぬるこの家の前に立ちながら、私等が迷つて居ると、そこを通る人があつたから呼止めて、雁寺先生の家を聞いて見ると、

「そこだ！」と云つてこの理髪店を指さした。

どういふもので音楽の大先生が、理髪店と同居して居るのだらう。何だか旅籠の主婦の言葉も怪しくなつたが、併し思ひ切つて店へ入つて見た。

店の中は二つに仕切られて、右の方には鏡やら刷毛、櫛、香水、チツクといふやうなものが棚に並び、左の方の仕切内には、壁やまた長榻の上に、何挺ものヅキオロンや、クラリネット、コルネット、ヅキオロンセルといふやうな種々の楽器が引懸られたり、立かけられたりしてあつた。

「雁寺先生と仰しやるのは？」と町也は店の中へ言葉をかけた。

小倉のやうにちよかくした、元氣さうな小男が、一人の百姓の顔を剃つて居たが、低い胸間聲で答へた。

「それは己の事だが——？」

私は町也に、理髪業兼帯の大先生などは、私等には用はない、この男に教はるのは窓から金を放るやうなものだと眼顔で知らした。ところが町也にはそれが判らないのか、それとも私の云ふ事を聞かぬのか、悠々と椅子に腰を卸して了つて、

「このお客の鬚剃が済んだら、私の髪の毛を刈つて貰へますか？」

「ウム、刈つてやるとも何なら剃つてもやらう。」

「有難う、いゝえ、今日は刈るだけでいゝんで。今度目にこゝを通る時剃つて貰ひますから。」

私は町也が済まし返つて居るのに呆氣に取られた。すると町也は眼顔で、腹を立てるなら少し待つてからにしてくれと懇へた。

私は飛んだところへ来て了つたと苦り返つて居る中、大先生は百姓の顔をすつかり片づけたので、町也を鏡の前の椅子につかせ、白金巾を町也の頸に捲きつけた。町也は早速、

「小父さん。」と呼かけて「あの私等は、音楽の事で議論をしたんですが、誰も聞いて見る人が無くて困つてるんです。小父さんのやうな大先生なら、きつと得心の行くやうに教へて下さるだらうと思ふんですが……。」

「ウム、どんな事が判らないんだ。一つ云つて見るかい。」

私は町也の策略を知つた。町也はまづこの理髪店の親方兼音楽家が、どれほどの力を持つてるか、試しにかゝつて居るので、もし自分の質問に對して、一々立派な答が出来たら、それこそ飛んだ儲けもの、散髪料を奮發んだ丈で、教授料が踏倒せるといふ肚なのだ。町也もなか／＼食へぬ代物だと私は思つた。

「それでは小父さん。なぜヅキオロンの調子を合はせる時、或音に合はして外の音に合はせないんです？」

大先生は今町也の長い髪を櫛で梳てるどころだつたが、私はこの先生もきつと、私が町也に答へて居たやうな返事をするに違ひないと、まづ可笑しくなつて、クス／＼と下を向いて笑つた。

「それが、その、ヅキオロンの合せ方なだから仕方がない。ちやんと規則になつてるんだ。」

かう云つたやうな返事を、この大先生はきつとするだらうと私が思つてると、少し宛が違つた。

「ウムその事か。ヅキオロンの調子を合せる時は、まづ楽器の左から二番目の線を放した音『ラ』を音又の自然の音に合せなければならぬ。そこでヅキオロンは『ラ』の音が基礎になる。『ラ』の音を極た上で、外の線に第五音符第五音符と合はして行くのだ。よく合つたヅキオロンの四つの線は放したまゝだと、皆第五音符になつて居る。第四の銀線『ソル』は第三線の『レ』と合ひ、その『レ』はまた第一線の『ラ』と合ひ、第二線の『ラ』は第一線乃ちシャントレルの『ミ』と合ふのだ。だから合せる時にはさうして合せるのだ。」

もう私は笑ふどころでは無くなつたが、私の代りに却つて町也が笑ひ出して居た。私を嘲けつて笑つて居るのだらうか。それとも満足な返事を聞いて喜び笑ひをして居るのだらうか。

町也のにこ〜顔に引かへて、私は呆氣に取られたまゝ、口あんぐり、よほど間の抜けた顔をして、町也の周囲を廻つて鉄をちよき〜云はせながら、講釋をして居る床屋の主人を眺めて居た。その講釋が私には全く非凡に聞えたのだ。

親方は突然私の前に留まりながら、

「何でもお前なんだらう、間違つた事を云つたのは？」

どうも私は散々な目に逢つた。

扱髪を摘れて居る間、町也は追っかけひっかけ、いろ〜の質問を連發したが、この理髪店はちよつ

とも淀むところなく確實な説明を與へるのだ。

その中に散髪も済むと、今度は先生の方からいろ〜の質問を試みて、とう〜私等がこゝへやつて来た目的を知つて了つた。するとから〜と笑つて、

「どうもお前達の手にすつかり乗つちやつたな。怪しからん子供等だ。」

併し私よりも怪しからんのは町也で、その割として一つヅキオロンを弾て行けと云はれた。町也はちつとも猶豫せず、自分のヅキオロンを取ると、轉舞の一曲を奏でて聞かした。

理髪師は手を拍て喝采しながら、

「お前、それで音楽を知らないといふのかえ！」と大機嫌である。

町也はヅキオロンを傍に差置くと、壁に懸てあつたクラリネットを取上げて、

「私はクラリネットも吹けるし、喇叭も吹ける。」

「ぢやア一つ吹いて見ろ。」

町也は順々にクラリネットと喇叭を吹いた。

雁寺先生は感に堪へた風で聞いて居たが、

「この兒は音楽にかけては神童だな。お前が若し己と一緒に居るなら、立派な音楽家に仕立てやる。二東三文の音楽家ぢやアないぜ。大先生にだぜ。その代り午前丈は下割をするのだ。午後は己が音楽の稽古をしてやる。己が理髪師だからと見くびつたら大違ひだぜ。己も食つたり飲んだり寝たりしな

けりやアならんから理髪師もして居る。それ、あの有名なこの佛蘭西の大詩人ジャスマンはやつぱり理髪師をしながら詩を作つて居たのだ。己もそれと同じ事よ。アジャンには大詩人のジャスマンが生れ萬戸には大音楽家の雁寺が生れたんだ。

私は心配になつて町也の顔を見た、何と云つて返事をするだらう。私はこゝで唯一人の友達、仲間、兄弟に訣別れて了はなければならぬのだらうか。私の胸は一杯になつた。考へて見ると丁度白鳥號で千島夫人が長く私を世話しようと言つた時のやうだ。けれども私は千島夫人から私を引離した美登里老人のやうな強い氣にはなれなかつた。

私は町也に向つて、感情に充ちた聲で、

「僕の事はどうでもいゝから、君さへ善かつたらこゝに居給へ。」

けれども町也は突と私の傍へ寄つて、私の手を取りながら、

「どうして僕が君と訣別られるものか、どんな事があつても決して！」さう云つて雁寺先生に向ひ「小父さん、有難う。けども私にはそれは出来ないです。」

併し雁寺はなほいろくくと説勧めた。自分の手で初歩の教育をした上で、鶴巢に送り、鶴巢から巴里の音楽學校へやるやうにしてやらうなどと、熱心に説いた。誰でもこんなに云はれて心の動かぬものはあるまいと思はれたが、けれども町也は同じ事を繰返した。

「民と訣別れる事は決して！」

雁寺先生も漸く諦めたらしく、

「どうもそれほど仲間と訣別れるのが厭なら仕方がない。それではお前に何か記念の品をやらう。」

かう云ひながら柵の抽斗を頻りに掻探して居たが、一冊古ぼけた本を取出して來ると、町也に與へ、

「これを読んだらお前の利益になる事があらう。」

それは「音楽原理」と題した、表紙なども千切さうになつた使ひ古しの本だつたが、先生は机の上からペンを取上ると、その第一頁に、

「今日われを訪へる一小兒に與ふ、他日彼若し一個の音楽家とならば、時にまた萬戸の理髪師を想ひ起すならん」と書いて渡した。

私はこの町に外の音楽の先生があつたかどうかは知らぬ。けれども萬戸の理髪師雁寺先生の名は、終生私と町也の記憶に残つた。

王子様の牝牛

萬戸の町を出る時は、私の町也に對する愛は更に一層深くなつた。

町也は私に對する友情のために雁寺先生の申出を拒絶したのだ。雁寺の許に留まりさへすれば最早何の苦勞もするに及ばず、安全に氣樂に音楽が習へて、將來は一廉の財産を作る資本が出来るのに、

全く私を思ふため、未来の宛もなければ、その日その日の生活も不確實で、明日の事は猶更分らぬ大道生活を續ける覺悟をしたのだ。

私は町也の手を強く握つて、

「僕は今日といふ今日君と僕は死ぬにも生きるにも同じ運を持つて生れたんだと知つた。」といふ町也は微笑しながら、その大きな眼で私を見て、

「僕はもつと前からさう思つて居た。」

「音楽原理」が手に入つてから町也の進歩は著しくなつた。けれども温泉場へ行く迄の途中は至つて寂れた地方で、百姓は固く財布の口を絞つて居るから、なるべく早く目的地に達するため、朝から晩迄多く歩き詰めなので、實際に勉強する時間は少かつた。

その中に私等は目的地について温泉場巡りを始めたが、熊使ひの香具師は果して誠は云はなかつた。私等は毎日豫想外の稼ぎ高を取りあげる事が出来た。

その稼ぎ振も町也の方が私よりは上手で、私にして見ると、見物が集まりさへすれば、何でも構はず一生懸命に弾始めるが、町也はそんな初心な事はしなかつた。まづ見物の種を吟味し、物にならぬと思ふと、見物が集まつても弾きも吹きもしないので、殊に物になると見定める事が上手だつた。

我太堀の學校では公衆の慈善に懇へるといふのが主義なので、他人の同情を惹く方法は何でも研究して居たから、町也も不思議なほど見物心理といふものを心得て居た。留心町のあの我太堀の納家の

申で、町也から見物がどういふ時に金を呉れるとか呉れぬとかいふやうな話を聞いて驚いた事があつたが、今度といふ今度、私は温泉場の町也の目端の利せ方に全く敬服して了つた。

此地に来て居る浴客の大部分は巴里人で、町也に取つては昔馴染であつたから、殊にその呼吸を心得て居たのだらう。若い貴婦人が黒い喪の服を來て僧院の方から來るのなどを見ると、町也はかう云つた。

「氣をつけ給へ。悲しい曲を弾んだ。いゝかえ。そしてあの女に、死んだ人を思ひ出せるやうにしなきやアいけない。若しあの女が泣けばもうしめたもので、きつとどつさり賃を置いて行くんだから。」
モンドル温泉場には俗に「客間」と呼ばれる散歩道の一部があつた。かなりの廣い場所に一面五點狀に木を植ゑたところで、その木が見事の影を作つて居るので、浴客はよくこゝへ來て、散歩したり休憩したりして居た。町也はこの「客間」の客種をよく研究し、その時々の見立によつて、私等の出したものを取りかへるので、殆んど失敗した例は無かつた。

私等は青白い顔をして、悲しさうに椅子の上に腰を卸して居る病人を見ると、少し離れたところへ陣取つて、流し目にその方を注意しながら、何かさぐりに弾て見るのだ。若しその人が腹を立てた容子を見て取れば、私等はすぐ外の場所に立去り、これに引かへ、若し聞耳を立てる風なら、もつと近よつて纏つた曲をやり、カビに盆を唾へて傍へ行かせると、決して足蹴にされたり何かの憂目を見る事は無かつた。

けれども町也は子供等を惹つける事が最も得意で、ダキオロンの弓の動かし方一つで子供等を自由に踊らせ、また笑顔一つ見せた丈でふくれた兒の機嫌をすぐ癒すのだ。私にはどうして町也にそんな骨があるのか知らぬが、事實はまさにその通りであつた。

温泉場廻りは大成功で、私等はすべての雑用を差引き、なほ二十九圓許り稼ぎ出す事が出来た。これ迄に蓄へた五十八圓と合せると、都合八十七圓程になるから、もう此上に儲ける必要はなくなつた。一刻の猶豫もなく鯖野に出立すべき時は今正しく来たのである。

丁度此頃途中の卯瀬の町に大きな家畜の市があるといふ話を聞いたので、これ幸ひとそこへ立寄つて行く事にした。今日まで食ふものも食はぬほどに儉約して貯込んだ財布の底を叩いて、長い間話し合つた居た牝牛を、この町の市で買つて行かうといふ寸法なのである。

ところが今迄夢見て居る間は善かつたが、さていよいよ牝牛を買はうといふ段になると、そこに思ひもよらぬ當惑な問題が起つて来た。

それは私等がこれまで空想に描いて居たやうな上等の牝牛を、どうして見立ようと云ふ、私等に取つて重大な問題である。私は善い牝牛の見立方を少しも知らぬのみか、町也とても同様なのであるから、これにははたと當惑した。

殊に私等の心配を増したのは、善くこれ迄旅籠などに泊り合した客の談話を聞いて居た、博勞や牛賣商人の奸策である。彼等の詐欺手段に關する様々の物語りは、添て私等二人を戰慄せしめて居たの

だ。或百姓は牛市で、この上もない見事な尻尾の牝牛を買つた。その尾を振れば顔までも届くやうな長い毛で、身體中の蠅を一遍に追拂へるから、それだけでもう大した牝牛である。百姓は大自慢で歸つて来たが、翌る朝牛小屋へ行つて見ると、その大事の尾が落ちて居た。それは掃へもの、附毛であつたのだ。また一人は偽物の角をつけた牝牛を賣りつけられた。この外にまた乳の偽もの、牝牛を買つたものもある。折角私等が苦勞に苦勞を重ねた末、漸く買へるやうになつた牝牛がそんなつかませものであつたらそれこそ大變だ。

併し附毛の尻尾については、町也は一向驚ろかなかつた。それは力一杯尻尾に吊下つて試して見るから大丈夫だといふ云草で、また若し風を入れて膨らました乳ならばこれも一向苦にならぬ。長い大きな針を持つて行つて突いて見ればすぐ分るといふのだ。

なるほどかうして試せば間違ひはあるまい。附毛の尻尾であつたら一遍に取れて了ふだらう。また偽物の乳なら忽ち暴露のだらう。けれども若し眞實の尻尾だつたら町也はひどい事足蹴にされずには済むまい。また眞實の乳を針で刺されたら、これとて牝牛の方が容赦をせぬに極つてる。

蹴られたり角で突かれる事を考へたので、町也の空想はすっかり破れて了つた。私等はいよいよ不安の状態に残る事になつた。もしお直婆やに、ちつとも乳の出ぬ牝牛や角のない牝牛などを牽いて行つた日には、飛んでもない事になつて了ふ。

私等の聞いた話の中に、かういふいかもの商人が、獸醫のため、すっかり化の皮を剥れたといふ止

氣味よいのがあつた。私等も若し獸醫を頼んでそれに見立てて貰つたらきつと奸計を逃れる事が出来るだらう。そのため大分の禮金を取られるだらうが、其位の事には替へられぬ。そこで私等もいよいよ獸醫を頼むといふ事に相談を極めて、それからはいくらか安心しながら道中を續けた。モンドルから卯瀬までは二日間の道程だが、私等は道を急いだので、二日目の午過にはもう卯瀬の町へ来て了つた。

御存知の通り卯瀬はもう私の郷土なのだ。美登里老人が初めて鍔打の靴を買つて、私を喜ばせて呉れたところも卯瀬で、私が初めて公衆の前に表はれ、喜劇「ジヨリカール先生の下男」またの名「二人の中の一番馬鹿な人は人の思ふ方ではない」を演じたのも卯瀬だ。

あゝ哀れなジヨリカール！ 英吉利の陸軍大將の赤い軍服を着た彼の姿は、最早求むる事が出来ない。伊達なゼルビノ君も、優しいドルス嬢も、もう居ない。

隣れな美登里老人、あゝ私は永遠に老人を失つたのだ。最早再び銀のやうな頭を擡げ胸を前へ突出し、鋭く横笛を吹きながら足取面白く一座を率ゐて進む老人の姿を見る事は出来ない。

こゝを立つ時一座の勢揃ひは六人であつた。然るに今こゝへ歸つて来た一座の数はたゞ私とカビの二人を數ふるのみとなつた。この考へは私の卯瀬への乗込に何とも云へぬ悲しい色をつけた。そして私はそんな筈はないと打消すに拘はらず、どの辻でもどの辻で、美登里老人の毛皮を着た姿が眼に着いて、よく老人の口癖にした「前へー」の詞が耳元で聞えるのだ。

私は老人が私を藝人の服装にするため、古着や帽子を買つて呉れた店をふと見つけて、漸く滅入た心を引立てた。店の有様は以前とちつとも異ならず、入口にはその時あゝ綺麗だなと思つた金筋入の古軍服が今以て下つて居、陳列棚の中には、同じ古鐵砲や古石油燈が雜居して居た。

私は始めて興行の皮切をした場所。——ジヨリカール先生の下男、乃ち二人の中の一番馬鹿な方を演じて、見物お歴々に御覽に入れた場所を町也に示した。カビはそれを思ひ出したらしく、頻りに尾を振つて居た。

私はまた美登里老人と一緒に泊つた宿を見つけたので、二人はそこに落ちつく事とし、荷を卸して一寸休息したが、まだ早いのですぐ獸醫の番地を尋ねて出かけて行つた。

この獸醫はもう五十餘りの中老人であつたが、快よく私等に逢つてくれた。併し來意を語ると、また外の人同様笑ひ出し、

「併し市には藝をする牝牛は出ないぜ。」

「いゝえ、藝をさせようと云ふんぢやありません。善い乳の出る牝牛が欲いんです。」と私のいふ後から、頻りに尻尾の事を氣にかけて居た町也は繼足した。

「そして眞實の尻尾のある奴なんです。」

「私等は牛賣が悪い事をして買手を欺す話を聞いて來たんで、どうか先生にいゝ、牝牛を見立てて頂きたいんです。」

「ウム、そしてお前方は何しに牝牛を買はうといふのぢやな。」
そこで私は私等の目的を掻つまんで話して聞かせた。

「お、さういふ譯か。お前方は感心な子供等ぢや。それでは乃公は明日の朝お前方と一緒に市に行つて見立ててやらう。乃公の見立てるのは尻尾をくつ附けたのとは違ふぜ。」

「角も眞實の角の。」と町也は云つた。

「さうとも角も眞實の角のぢや。」

「乳も膨らした細工物でない。」

「さうとも乳も眞實の乳のぢや。」言で云へば御前上等の代物ぢや。併しそれは、ロハでは買へないが承知か。」

私は答へず、お寶を大事に包んで持つて来たハンカチを解いて見せた。

「それはえらい。では明日の朝七時にこゝへ来るがよい。」

「そして先生、お禮はどれほどあげたらいいんです。」と私は聞いた。

「何ぢや、お禮？ は、そんなものは何にもいらぬ。この乃公がお前方のやうな感心な子供から、禮金など取ると思つて居るか。」

私はこの親切な獸醫に何とお禮を云つて善か知らなかつた。併し町也は何か考が湧いたらしく、
「先生は音楽はお嫌ひですか。」

「いやどうして、大好ぢや。」

「夜は何時頃にお休みになります。」

「さうさの、まづ九時の時計が鳴つてからぢや。」

私等は明日の朝七時に来る約束で、こゝを辭したが、私は町也の考へを悟つたので、獸醫の宅を出ると、

「君は合奏を聞かせる積りなんだらう。」

「ウム、さうなのさ。丁度寝る時刻を見計らつて、暮夜吟樂を演奏しようぢやないか。暮夜吟樂は誰でも愛する人に、こつちの思ひを知らせるため、する音楽だから……。」

「あ、君はほんとにいゝ事を思ひついたね。ぢやア早く宿へ歸つて稽古をして置かう。大道で金を取つてやる時は、出来不出来はどうでも善いが今夜は金を取らないんだから、念入にやらなきやならないからね。」

九時二三分前に私等は——町也はヅキオロンを抱へ、私は立琴を背負つて獸醫の宅の前へ來て居た。

町はもう暗くなつて居たが、月が程なく昇るので街燈は儉約されて點されずにあつた。店はもう皆鎖されて、通行人は至つて少かつた。

九時の時計がどこかで鳴るのを聞くと、私等は暮夜吟樂の演奏に取かゝつた。この狭い靜かな町で

鳴らし始めた楽器の音は、至つて反響の善い樂堂の中で演ずるかのやうに隅から隅に響き渡つた。そここの人家の窓が開かれて、夜の頭巾など被つた顔が表はれ、そして今ごろどうした譯かと、窓から窓へ聲をかけ合つた。

獸醫は四辻の角の小さな圓い塔をもつた家に住んでゐるのだが、忽ちその塔の窓の一つが開いて、私等の友——獸醫の顔が現れた。獸醫はすぐ私等を認めて、私等の目的を察したのであらう。手を振つて音楽を止めさせてからかう云つた。

「今、門を開けてやるから庭でやるがよい。」

すぐ門が開いて私等は導き入れられた。獸醫は私等二人にめい／＼強く握手をしてくれながら、「お前方はどうも正直な子供等ぢや。けれどもまた不注意な子供等ぢやな。大道で夜中に樂器など鳴らしてたら、安眠妨害で巡査に曳いて行かれるがな。」

私等の合奏は庭の中で始まつた。庭は大した庭ではなかつたが、一寸洒落て居て、隅の方には、すつかり蔓草で圍壁と天井を作つた、青葉の隧道があり、その下には庭園用の卓子や椅子などが置いてあつた。

獸醫は大勢の子持なので、私等はすぐ可なりの聴衆で取まかれた。この青葉の隧道の中へは三四挺の蠟燭を點し、その下で私等は十時ごろまで演奏を續けて居たので、一つの曲を終ると、子供はまた次をと引切なしに望むのであつた。

若し彼等の父が私等を戸口へ送り出さうとしなかつたならば、みんな寢る事を忘れて聞いて居たのだらう。「この兒等には早く歸つて寝させるがよい。明日の朝七時にこゝへ来る約束なのぢやから。」と獸醫はわが子等を諭した。

けれども獸醫は私等を唯は歸さなかつた。この青葉天井の下で、一寸した甘しい夜食までも御馳走してくれた。その親切の嬉しさに、私等はまたお禮心で、連れて来て居たカビに二つ三つの滑稽な藝當をさせ、子供等に見せた。すると子供等は大喜びで、獸醫もこの上ない満足の容子であつた。私等

が宿へ歸つた時はやがて真夜中近くであつた。夜間はあんなに静かだつた卯瀬の町も、翌る朝になると、喧囂の音と活動とに充ちて居た。夜の明る前から、私等は引切なしに荷車の轆る音、市場に導いて行かれる馬の嘶き、牝牛の呻き、羊の鳴聲、百姓の語り騒ぐ聲など絶間もなく起るのを聞いて居た。

私等はなかな／＼ゆつくりしては寢て居られなかつた。早々に起出して下へ行つて見ると、宿の庭は大混雑で、何臺もの馬車が隙もなく詰り、晴衣を着た百姓等が、彼等の手を取つて馬車から大地へ卸すと、女等は裾を振つて塵埃を拂ひ、男等も身體中を振つて居た。

往來はまた市場へ行く男女で雜鬧を呈して居た。私等がちやんと支度をして了つた時はやつと六時で、約束の時間には一時間も間があるから、私等はその間に一度市場へ行つて豫め牝牛を見立てて

置かうと相談し、早速二人で市へ出かけた。

市へ来て見ると、まア何といふい、牝牛ばかりだらう。どんな色のでもどんな大きさのでもある。太つたのもあれば瘠せたのもあり、轡を連れてるのもあれば、大きな乳房を地に引摺つてるのもある。牛の外に嘶いてる馬もあり、幼馬を嘗めてる牝馬もあつた。土ほじりをして居る豚や、締殺されるやうに啼いてる兒豚もあり、その外、鶏、鶩、何でもあつた。けれども私等はそんなものには眼も呉れない。牝牛ばかりを眺めて歩いて居た。

三十分ばかり廻つて居る中に、これならばと思ふ牝牛十七頭を見立てた。その中でも三頭は赤い牛なので擇び、二頭は白いので擇んだ。私は「赤」の通り赤牛を欲しいと思ひ、町也は白牛を買へと勸めるのだ。

七時に獸醫の家へ行つて見ると、獸醫は私等を待つて居たので、早速また市へ出かけながら、途々も私等の欲しいと思ふ牝牛はこれくだと説明した。それは一言で云へば澤山乳が出て少しほか食べぬ牝牛なのだ。

さていよいよ市へ来ると、町也は自分の見つけて置いた白牛を指さして、

「私はこの白がい、と思ふんです。」

私はまた私で、これまた先刻目星をつけて置いた赤牛を指さし、

「この赤が一番い、でせう。」

併し獸醫はちらりと見た語り、白の前でも赤の前でも立止りもしなかつた。そして先刻私等の見立に漏れて居た小さな牝牛の前へ来て立止つた。それは脚が小さくて、毛は赤く、耳と頬は薄黒く、眼の縁が眞黒で、鼻端に白い輪のある牝牛だつた。

「これが本場の赤田牛ぢや。お前方の望み通りの代物ぢや。」と獸醫は小聲で云つた。

下賤な容子をした百姓がその牝牛の手綱を取つて居たが、獸醫はこの男に向つて牛を幾干に賣ると聞いて見た。

「百二十圓に賣るだ。」

この小さな牛が百二十圓！ 逆も寄りつかれもしないので、私等は落膽して了ひ、外の牝牛を見よと獸醫にいと、獸醫はまア待つて居れと合圖しながら、百姓に掛合ひ始めた。

獸醫はまづ半値に値切つた。百姓は五圓減いた。

獸醫は七十圓に値上した。百姓は十圓減いた。

けれども獸醫はもう競合を續けなかつた。値踏をする代りに、詳しくこの牝牛の批評を仕始めた。脚が弱過て、頸が短か過て、角が長過る、それから肺が小さくて、乳の形が完全でない、と難癖をつけた。

百姓は答へた——お前さんはよく牝牛の事を知つて居るから、掛引なしに百圓に負けよう。

けれども私等の方が恐ろしくなつた。なぜなら町也と私は獸醫の批評を聞いて此牝牛を悲觀し始め

たからである。

「先生、別の牝牛を見ませう。」

百姓は私の此言葉を聞くと、また五圓減いた。

談判はなほ續いて、百姓はちび／＼と値を下げながら、八十五圓までまけて来たが、もうそれから
はどんなに云つても下げない。

獸醫は肘で私を突き、自分がこの牝牛をけなして百姓に云つたのは全く方便で、その實こんない、
牝牛は拾ひものだと知らした。けれども八十五圓といふのは私に取つては容易ならぬ金額である。

この間町也はそつと牝牛の後へ廻り尻尾の毛の長いのを一本引抜いたので、牝牛は怒つて町也を蹴
らうとした。

尻尾の本物である事は私を決心させた。

そこで私は八十五圓拂つて、牝牛の手綱を取らうとすると百姓はどつこいと身構へて、

「お前手打金をいくら出すだ。相談が出来たら、買手の旦那衆から手打金を出すのは市場の規則だん
べい。」

また談判の結果とう／＼こちらから、手打料として四十錢出す事にし、話が纏まつたが、もう私の
懐には一圓二十錢しか残らぬ事になつた。

間柄になつた。
「さアかうして友達になつたが、おらア女のお酌で一杯呑みていだ。その酒代を忘れはしなかつ
べいな。」

女のお酌料にまた二十錢取られた。
三度目に私が手綱を取らうとすると、またどつこいと止めて、

「お前頸革は持つて来ねえだか？ おら牛を賣つたが頸革は賣らねえだ。」

百姓はかう云つたが、併し友人甲斐に六十錢で廉く護つてやらうとつけ加へた。

どうも牛を連れて行くのに頸革が無いと始末にいけぬから、勘定して見るとたつた四十錢しか残ら
なかつたが、奮發して六十錢呉れてやつた。そこですべてで八十六圓二十錢拂つた事になつたのだ。

四度目に私が手を伸すと、

「お前手綱持つて来たか。おら今頸革はお前に賣つただが、この手綱まだ賣らねえだ。」

仕方がない、それも買つた。この手綱が四十錢について、私はほんの一文なしになつた。

百姓はもう牝牛についたものが何も無いので、漸く頸革と手綱つきで私に渡して呉れた。

牝牛は手に入つたが、私等はまだ一錢の貯蓄もないからその牝牛に食べさせる事も、私等自身食
べる事も出来ぬ有様となつた。

「今日は一日こゝで稼ぐとしよう。どの珈琲店も一杯のお客だから、きつと儲があるだらう。」と町也

は云つた。

牛盗人

私等は牝牛を宿へ連れて歸り、厩へ念に念を入れて括つた上、めい／＼分れ／＼になつて稼ぎに出た。夕方落合つた時に勘定して見ると、町也は一圓八十錢、私は一圓二十錢ばかりの稼があつた。私等は相談の上宿の勝手元の手傳女に頼んで、今朝買つた牝牛の乳を搾つて貰ひ、それを夕飯の代りにしたが、私等はこんないゝ乳を今迄飲んだ事が無かつた。町也は何とも云へぬ甘味があつて、丁度慈善病院で飲んだ乳のやうに、橙の花の香氣がしてそれよりもずつといゝ乳だと云つた。私等は熱心にこの牝牛を賞合つた末、接吻してやらうといふ事になり、二人は厩へ出かけて行つてめい／＼その黒い顔に接吻した。牝牛はたしかにそれを嬉しく感じたらしく、硬い舌を出して私等の顔を嘗めた。

「やア牛が接吻した！」と町也は叫んで踊りながら喜んだ。

私等が牝牛を接吻し、また牝牛に接吻されてどれほど幸福を感じたかといふ事は、私も町也も世の常の子供のやうに、両親や親戚のものなどに、つひぞ接吻される機會の無い、憐れな子供である事を思へば直に合點が行くであらう。

翌朝私等は太陽と共に起上り、支度を済ますと、すぐに牝牛を牽いて鯖野へと出立した。

かうして牝牛を買ふ事の出来たも、全く町也のお蔭と思ふにつけ、私はお禮心に牝牛の手綱を町也に牽かせ、その大喜びで牽いて行く牝牛の後から、私はのこ／＼ついて行つたが、やがて狭い町を出外れると、今度は牝牛をよく見ながら歩けるやうに、牝牛と同列に竝んで歩いた。

まア何といふいゝ、牝牛だらう。私はつひぞこんな氣に入つた牝牛を見た事がない。如何にも優しうな容子をして、身體の釣合を取りながら、靜かに歩いてる牛振の鷹揚さ、われとわが身の價值を知つてるのではないかといふやうに、私の目には思はれた。

さてこの邊へ來ると、私はもうこれ迄のやうに、その都度地圖を出して引合して見る必要は無くなつた。美登里老人に連れられ、郷土を出てから、もう幾年かになるが、それでも眼に入るものみな思ひ出の種とならぬものは無かつた。

私の計畫は餘り牝牛を疲らさぬためと、また二つには餘り遅く鯖野へ着くことを避くるため、今夜は美登里老人との旅の最初の晩、泊つた村迄行つて宿を求め、翌朝そこを立つて、正午迄に鯖野の直の家へ行着かうといふのであつた。

ところが今迄はあれほど迄も幸運であつた私等は、忽ち運の神に見放されたのか、飛んでもない災難が私等の上に降つて湧いた。

その次第は次の通り――

私等は一日を二つに分けて今迄のやうに歩きながら、麵包を齧つて食事を済すといふやうなことをせ

す、晝飯時を區切にゆつくり休んで、存分牝牛に草を食べる時間を遣らうと相談したので、丁度十時ごろに草の青々と茂つた壕を見出したを幸ひ、牛を牽いてそこへ降りて行つた。

初めは手綱を持つて居たまゝ、草を食べさせようとしたが、大變大人しい牝牛で、殊に一生懸命草を食べ始めたから、もう大丈夫と私は手綱をぐるぐるとその角へ捲きつけ、放し飼にしながら自分等は草の上に坐り、麵麩を出して食べ始めた。

勿論私等は牛よりよつほど早く食事を済して了つた。そして可なり長い間草を食べる牝牛に見惚て居たが、牝牛の晝飯はなかく、濟みさうもないから、私と町也は背囊から遊戯の球を取出し、投合をして遊び始めた。誰も私等二人を稼ぐ外には何も考へない大人じみた子供と思つてはいけぬ。私等の生活は普通の子供の生活とは全く變つて居るけれども、私等は矢張普通の子供の趣好を持つて居た。遊んで許り居ては糊口が出来ぬから、錢儲けにかゝつて居るものの、それでも合間々々には球投やら羊飛やらいろいろの事をして遊んだ。

町也はよく何といふ理由もなしに突然立止つては「少し遊ばうぢやアないか。」と云出す事があつた。すると私もすぐに同意し、背囊や樂器を道傍へ卸して、遊戯にかゝると、もう時の立つのも知らずに居るのだ。若し私が時計を持つて居なかつたら、そして私が一座の隊長である事を思ひ出さなかつたら、私等は夜までも氣がつかずに遊んで居る事が度々あつたらう。

さて私等は球投を止めても牝牛はなほ草を食べて居た。そして私等が傍へ行くと、まだく〜肌じいといふ顔をして、一層がく〜草を食始めた。

「も少し待つてやらうぢやないか。」と町也は云つた。

「だつて牝牛は放つて置いたら一日だつて食べてるぜ。」

「ぢや十分許り待つてやらう。」

そこでまた待つてやる事にしたが、一刻もぢつとして居られない町也は云つた。

「一つこの牛に喇叭を聞してやつて見ようか。僕が二年入つて居た曲馬にも牝牛が居たが、そりやア音楽が大好きだつたよ。」

かう云ひながら私の返事も待たず、町也は軍樂隊の行進喇叭を吹始めた。

最初の音符の響を聞くと、牝牛は驚ろいて顔を擧げたが、何と思つてか、私が手綱を取らうとする間もあらせず、突然非常な勢ひで駈出したのである。

町也と私は懸命に逃出した牝牛の後を追かけた。私はカビに牝牛を止めると命じた。併し人でさへ何にでも使へるといふものはない。家畜の番犬なら牝牛の鼻先に飛びかゝるところを、カビは脚に飛びかかつたから、牝牛はいやが上にも駈出す許りであつた。

どこ迄もと牝牛が走るのを、どこまでも私等は追かけた。走りながら私は町也を「大馬鹿」呼ばりした。町也は喘ぎながら、

「君、後で僕の頭を撲つて勘辨して呉れ給へ。どんなに撲られたつて仕方がないんだから。」

私等は息を切らして半里ばかり追駈たが、向うに大きな村があつて、牝牛はその村へ走つて入つたのだ。勿論私等よりよつほど先であつたが眞直な一本道なので、距離はあつてもよく見えて居た。すると私等は忽ち村の大勢がバラ／＼と現れ、道を塞いで牝牛を止めたのを認めた。

私等は安心して駈足を弛めた。村の人が捕まへてくれたからにはもう牝牛は失しつこはない。お禮を云つて受取に行けば、すぐ渡してくれるだらう。

その中に牝牛の周囲の人ばかりはますます／＼殖えて来た。私等が傍へ行つた時には村の老幼男女が牛を取巻いて、私等を指さしながらがや／＼と語り合つて居た。

私が牝牛を受取らうとすると、人々はすぐそれを私に渡さずに、私等を取圍んで質問の矢を放ち始めた。

「お前等はどこから来たのだ？」

「この牝牛をお前等どうしたのだ？」

「どこの牝牛だ？」

「お前等の牝牛ぢやア無ッべい？」

私は簡単に卵瀬の町で買つて来たのだと答へた。けれども誰もそれを信用するやうな顔をしな。二三人の聲で、何でもその牝牛をどこかで盗んで来たに相違ない、この子供等は牛盗人だ。巡査に引渡して牢屋へ入れて了へ、といふやうな事をがや／＼と叫んだ。

牢屋といふ一語は私を震ひ上らせた。私は蒼白になり、そして口籠つた。殊に私等は息せき走つて来たので、なほ更口が利けず、どうしても巧く辯解する事が出来なかつた。

さうする中に一人の憲兵がやつて来た。村の人は憲兵に説明した。そして私等を牛盗人と云つた。私等はどうしてもその牛は盗んだものでないと證明する事が出来なかつたので、牝牛は牛馬押收所に收容され、私等は牢屋へ連れて行かれる事になつた。

私はどこまでも辯解うとし、町也も抗辯しようとした。併し憲兵は黙れと云つてその上口を利かせなかつた。私は鶴巢で巡査に抵抗した爲め、美登里老人が曳いて行かれた光景を眼の前に思ひ浮べながら、町也には何にも云はずに憲兵の後からついて行けと合圖した。

村中の男女は總出で、牛盗人の子供等の後からぞろ／＼と、その曳いて行かれる村役場の牢屋まで行列を作つた。彼等は私等を圍んだ、私等を急立てた。私等を押した、私等を叩いて私等を罵つた。

若し憲兵が私等を保護してくれなかつたら、丁度私等は放火犯や人殺でもした大罪人のやうに、石を投げつけられたに相違ない。素より私等は何の罪も犯して居ないのだが、多勢といふものは得てこんな事をするもので、どんな事をしたのか、ほんとに罪があるのか無いのか、そんな事はちつとも知らずに、犠牲になつた不幸ものを苛んで自ら喜ぶ野蠻性を持つて居るものだ。

程なく私等は牢屋へ来た。處が佛蘭西の田舎にはよくあるやうに、この村役場の番人が牢番兼村方監督の巡査で、憲兵が私等を牢へ入れるため連れて来たといふと、この番人が何か云つて不承知を唱

へ出した。そこで私等はこれは巧いといくらか希望を持始めたが、憲兵がたつて入牢の事を主張すると、番人は腰が弱くとうとう承知して了ひ、しぶく先に立つて牢屋の戸を開けた。それは大きな錠と二本の門で、堅固にかためたものであつたが、私は牢番が私等を入れるのに躊躇した譯を知つた。牢屋の床の上には一杯に玉葱をひろげて乾してあつたのだ。牢番が妙な顔をしながら、けんどんに玉葱を片よせてる間に、憲兵は私等の持合せの金、剪刀、燐寸などをすつかり取上げて、私等を牢の中へ押入れた。鐵張の重い戸がいやな音をたててギーと縮ると、私等は只二人薄暗い牢屋の中へ残されたのである。

私等はどれほど牢の中へ入れられて居るのだらう？

私が此間を町也にかけると、町也は私の前へ坐つて頭を出しながら、

「さア僕の頭を殴つて呉れ給へ。どんなに殴つたつて、殴り足りなからうけども……。」

「なアに、君ばかりの故ぢやアない。僕も君にあんな眞似さしたのが悪いんだから。」

「い、から強く殴つてくれ給へ、さうすると僕はいくらか氣が安まるから……あ、可哀相な牝牛、ああ王子様の牝牛！」

かう云つて町也は聲を立てて泣始めた。

今度は私が町也を慰めなければならなくなつた。そして私は牢に入れられたけれども、決して心配するほどの事はない、卵瀬の獸醫がい、證人だから大丈夫だと云つた。

「でも君、もしその牛を買つた金は盗賊して来たんだらうと云はれたら、どうして稼いで貯めた金だと云解く積だえ？ 君だつて知つてるだらう、人は落目になると、悪い事は何でもしたやうに云はれるんだから。」

町也のいふ事は道理があつた。私も善く知り抜いてるが、世の中の人はいつでも不幸なものに辛く當るのだ。第一私等は現在今牢へ引張つて來られる途中、それを經驗して來たではないか。

町也はなほ泣きながら續けて云つた。

「それからね、君、若し僕等が牢から出て、牝牛を返して貰つたところで、お直婆やが無事で居るかどうか、それも分らないぢやアないか。」

「なぜ君はそんな厭な事を考へるの？」

「だつて君がお直婆やに別れてから、もうよつほどになるだらう。年寄だつていふから、死んでるかどうにか全く分らないぢやないか。」

何とも云へぬ恐怖が私の胸に食ひ入つた。お直はまださうく死んでい、といふ年では無いけれども、お直よりはよほど丈夫に見えた美登里老人がもう死んで了つたのだし、私はいつも愛する人を失ふ運を持つて生れて居るのだから、お直とて決して無事だとは受合はれない。私にはなぜこの考へがもつと早く浮んで來なかつたらうと悔まれた。

「なぜ君はもつと早くそれを云つて呉れなかつたんだね。牝牛を買ふ前に。」

「だつて僕は幸福な時には、この間拔な頭の中に、陽氣な考へ許りしか起らないが、不幸になると悲しい事許り思ひ出すんだもの、僕はお直婆やに牝牛を遣るつて考へに夢中になつたもんだから、お直婆やがどんなに喜ぶだらうつて事と、僕等がどんなに幸福だらうつて事ばかり考へて、酔つたやうになつてたんだから。」

「いや君の頭よりは僕の頭の方が間拔だつた。僕も君と同じ事しか考へずに、夢中になつて居たんだもの。」

町也は泣きながら叫んだ。

「あ、王子様の牝牛！」

突然町也はバネで弾ちき上げられたやうに起上ると、絶望の人のやうに雙手を擧げて、

「若しほんとお直婆やが死んで居て、恐ろしい権藏だけ生きて居て、私等の牝牛を奪取つて了つたら！そして牝牛と一緒に君まで取返されて了つたら！」

かういふ厭な悲しい考へを私等に吹込んだのはたしかに牢屋のせみであつた。群衆の私等を威嚇した叫びや、憲兵や、鐵の扉の音や、恐ろしい頑丈な門やのせみであつた。

町也は只自分等の事ばかりでなく牝牛の事も考へて居た。

「誰が牝牛に食物をやるだらう？ 誰が乳を搾るだらう？」

私等がこんな悲しい考へに充されてる間に時はずん／＼と立つて行つた。そして私等の心細さは刻

一刻と加はつて来た。

それにも拘はらず、私は町也を力づけるため、今に誰か来て私等を調べて放免してくれるだらうと云つた。

「でも調べられたら何て云ふつもりなの？」

「ほんとの事をいふつもりさ。」

「だが、ほんとの事を云へば、憲兵はきつと権藏を呼出して君を渡しちまやしないか。若しかまたお直婆やが生きて居れば、僕等のいふ事が諺かどうか突留めるため、きつとお直婆やを訊問するだらう。さうするともう王子様の牝牛も何も有りやアしないや。すつかり底が割れて、婆やを驚かす事が出来なくなるぢやアないか。」

とう／＼牢屋の戸が恐ろしい音を立ててギ／＼と開くと、髪の眞白な、腹藏の無ささうな、そして人の好ささうな老紳士が牢番に案内されて入つて来た。私等は少し心持が軽くなるのを覺えた。

牢番が聲をかけて、

「さアちやんと立つて判事殿の訊問にお答へ申すのだ。」

この老人は治安裁判所の判事で、簡單な犯罪や何かは直接皆この判事の手で取扱ふのだ。

「よし、よし。」と老判事は首肯して「乃公はこの兒(私を指し)から先に始めるから、そつちのを連れて彼方へ行つて呉れ。」と牢番に指圖した。

私は町也に打合せて置く必要があると思つたので、それとなしに、

「判事様、私の仲間も私と同じに、何もかも有りのまゝをお話し申上げるに相違ないんです。」と判事に向つて云ひながら町也に眼配せした。

「よし、よし。」と判事は首肯して私の詞を切つたが、町也は牢から出る時、分つたといふ合圖をして行つた。

判事は私の眼をちつと見詰めながら、

「お前は牝牛を盗んだといふ咎で牢へ入れられたのだが、その通りか。有體に事實をいふがよいぞ。」

私は牝牛は卵瀬で買ったので、それは卵瀬の獸醫が一緒に來て買つてくれたのだと答へた。

「ウム、それは調べればすぐ分る。」

「ハイ、どうぞお調べなすつて。」

「併し何のつもりで牝牛を買つたのだな。」

「鯖野へ牽いて行つて、私を親切に育てて呉れた乳母にやるためなんです。」

「その乳母の名は何と？」

「お直と申します。」

「フーム、では先年巴里で怪我をした石工權藏の家内とは違ふか。」

「ハイ、權藏の家内です。」

「ウム、それではその方も調べればすぐ分る。」

今度は獸醫を調べると云つた時のやうに、すぐお調べなすつてといふ事は出来なかつた。

私の當惑顔を見ると、判事は様々に開始めた。私は若しお直が調べられると、王子様の牝牛の一件がすつかり暴露して了ふ事を云はうとしたが、それは追に云ひ兼ねた。

けれどもこの當惑の間に、私は咄嗟の満足を感じた。なぜなら判事はお直を知つて居て、私の云ふ眞偽を確めるため、お直に聞いて見ると云ひ出したので、お直がたしかに生存らへてる事を悟つたからである。

すぐに私はまた第二の満足を感じた。矢張り質問の間に、判事は私に向ひ、權藏が先程からまた巴里に出かけて居る事を話したのだ。

私は少からぬ幸福を感じると共に、大分氣丈夫になり、判事への返答ぶりも鮮やかになつた。そして此上は卵瀬の獸醫の證明さへあれば大丈夫といふ迄に漕ぎつける事が出来た。

「どこでお前は牝牛を買ふやうな大金を拵へたのか。」

町也が頭を悩めて居たのはこの質問だつた。

「稼いで貯めたんです。」

「どこで？ またどうして？」

私は巴里から判事來る三月の間と判事來るモンドルに來る迄の間、食ふものも食はずに稼いで、

一錢二錢と貯めて来たものと話した。

「なぜまた割巢のやうなところへ行つたのだな。」

「巴里で私が兄弟のやうにして居た兒が、割巢で坑夫をして居る伯父と一緒に炭坑に居るんで、それを尋ねて行つたんです。」

「フム、いつごろの事だな？」

「二月ばかり前で。」

判事の眼は奇しく輝いて、

「割巢はすぐ立つて来たのか？」

「い、え、尋ねて行つた兒が怪我をしたので、私はその代りに炭坑で押方をしてたんです。すると大洪水で私は外の坑夫等と活埋にされちやつたんで——。」

判事は私を遮り止めると、大變優しい調子で、

「お前等二人の中民といふ兒が居るか。」

私はびつくりしながら、

「民は私です。」

「併し何ぞ證據があるか。憲兵の話ではお前等は書附も何も持つて居らんといふ事だが。」

「それでは乃公に、お前が活埋になつた時の話を聞かしてくれ。乃公はちやんと新聞で讀んで知つてるから、お前が若し眞實の民だつたら、乃公の眼には黒か白かすぐ分る。さア話して見るが善い。よく氣をつけて話して見い。」

判事の詞は大變に親切で優しいので、は私もう味方のやうに思ひながら、淀まず私の物語を始めた。判事は柔和な情の籠つた眼をして私を見つめて居たので、私はすぐにも私等に自由を與へてくれる事かと思つたが、併し私には一言も云はず、私を残して出て行つて了つた。多分町也を吟味して、二人の云開きが一致するかどうかを確かめようとしたのだらう。

私は長い間いろ／＼の事を思ひ浮べてる中、漸く判事が町也を連れて入つて来た。

「乃公はこれから早速卯瀬の方へ照會して見るが、その上明日はお前等を放免してやらう。」

「あの牝牛は——？」と町也は尋ねた。

「牝牛も返してやる。」

「でも誰か草を食べさして呉れますか。そして乳はどうするでせう。」

「いや、そんな事は心配するに及ばぬ。」

「もし誰か乳を搾るなら、夕飯にそれを吞して欲しいんですが……。」と私はだん／＼蟲のいゝ事を云ひ出した。

判事が立去つてから、私は町也に二つの吉報——お直の生きてる事と、權藏の巴里に行つて居る事

とを知らした。

「王子様の牝牛萬歳！」

町也はかう叫んで、牢屋の中を歌ひながら踊り出した。私もつい釣込まれて町也の手を取って室の中を廻り出すと、今迄隅の方に小さくなつて、縮んで居たカビまでが浮れ出し、後脚で立つて仲間入を始めた。驚いたのは牢番で——それは玉葱を踏潰されては大變と思つたのかも知れぬが——牢屋の前へかけつけて來ながら、

「何だ、お前等は牢破りでもするのかと思つた。牢の中は踊り場とは違ふ。ちと靜かにせんかい。」

併し牢番の調子も其顔附も、前とはすつかり變つて居たから、大分私等の風向がい、なと思つた。果して暫らくすると、牢番は大きな皿に一杯牛乳を盛つたのと大きな白麵麩と冷たい犢肉を入れた皿を持つて入つて來た。そして判事の贈りものと云つて置いて行つた。

私等のやうに取扱はれた囚人といふものは決してあるまい。大喜びで犢肉を食べ、牛乳を呑みながら、私は牢屋といふものに就て新たな觀念を作つた——慥に牢屋は私の想像して居たよりは、いところだ。

町也も同じ意見で、

「お金を拂はずに食べて寝られて、こんな巧い事はないね。」と笑つた。私は一寸驚かしてやらうと思つて、

「併しもしひよつと卯瀬の獸醫が急病で死んだら？ 誰も證人がなくなるぢやアないか。」

「そんな事云つても駄目だよ。僕が不幸で塞いで居る時なら驚ろくけれども、かう陽氣になつてると、僕の頭はてんでそんな考へを受けつけないよ。」

お直婆や

囚人用の寢床も、屢々星の下にさへ寢た私等のためには、決して悪くは無かつた。

「僕は王子様の牝牛の、乗込みの夢を見た。」と町也は朝起きると云つた。

「僕も見た。」

八時に牢の戸は開いて、昨日の判事と、私等の友——卯瀬の獸醫が入つて來た。獸醫は私等を放棄するため自身わざ／＼來てくれたのだ。

判事は昨日親切に晚餐を贈つて呉た許でなく、今日は又ちやんと印を捺した上等の書附を呉れて、「さアこれがお前達の通行券だ。これさへ見せればどこでも大手を振つて通れる。今朝は機嫌よく立つがよい、子供達！」

かう云つて私等の手を取つて呉れ、獸醫はまた私等を接吻して呉れた。

私等は惨めな態でこの村へ連れ込まれたが、今朝は大威張で村を出た。これ見よがしに、頭を擡げ、牝牛の手綱を取つて、戸口から呆れ顔に見送る百姓等を肩越しに見やりながら靜々と練つて歩いた。

町也は私を顧みて、

「君、たつた一つ残念な事がある。僕等を牢へ入れた昨日の憲兵に見せつけてやりたいんだが。」
「なアに、君、憲兵も悪かつたけれど、僕等が世の中の人は、みんな不幸なものに辛く當ると云つたのも悪かつた。」

「でも今度は僕等懷にまだ二圓あつたからね。二圓でも持つてれば、まだく不幸の仲間には入らないよ。」

「君は昨日それを云つたかえ？ 今日そんな事云つたつて駄目だ。何でも渡る世間に鬼は無いつて事を、君、悟つたらう。」

私等は昨日の経験に教へられたから、牝牛の手綱は決して離さなかつた。私等の牝牛は全く柔和しに相違なかつたが、唯少し物に怖易い性質なのだ。

程なく私等は美登里老人と初めて寢た村に着いた。こゝから荒野原一つ横きつて、峠を越えさへすればもう鯖野なのだ。

村を通りながら丁度ゼルビノが肉菓子盗んだ店の前へ來たので、私はふと或考へを思ひつき、急かはしく町也に囁いた。

「お直婆やの家で、僕君に銅鑼燒を御馳走すると云つたが、それを拵へるには牛酪と餛飩粉と鶏卵が要るんだ。」

「素敵に美味いだらうね。」

「美味くなくつてさ、丸めて口の中一杯に頬張ると、頬邊なんぞ一遍に解つちまふよ。だがね、直の家には牛酪も餛飩粉も鶏卵も無いんだからね、買つて持つて行かうと思ふがどうだらう。」

「ウム、それがいゝね。」

「ちやア牛を引張つて居て呉れ給へ。わけても綱を放しちやアいけないよ。この店で牛酪と餛飩粉を買つて來るから、鶏卵は直に近所から借りさせればいい、こゝから買つて行くと、途中で破すに極つてゐるからね。」

私は店へ入つて一斤の牛酪と二斤の餛飩粉を買つた。

牝牛はなるたけ急立ずに歩かせようとするのだが、それでも心が急ぐので、自然足が伸びて了ふ。まだ三里、まだ二里、まだ一里、不思議と近よれば近よるほど直の家が遠くのやうに思はれた。初めて直に別れてこゝを通る時に涙雨の降る居た事など思ひ出され、今日の前に迫つた再會の光景を描いては、胸はいやが上にも波打つ許りであつた。

私は引切なしに時計を取出しながら、町也に話しかけた。

「僕の郷士はいゝところだらう？ 君。」

「君の郷士には大きな木が一寸も無いんだね。」

「なアに、君、この峠を鯖野の方へ下ると、澤山大きな木が見えるよ。檜だの、栗だの。」

「栗が出来るかえ？」

「出来なくつてさ。それから直の家には僕がよく馬乗をした梨の木があるが、その梨と云つたら、君の頭位大きくなつて融けるやうに甘いんだよ。」

私の心持では何でも町也を並外れた、よいものづくめの國へ連れて来たやうに思ふのだ。少くも私に取つてはさうであつた。私が生れて眼を開て来たのもそこだつた。私が人情といふものを知つたのもそこだつた。不幸といふものを知らずに、幸福に育てられたのもそこだつた。私が一番深い愛を瀧がれて居たのもそこだつた。私の生涯の最初に受けた此等の懐かしい印象は、國を出てからの、さまさまの艱難辛苦に引比べて、ますます強烈となり、私の村へ近づけば近づくほど、その懐かしい幸福の思ひ出は火のやうに燃え始めた。私には何だか空氣の中に、香氣があつて、それが私を酔はしてやるやうに思はれた。眼に入るもの、心に思ふもの、何でも美しく見えぬものは無かつた。

町也も私の説明のために酔はされながら、

「もし君が僕の郷土の鳥野へ来れば、君にもいろ／＼といふものを見せるんだが。」

「だつて僕等一緒に鳥野へ行かうぢやないか。お稻と小菊と辨吉のところを廻つた後で。」

「ぢや君、鳥野へ来て呉れるの？」

「君は僕と一緒に鯖野へ来て呉れたんぢやないか、僕も君と一緒に君のお母さんと小さな君の妹のお花ちゃんを見に行くさ。そしてお花ちゃんがそんなに大きくなつて居なかつたから、僕抱いて守を

してやるよ。だつて君の妹は僕の妹ぢやアないか。」

「お、君！」

町也は涙ぐんでこれより餘計にいふ事は出来なかつた。

その中に私等は峠へ来た。この峠の九折を降りると、獨り手に鯖野の直の家に導かれるのだ。

なほ暫時進む中に、崖際の例の胸壁——その時もう二度と見られまいと思つた直の家に名残を惜むため、暫らく休ましてくれと、美谷里老人に頼んだ場所へ差かゝつた。

私は牝牛の手綱を町也に取らせると、一飛で胸壁の上にあがつて見た。見下ろした谷間の景色はちつとも變つて居ず、木立の間には直の家の屋根がちやんと見えるので、私は飛立つやうに思つた。

「君、何してるんだえ？」と町也は問うた。

「それ、そこに見えるんだ。」

町也は私の傍に来たが、牝牛が草を食べてるので、胸壁には上らず、爪先立てて下を覗き込んだ。

私は指さし示しながら、

「そら君、あれが直の家さ。ほら僕の梨の木も見えるだらう。ほら僕の庭も！」

町也には何んの追憶もないのだから、一向大したものが見えなかつたに違ひない。けれども何にも云はなかつた。

丁度この時烟突から黄色い烟が、静な谷間へ眞直に上がり始めた。

「お直婆やは家に居るよ、君。」と私は叫んだ。

微風が立木を渡つて、烟は崖の方へ靡いて来た。心なしかその烟は樅の葉の匂がした。

忽ち私の眼に止度もなく涙が湧き始めた。私はいきなり胸壁を飛降りると町也に抱きついて接吻した。カビが私に飛びかゝつて来たので、カビも抱いて接吻した。

「サア、急いで降りよう。」

「でも君、お直婆やが家に居ると、驚かす事が出来ないぢやアないか。」と町也は云つた。

「いゝぢやアないか、君がまづ牝牛を牽いて行つて、これは王子様のお命令で、連れて来たのだといふと、直はびつくらして、どこの王子様だと聞くだらう。その時に僕が入つて行く事にするから。」

「それには音楽で練込むとお談へ向なんだがなア。」

「おい、君、また馬鹿な真似しちやアいけない。」

「大丈夫、もう二度と馬鹿はしないよ。けども王子様の牝牛なんだから、囉子入りで練つて行くといんだが、残念だね。」

だん／＼九折路を降りて、すぐ直の家の上の方に當る曲目へ出た時に、私は忽ち庭先へ現れた白い頭被を認めた。それはお直婆やであつた。お直婆やは庭先から木戸を開けると、道路へ出て村の方へと志して行つた。

私は立留つて、その姿を守つて居たが、

「お直婆やが家に居ないと、折角の目論見が——。」と町也は當惑顔をした。

「何か外の工夫をすればいゝ。」

「どんな？」

「それはまだ考へてない。」

「それならいつそ君、こゝからお直婆やを呼んだら！」

私は實際どんなに直を呼んで見たかつたらう。けれどもちつと堪へた。どうして長い間、直を喫驚さ、うとして、育て上げて来た目論見を捨てる事が出来よう。

程なく私の長く住馴れた昔馴染の家の木戸の前へ来た。そして私が昔入つたやうに、二人は木戸を押して中へ入つた。

私は直の慣習をよく心得てるので、直が外出の折に、決して戸の鍵をかけず、取手を廻して置くだけだから、他愛もなく家の中へ入れる事を知つて居た。けれどもそれよりも先に牝牛を牛小舎へ入れて置かねばならぬ。

私は牛小舎がどんなになつてるかと思つて行つて見た。全く私が立去つた當時の光景そのまま、で、たゞ薪が亂雑に投込まれてあるだけだ。私は町也を呼んで、牝牛を槽檻の前に繋いだ上、二人急がはしく薪を片隅の方に積重ねた。それは決して長い時間を要しなかつた。なぜなら直の薪の準備は決して豊富ではなかつたから。

それが済むと、私は町也に向つて、

「さア今度は家へ入らう。僕は昔の通りに、圍爐裏の角に腰をかけて、ちつとして居ようと思ふんだ。直が歸つて木戸を押すとね、ギーと音がするから、其音を聞きつけたら、君はカビを連れて、そこに寢臺があるから、その後には隠れればいい。直の昔の通りのところに僕が居るのを見たら、きつと喫驚しようぢやないか。」

かう相談を極て私等は家の中へ入つた。そして私は冬の夜寒にはいつも陣取つて居た圍爐裏の角のところに腰を卸した。私の長い頭髪を昔の姿に切取るとは出来ぬから、上衣の襟の下へ隠して了つた。そして手足を盛めながら、昔の民——直婆やの小さな民に見えるやうにして居た。

私の居るところからは窓越に木戸が見えるから、此方が直のために不意に驚かされるやうな心配は無。私はい。

私はかう腰を据ゑながら家の中を見廻し始めた。私には何だか昨日こゝを立つたばかりのやうな気がして、變つてるものとは少しもない。何でも皆同じところにある。私の壊した玻璃戸は矢張り紙張で繕つた當時の儘で、その紙はもう恐ろしく煤けて黄色くなつて居た。

私は一々品物に近よつて、楽しい思出に耽りたかつたけれども、いつ直に歸つて來られるか分らぬので自分の位置を動く事は出来なかつた。

忽ち私は白い女の頭被が木戸前に現れるのを認めた。同時にギーと開く木戸の音が聞えた。

「早く隠れ給へ。」と私は町也に聲をかけ、自分はいよく小さくなつて居た。

戸が開いて、直の姿が圍に表れたが、圍爐裏の隅の人影を認めると、

「誰だえ？　そこに居るのは？」

私は答へずに黙つて直を見た。直はそこに立つたまま、不思議さうに私を見詰めたが、忽ち手を震はせながら、

「お、神様！　民の答はないが——。」と呟いた。

私は立上ると、いきなり直の傍に走つて、兩腕を開きながら抱きついた。

「母や。」

「お、民、やつぱり民だ！」

私等が抱合つた手を離して、涙を拭ふまでにはかなりの時間がかつた。

直は私を見かゝ見しながら、

「若し私が始終お前の事を思ひつめて居なかつたら、きつとお前を見違へたに違ひない、何てまア變つてお了ひだらうね、まア大きくなつて、まア丈夫になつて！」

詰つたやうな鼻息が寢臺の後で聞えたので、私は町也を思ひ出した。聲をかけると町也は姿を現はしたので、

「母や、これは町也といふ兒で、私の兄弟なんだよ。」

すると直の眼は不思議に輝やいて、

「お、！ ぢやお前、兩親に邂逅たのかえ？」

「い、え、さうぢやないよ、兄弟同様に居る仲間なんだよ。さアこれがカビで、これも仲間なのさ、おい、カビ座長のお母さんに敬禮をするんだ。」

カビは例の通り、後脚で立上ると、片手を胸に置き、鹿爪らしく前に屈んで、最敬禮を表した。それは直を笑はせ、直の涙を乾かした。

此時町也は私のやうに刹那の喜びのため、何もかも忘れて了ふ道理が無かつたので、すぐ私に眼配せをして牝牛の事を思ひ出させた。

私は何氣ない容子をして直に向ひ、

「母や、裏へ行つて見よう。私が馬にして居た梨の木を町也が見たいといふから。」

「い、ともさ。お前の庭へも行つて見よう。私はちやんと昔のまゝにして置いたんだよ。何だか私にはお前がきつと歸つて来るに相違ないと、しよつちう思はれて居たもんだからね。」

「私の植ゑて置いた菊芋はどうして？ 甘しかつたかえ、母や？」

「まアお前だつたんだね、私に不意の喜びをさしたのは、私きつとお前が祕密で植ゑて置いたのだらうとは思つたけれども。お前はいつでも私を喫驚させるのが好きだつたから。」

「母や、牛小舎はどうなつてるの？——赤が引張つて行かれた時は、一度私が母やの留守に連れて行かれる時と同じ事だつて、後脚を踏張つて牛小舎から出まいとして。」

「赤が居なくなつてからはあの儘さ。赤の代りに薪料が入つてるよ。」

話しながら私等は牛小舎の前へ來たので、直は私に中を見せるつもりで戸を開た。その瞬間飢がつて居た私等の牝牛は、誰か食物を持つて來たのだと思つたのだらう、も一と一聲鳴き立てた。

直は喫驚して一足後じさりながら、

「おや牝牛、牛小舎の中に牝牛が！」と眼を丸くして叫んだ。

この上もう隠す事は無かつたので、私と町也は聲を揃へて高笑ひを始めた。

直は呆れて私等の顔を見詰めた。けれども牛小舎の中に牝牛が繫がれてあるといふやうな事は、どう考へても事實に有得べからざる事で、それがまた有るのだから、私等が笑つて居ても、直には譯が分らなかつたのだ。

「これは母やを喫驚させる爲なんだよ。私等二人で目論んで來たんだよ、菊芋の喫驚も喫驚だが、この方の喫驚はずつと段違ひだらう、ねえ 母や。」

「まアさうかえ！ まアさうかえ！」と直はまた喫驚から回復せずに繰返した。

「母や、私はね、捨兒だつて私を、あんなに可愛がつて育ててくれた母やに手ぶらで來るのは厭だつたからね、何か役に立つお土産を持つて行かう、それには赤の代りを連れて行くのが何よりだと考へた

もんだからね、町也と一緒に儲けた金でこの牝牛を卵瀬から買つて来たんだよ。」

「お、まア何といふいぢらしい兒だらうね、お前は！」と直はまた私を抱締めた。私等は直に私等の牝牛——今は直のものになつた牝牛をとくと吟味させるため、牛小舎の中に入つた。そして直はこの牝牛の長所を發見する毎に、満足と驚嘆の叫びを發した。

「まア何ていふい、牝牛だらうね！」

突然直は私等を見返りながら、

「では、あのお前は金持におなりなのだね。」

私が黙つてると町也が笑つて、

「大變な金持で、懷中に殘金が一圓二十錢だけあるんです。」

直はちつと二人を見て居たが、

「お前達はまア何といふ善い兒だらう！」と云つた。

私は直がその心の中で、私と町也と一緒に考へてくれた事を嬉しく思つた。

この間牝牛は始終鳴立て居た。

「乳を搾つて貰ひたいんだらう。」と町也は云つた。

私は鐵葉の乳桶を探しに家の中へ走つた。それは前に赤の乳を搾つて居た桶で、牝牛はもうとうに居なくなつて居ても、直は舊のところにちやんと引かけて置くのを私は見て置いたのだ。

私はまづ塵埃まみれになつた乳房を洗つてやるために、この桶の中へ水を入れて来た。

やがてこの乳桶の七分目ほど、泡立つた乳汁で充されたのを見た直の満足は、墮ふるものもなかつた。

「赤よりもよつほど乳が出さうぢやないか。ねえ、民。」

「そして全く上等の乳で。」と町也は口を插み「橙の花の香氣がするんで。」

直は町也の言葉が分らないので、

「え？ 橙の花の香氣とは？」

「それは病氣になつて慈善病院へ入ると、飲ましてくる甘いものなんで。」と何事も獨りで祕密にして置けぬ町也は云つた。

さて乳も搾り、牝牛の綱も解き庭へ放飼にして、私等は家へ入つた。實は私が乳桶を取りに来た時、豫て用意をして来た餛飩粉と牛酪を食卓の眞中の眼につくところへ竝べて置いたので、直はこの第二の「喫驚」を見ると、また頻りに驚嘆の詞を發し始めた。

私はそれを遮ぎつて、笑ひながら、

「母や、だつてこれは私達のだよ。母やも仲間にはするけれども、私も町也も腹がペコ／＼なんで

——、これで銅鑼焼を拵へようつてんだよ。母やも覺えてるだらう、ほら謝肉祭の結日に、母やが私に銅鑼焼を拵へてくれる筈で、牛酪を近所から借りて来て置くと、玉葱をいためるんだつて、すつか

り鍋にあけて了はれた事を。だが今日こそもう邪魔の入りつこが無いんだから。」
「ぢやア民、お前は今權藏が巴里に行つてゐる事を知つておいでかえ。」
「あゝ。」

「おや、それぢや何かえ、あの人が何用で巴里に行つてゐるのか知つておいでかえ。」
「いゝえ。」

「それはお前にかゝり合つた事なんだよ。」

「え、私に？」と私は蒼くなつた。

「けれども決してお前の不爲の事ぢやアないんだから。」と云つたが、町也の方を見て、他人の居る前では話されぬといふ容子をした。

「母や、町也の前なら何を話してもいゝよ。先刻も云つた通り私とは兄弟なんだから。」

「でもね、話すと長い事なんだからさ。」と直は町也の前で話す事を避けた。

たつて話せと云へば、何だか直が拒絶しさうで、さうすると町也が心持を悪くするだらうからと、私は直の氣任せにさせた。

「併し母や、權藏——お父さんが急に歸つて来るやうな事はあるまいね。」

「いゝえ、大丈夫、どうして急に歸つて来るものかね。」

「ぢやア母や、急がずといゝだらう、後でゆつくり聞かしておくれ。」と私は安心しながら「それで

は早速銅羅焼にかゝらう。誰も来て鍋をひつくりかへす人は無いんだから、今日こそはこつちの天下

だ。母や鶏卵はあるかえ？」

「いゝえ、もう一羽も鶏が居ないんだから。」
「途中で破壊すといけないから鶏卵は買つて來なかつたのさ。母や、どこかへ行つて借りて來ておくれ。」

直はハタと當惑顔をしたので、私は直が大分近所に鶏卵の借越を拵へて、置くのだらうと悟つた。

「いゝや、私が行つて買つて來るから。李兵衛の家へ行つたら分けてくれるだらう。その間に母やは

餛飩粉を乳でよく打つといっておくれ。そして町也に云つて薪材を折らしといて。」

私は早速李兵衛の家へ行つて一打ほどの鶏卵を買つたばかりか、豚脂までも分けて貰つて來た。

私が歸つて來て見ると、もう餛飩粉は乳でちやんと解いてあつて、この上は鶏卵を掻き混ぜればいゝのだ。たゞ暫時寝せて置く時間がないが、なに少し位膨が足らぬとて、私等の胃の腑の方が得心して居るからちつとも心配は入らぬ。

直は鶏卵を落したのを一生懸命に打ちながら、

「ねえ、民や、お前はそんなに私の事を思つて居ておくれなのに、なぜ今迄ちつとも消息を聞かして、おくれでなかつたのだえ？ 私には心の中でよく考へくしたのさ——民はひよつとすると死んだのかも知れない、それでなきや、何とかして消息をよこしさうなものだからつて。」

「だつて母やは一人ぢやないんだもの、私を二十圓で人に賣つて了つたお父さんと、一緒に居るんだもの。」

「民、その事ならもう云はないでおくれ。」

「いゝえ、何も不平を云ふんぢやないよ。お父さんはあゝして私を賣つたんだから、私かもし手紙でも出して、居所を嗅ぎつけられたら、きつとまた賣られるに極つてると思つたので、どうしても恐ろしくつて出す事が出来なかつたのだよ。私を買つて行つた師匠が死んだ時などは、ほんとに私の事を母やに知らしてやりたかつたんだけど。」

「民、それぢや、何かえ、お前を連れてつた犬使の音楽師とやらは死んだのかえ？」

「あゝ、私師匠に死なれてどんなに泣いたか知れなかつた。私が今日かうして一本立が出来るやうになつたのも、全く師匠のお蔭なんだから。……それからこつち二年ばかりは、巴里の近在の水原村といふところで、親切な花作りの家に世話になつて居たんだがね。そこでも若し私が手紙を出したら、お父さんが私を探しに来るか、でなきやア私の世話になつて居るところへ無心を云つて来るに違ひないと思つたのだ、私どつちも厭だから、手紙を出したいのを堪へて居たのだよ。」

「あゝ、さうかえ、それでよく分つたよ。」

「手紙は出さなかつたが、嬉しい時でも悲しい時でも、きつと思ひ出すのは母やの事ばかりだつたよ。……」
は牝牛が買つて来られなかつたからね、町也と二人で長い事かゝつて働いて来たんだよ。誰だつて私のやうなものに一圓銀貨なんぞ呉れるものはないからね、一錢二錢とちびく貰つたのを貯込んで、それにや日がな一日疲れた足を曳いて大道を廻り、汗水垂らしながら、飢しい目も凌いで来なけりやアならなかつたのさ。ほんとに随分辛い事にも出逢つたけれども、苦勞すればするほどまた樂みが殖えて来るのも事實だつた、ねえ、君。」と町也を見返ると、

「ウム、毎晩その日の稼ぎ高を數へるのがほんとに楽しみだつたね。」

「その日の稼ぎ高許りぢやアないさ。若しや倍になつてやしないかと、今迄貯めて置いたのも、きつと數へて見てたんで……。」

「あゝ、さうかえ！ まアお前はほんとに揃ひも揃つた感心な兒だね！」

その話の間直はなほ砂糖を入れて餛飩粉を打つて居た。町也は薪を折つて竈の下へ炊つけ始めた。私は皿、肉叉、杯などを食卓の上に並べ、それも済んで今度は筧の水を汲みに行つて来た。

水を汲んで歸つて来て見ると、もう上等の火の出来た上へ、直は揚鍋を乗せて居た。剪刀の端で牛酪を取つて中へ落すと、見る間に融て、じりじりと音を立始めるその景氣よさ。

「あゝ、牛酪が歌ひ出した。どれ僕が伴奏してやらう。」

かう云ひながら町也は急がしくヅキオロンを取上げると、制音機をかけて、靜かに弾きながら、牛酪の煎りつく音と合せ始めた。それが可笑しいとて、直は大笑ひを始める。

けれども今は音楽にかまけて居るやうな悠長な場合でない。直は金杓子で餛飩粉をすくひ上げると、それを揚鍋の中に落した。と見る間に色が變つて來ると、直は揚鍋の柄を取つて軽く打ち、それを手加減でひよいとねると、銅鑼焼は鍋を離れて天井に舞上つたから町也は喫驚して了つた。けれども灰まみれになる心配も何も入らなかつた。舞上つた銅鑼焼は天井で宙返りをする、焼けた方を上に向けて、再び揚鍋の中へ落着いた。

私が皿を取つて差出す間もなく、丸い扁平い銅鑼焼はその中へ滑り落ちた。

まづ初ものを町也にやると、町也は指を焼いて、唇を焼いて、舌を焼いて、それから咽喉を焼いた。併し火傷などの事は思つて居られなかつた。

町也は口一杯に頬張りながら、

「あゝ、どうも素的だ。」

今度は私の番だつたが、私とても火傷などに構つて居られなかつた事は、町也と同じであつた。

三度目の銅鑼焼に、町也が手を出すと、今度はカビが烈しい勢ひで鳴き立て、分前を請求した。それは正當な要求なので町也がカビに投てやると、直は飛んでもない事をする、大事の銅鑼焼な邊の田舎の人同様、犬などに對してはまるで畜生扱をする習慣がついてるから、大事の銅鑼焼などを分てやるのは途方もない事だと考へて居るのだ。そこで私は直を得心させるため、カビは藝の出來る犬で、一座の仲間で、カビが働いて呉れたからこそ牝牛も買へたのだと説明し、私等同様に食べ

させてやらなければならぬと云ひ聞かした。

舊い家族、新しい家族

私等は直が焼いてくれるのが間に合はぬやうに鱈腹平らげた後、今度は直に食べさせようといふので、私等が順番に焼く事にした。牛酪を鍋に引いて餛飩粉を落すだけは何でもない仕業だが、さてその鍋をボンと列て、銅鑼焼を天井で宙返らせ、舊い鍋に受留めるのが離れ業だ。私は二度灰の中へ落とし、町也は慌てて手で受留て火傷をした。

さて餛飩粉が無くなつて了ふと、直が自分の居る前では、話したくないのだとちやんと見抜いて居る町也は、牛を見えて來るからと假托けて、私の止めるのも利かず、庭へ出て直に話を始める機會を與へた。

實のところ私は早く、權藏の巴里へ行つた譯を聞きたくて堪らなかつたので、只銅鑼焼を拵へる一心に今迄紛れて居たのだ。

けれども私は矢張りいろく考へた——權藏が巴里へ行つたのは、多分この年ごろ滯つた私の借賃を美登里老人に取立に行つたのだらう。それなら美登里老人は死んで了つたのだから、もう仕方があるまい。まさか私から取立てようとはしないだらう。けれども若しさうでなくつて、全く私を取返さうとするのなら、その目的は云はずと知れた金にするため、誰でも構はず又何處へでも構はず、私を

高く賣飛ばさうとするのだらう。其氣ならこつちは面白いと思つた。權藏の手が頸ツ玉へ届く前に、私は佛蘭西へお去らばを極めて了はう。そして町也と一緒に伊太利へ行かう。亞米利加へでも、世界の果へでもどこへでも行つて、かこを極め込まう。もうさうく權藏の食ひものにはならないのだ。かう、肚をくゞりながら、直に向つてもいくらか用心しなければならぬと思つた。それは直を疑ふのでも何でもない。直がどれほど私を可愛がり、どれほど私に盡してくれるかも知つてるが、同時に私は直が權藏の前では、猫の前の鼠のやうにすぐみ上がる事を知つて居る。若し私がうかくいろいろの事を喋舌つて了つたら、權藏は直にそれを白状させて、私を探し出す緒を見つけるだらう。だから直にも迂濶な事は云へぬと、かう腹帯を締めてかゝつたのだ。

町也が外へ出て行つたのを見済まし、

「さア母や、二人きりになつたから、お父さんの巴里へ行つた譯を聞かしてくれ、何か、私の利益になる事なのかえ？」と苦笑ひをしながら云ふと、直は眞面目に、

「あゝさうとも！　そして嬉しい消息なんだよ。」

嬉しい消息？　私は呆氣に取られた。

直は話を始める前に、戸口へ行つて見たが、誰も居ないのに安心し、私の傍へ来て笑顔を浮かべながら低聲に、

「お前の家族のものがお前を尋ねてる容子なのだよ。」

「えッ、私の家族のもの！」

「あゝ、さうだよ、民、お前の家族のものだよ。」

「あの、それぢやア私には家族があるの？　私に？　え、母や、捨兒の私に家族が！」

「お前を捨てたのは家族のものぢやアないのかも知れないよ。現在お前を見つけてる位なんだから。」

「それでは誰が私を尋ねてるの！　母や、早く話しておくれ、後生だから。」

かう云つたが突然私は氣でも違つたやうに叫んだ。

「母や、嘘だ！　嘘だ！　そんな筈はない、權藏が私を尋ねてるんだ。」

「さうさ、そりやア權藏がお前を探してるんだけど、それはお前の家族の人に頼まれてだよ。」

權藏の策略に乗つては大變だと思ふので、

「きつと私を探し出して、また誰かに賣る心算なんだ。そんなら二度と私やア捕まりはしないから。」

「あれ、何をおいひだね、この兒は、私が權藏に加擔して、お前を欺すとお思ひかえ。」

「お父さんはきつと母やを欺してるんだ。」

「まアさ、よくお聞きよ。分らない兒ぢやアないか。そんなに恐ろしがるには及ばない事なんだよ。」

とつくりと聞いてからお前が判断して御覽、私は自分の聞いた事を、その通りに話してあげるから。

い、かえ、今度目の月曜日、丁度一月になるがね、私は獅麴燒場で働いてると、この邊に見かけぬ

立派な旦那が家へ入つて来て——權藏と仰しやるのはお前さんですか？　ツて、すつかり調子の違つ

た變な言葉で權藏に聞くのさ、へえ私が權藏で。と權藏が返事をする——巴里の廢兵院前の大通で、捨兒を拾つて、育てておいでなのはお前さんですか？——へえ、私で——そしてその子供は今どこに居ります？——それをお聞きなすつて、お前さん、一體どうしようといふんで——。

私が息を凝して聞入ると、直は言葉を次ぎ、

「お前も知つてる通り、こゝで話をしてると麵麩焼場へ筒拔なんだからね。私はどうやらお前の身上だと思ふので、こりやア念を入れて聞かなければならぬと、壁際の方へ寄つて行くとね、生憎小枝を踏んだので、その折れる音が聞えたらうちやアないか。するとその旦那が氣がついてね、誰か居るやうではないか？ と聞くのさ。」

「いえ、ありや私の娼婦です。と權藏が返事すると、その旦那は——どうもこゝは少し暑苦しいから、外へ出て話をしませう。ツて二人は出て行つて了つたのだよ。きつと村の珈琲店へでも行つたのだらう。三四時間もたつてから、權藏が一人で歸つて来ただらうぢやアないか。私には何だか、其旦那がお前の眞實のお父さんのやうにも思はれたので、權藏と二人の間にどんな話があつたのだらうと、待兼て權藏に聞いて見ると、權藏は一寸も詳しい事を云はず、只その旦那はお前のお父さんではなく、お前の家族のものに頼まれて、お前を捜しに来たのだと、それだけほか云つてくれないのだよ。」

私はもう直の詞を信用せぬ譯に行かなかつた。
「私の家族つてどこにあるの？ 私、お父さんがあるの？ お母さんがあるの？」

「私は拔目なくそれを權藏に聞いて見たのだが、權藏はちつとも知らないといふのだよ。只私にいふにはね、お前を捜しに巴里へ行かなければならない、それにはお前を貸した音樂師が、處書を殘して行つたから、そこへ行つて見るのだつて、明日には村を立つて行つたのだが、その處書を私よく覚えてるから、お前に云つてあげよう。それは巴里の留心町といふところに住んでる我太堀といふ矢張音樂師の家なのだよ。民、お前、よく覚えて置くがよい。巴里の留心町——。」

私は遮ぎつて、

「母や、我太堀の家ならよく知つてるよ。……そしてお父さんは巴里へ行つてから何か云つて知らして来たかえ？」

「いゝえ、何も云つて来ないが、そりや一生懸命にお前を捜してに違ひないのさ。今話をした旦那はね、五十圓といふお金を、手當にと云つて權藏に置いて行つたのだが、巴里では又その外にもお金を渡してたらうと思ふよ。それといひ、またお前が包まつて居た絹布ものといひ、お前の親達はきつともうお金持に違ひないのさ。……私、權藏とお前と行違ひになつた事は知らないから、お前が家に歸つて来て居たのを見た時には、もうお前の親達に逢つておいでなのだらうと思つたのさ。そしてお前があの町也を兄弟だと云つた時には、ほんとにさうなのだらうと思つたのだよ。」

丁度此時町也が戸口の前を通りかけたから、私は呼びとめて中へ入らせ、

「おい、君、僕の親達が僕を見つけてるんだ！ 僕は家庭があるんだよ。眞實の家庭が。」

不思議と私が熱したやうに、町也はこの驚くべき報知を聞いても熱しなかつた。また私の喜びを分つやうにも見えなかつた。

私は物足りなく思ひながらも、今聞いた話を町也にして聞せた。

その夜私はろくく眠れなかつた。けれども昔馴染の子供の時の寢床は此上もなく懐かしい、身體を屈めて、すつかり布団に包まりながら、どんなに美しい夜を、ぐつすりと寝返りも打たずにこゝで過したらう。星の下で寝た幾夜さ、夜寒に凍え、朝露に濡れては、何度この寢床の事を思ひ出したらう。その戀しい寢床に、かうしてまた寝られるかと思ふと、それだけでもう神の恵を謝せずには居られない。

その中に私は日中の疲勞と昨夜の牢の中の疲勞とで、いつか睡眠についたが、すぐにまた眼を覺すと、もうそれから容易に眠られないのだ。

「あゝ私の家族！」

この考へに私の胸は躍り、神経は興奮して來るので、寢ても醒ても考へは唯そのみに集中つて了ふのだ。今寢たかと思ふと、私はすぐにまだ見ぬ自分の家族、父、母、兄妹などを夢に見て居た。奇妙な事に、町也も、小菊も、直も、千島夫人も淺雄さんもみんな私の家族なので、美登里老人は私のお父さんなのだ。老人はまだ生きて居てそして金持になつて居て、狼に食はれたと思つたゼルビノやドルヌまでも尋ね出し、一緒に住んで居たのだ。

短い數分間の眠に、私はこの年頃の出來事を皆見て了つたのだ。そして誰も經驗して知つてゐるやうに、私は夢とは思はれぬ強い印象を受取つた。眼を覺して見ると、ついこれ等の人々と一緒に一夜を過して來たかのやうに、ありくとその姿を見、その聲音を聞くのだ。私はもう眠る事は出來なかつた。

けれどもだんくんに空想の影が薄れて來ると、今度は現實といふものが、また私の睡眠を妨害し始めた。

私の家族を探してゐる——それはもう間違ひ、無いけれども、私が家族と一緒にするには、是非とも權藏の仲介によらなければならぬのだ。かう考へるだけで私の喜びは、もう幾分殺がれて了ふのであつた。私は權藏が私の幸福に立雜る事を好まぬのだが仕方がない。忘れもせず善く記憶して居る。權藏が美登里老人に向つて、どつさりお禮を貰へると思へばこそ、今迄この兒を育てて居たのだと本心を明した事を。

その言葉でも知れる通り、權藏が私を拾ひ上げたのは哀憐のためでも何でもなく、たゞ私が立派な絹物に包まれて居たからだつた。いつか私の兩親に返せば物になると考へたからだつた。ところが容易に物になる宛がなかつたので、私を美登里老人に賣つて了つたのだ。そして今は最初の目的通り、私の兩親に賣りつけようとして居るのだ。

權藏と直とは何といふ相違だらう。直が私を受したのは決して金錢づくでは無かつた。私はドンな

に今度の事につき、権藏でなく、直に利益を得させる工夫は無いかと案じて見たらう。けれどもどうしてもその工夫がつかないから、私は床の中で悶えに悶えた。そして私を生る兩親の前へ連れて行くのは権藏で、また私を養育した禮を云はれ、その褒美を貰ふのも、直でない権藏なのだと思ふと、もう失望せずには居られなかつた。

とうとう私は権藏の事は仕方がないと断念して、その代り私が金持になる以上は、今すぐといふ譯には行、まいけれども、私から直にどつさりお禮をし、褒美を出して慰めてやることにしようと極めて、いくらか心を休めた。

差當つて私は権藏を探しに出かけなければならぬのだ。なぜといふのに、権藏は一々女房に行先を知らして出かけるやうな亭主の種類ではなかつたから、直は唯巴里へ行つたとばかり、巴里のどこに権藏が居るのやら、ちつとも知らぬのだ。今度巴里へ行つてからも、一度も消息をよこさないで、直の方からは手紙の出しやうもなかつた。併しこれまで権藏が悪意にして居た安宿は六札町の界隈に二三軒あつて、何でもその二三軒を尋ね廻れば、その中のどれかに居るだらうとの事であつた。

そこで私は早速巴里へ引返して、私を尋ねて居る男を、私から尋ねて廻らなければならぬ事になつた。私の家族に邂逅といふこの大きな喜びが、かういふ厭な思ひに伴ふのは何といふ情ない事であらう。

私等は平穩に幸福な幾日かを直婆やの家に通し、町也と一緒に子供の時の遊戯をしようと思ふので、

居たのに、もう明日にもこゝを立たねばならぬ運命を持つ事になつたのは、何につけても悲しみのついで廻る世の中である。

私等は直の家を出ると、海岸の繪砂人に行つて、お稲を見舞ふ筈であつたのだ。私はあんなに親切で、そしてあんなに私を可愛がつて呉れたお稲には是非逢つて行きたいのだけれども、今日の場合でもその暇はなささうだから、残念ながら繪砂人行を見合せねばなるまい。

お稲を尋ねた上では、まだ泥内の小菊を尋ねて、兄と姉の消息を知らせる筈なのだ。その方もまたお稲を断念したやうに、諦めて了はなければならぬのだから、私は一晩思ひ悩んだ。或時はどうしてもそんな不人情な事は出来ぬ、お稲も見舞はなければならぬ、小菊も素より見括てはならぬ、と道理つける傍から、或時は、いやその方は後廻しにしてもよい、一刻も早く兩親を安心させるため、巴里へ行つて来るが當然だと、どこからか嘯く聲を聞き取るのだ。

私はとうとうどうとも決する事が出来ずに、寝返りばかりして居た。私に取つて一番嬉しい筈のこの一夜が、實は最も苦しい煩悶に明けて了つたのである。

翌る朝直と町也と三人圍爐裏の前に集まつて、牝牛の乳を暖めてる時、私は昨夜の持ちあぐんだ問題を出して、二人の意見を求めた。

直はいふ――

「そりやお前、巴里へはすぐ行かなきゃアならないよ。お前の親達を探して居るのだから、早く行つ

て喜ばしてやるが孝行といふものだよ。」

この道理を直はなほ敷衍して云ひ聞かした。如何にもそれが尤もと私には思はれたので、

「ぢやア私達はすぐ巴里へ出かける事にするよ。」

ところが町也は私のこの決心に不服の色を示した。

「おい、町也、君はすぐ巴里へ行くのは不賛成か？ どういふ譯で？ 母やもちやんと道理を云聞かして呉れたんだから、君も理由を云つて呉れ給へ。」

町也は頭を振つて説明を避けた。

私かなほ迫ると、漸く口を開いて、

「僕はね、新しい家族が見つかつて、舊い家族を忘れては濟まないだらうと思ふのさ。今日まで君の家族は、お稲や太吉や辨吉や小菊だったんだらう。この四人は君の兄弟姉妹で、みんな心から君を可愛がつて居たんぢやアないか。それに君は新しい家族が見つかつてと云つて——君の家族は昔君を往來へ捨兒にした事を忘れやアしないだらう。それに今度君を見つけてるからと云つて、君にあれほど親切だった家族を見捨てて終つては、ちつと不人情ぢやアないかと僕は思ふんだ。」

直は口を挿んで、

「それは民の両親が民を捨てたのではないに極つてるよ。誰か盗んで捨てたか何かしたので、その時から民の両親は民を見つけてたのか、どうか知れやアしないのなもの。」

「僕、そんな事知らないけども……僕は只小菊のお父さんの岩吉が、門の前で死にかつて居る民を断けた事と、民の生命の親だつて事と、民を家族の中に入れて、長い間の病氣の時だつて、醫者にまでかけて呉れた事と、お稲や太吉や小菊などが眞實の兄弟も及ばぬほど、民を思つて呉れた事を知つてるんだ。だから僕はそんなに民を思つてくれた人達は、捨てたのか盗まれたのか知れないが、どの道君を養實も何もしない家族なんかより、寧ろ大事にしなけりやアなるまいと思ふのさ——忘れて了つてもいゝ筈はないと思ふのさ。何も民に義理があつて、岩吉は民を家族の人にして呉れたんぢやアないんだから、あんな親切な家族つてあるものぢやアないと僕は思つてるんで——。」

町也は私に對して立腹してゐるやうに、私の顔も見ず、直の顔も見ずに、時々聲を震はしながら思ひ込んで辯ずるのだ。それは少からず私の心を傷めたけれども、かう批難されたからと云つて、私は腹も立てなければ道理を囁分る力も失はなかつた。それに私は丁度決斷の鈍い人が、屢々最後の人の意見で動かされるやうに、町也の意見を正當と聞かぬ譯に行かなかつた。

「町也のいふのが尤もだ。僕は何も薄情にお稲や小菊を忘れようとしたのではないけれども……巴里へ行く事は、それぢやア後廻しにしよう。」

「でもお前、生の親達には換へられないぢやアないか。」と直はまた自分の意見に従はせようとした。そこで私は思案の末、申を取つて、

「それではお稲のところへは行かぬ事にしよう、繪砂人へ行くと大變な廻り道になるから。その代り

お稻は讀む事も書く事も出来るから、行く代りに私から手紙を出さう。併し巴里へ行く前に泥内へだけは寄つて行く事にする。大した廻りにもならないから、巴里へ着くのが後れても知れたものだ。小菊は書く事も讀む事も出来ないだし、私が此旅を仕始めたのも一つは小菊の爲なのだったから、是非泥内へ寄つて、太吉の話もし、またお稻には泥内へあて、私へ手紙を貰ふ事にして置いて、その手紙を小菊に讀んでやるとしよう。さうすりやい、ぢやアないか。」

町也は始めて笑傾けて、

「ウム、それならいゝ。」

いよく明日立つといふ事に相談が極つたので、私は午前大部分を費やし、お稻へあてた長い手紙を書いた。

翌る日の別れの光景は決して晴れやかなものではなかつた。けれども美登里老人に手を引かれて、この鯖野を立つた時とはすつかり違つて居た。私は直を接吻する事も出来て、程なく私の親達と一緒に、直に逢ひに来ようと約束する事も出来た。實は前夜今度親達と来る時には何を土産に持つて來ようといろ／＼話し合つたので、その時直はかう云つた。

「どんなお土産を買つても、あの牝牛に及ぶものはあるまい。お前が金持になつてからのお土産よりも貧乏の時のお土産の方が、私に取つてはどれほど嬉しいか知れない。」
私等は牝牛とも悲しい別れをしなければならなかつた。町也は十度も牝牛の顔を接吻した。それが

畜生にも嬉しいと見えて、接吻の都度に長い舌を出し／＼した。

程なく私等は再び大道の人となり、背には背囊、肩には樂器をかけて、カビを前に大股といふよりは、寧ろ時々後から押されるやうに早足に急ぎ始めたので、巴里へ早く行きたいといふ考へが不知不識私の足を早めるのだ。

町也は暫らく黙つて、私の通りに歩いて居たが、やがてこんなに早足で歩いては、ほどなく疲れて歩けなくなるといひ出した。そこで私は歩みを緩めたが、暫時するとまたひとり手に早くなつて了ふのだ。

町也は詰らなさうな顔をして、

「君はほんとに性急なんだね！」

「ウム、さうだね、僕は全く性急だ。だつて君だつて性急になつてもいゝだらう、僕の家族は君の家族なんだもの。」

町也は悲しげに頭を振つた。

私の家族の話になると、町也は何度斯ういふ素振をするか知れぬので、私は物悲しく、寧ろ腹立たしくなつた。

「だつて君と僕は兄弟なんぢやアないか。」

「あゝ、君と僕との間では。僕は今君の兄弟さ、これから先だつてそのつもりで居るんだ。だけど

も——。」

「だけども？」

「だけども僕は君のお父さんとお母さんの子ぢやアない。君に若しほんとの兄弟があつても、僕は君の兄弟の兄弟にはなれないんだ。」

「ぢやア若し僕が君と一緒に、君の郷土の鳥野へ行つても、君の妹の花ちゃんや兄妹にはなれないのかえ？」

「そりやアなれるともさ！」

「それなら、なぜ君だけが僕の兄弟になれないんだえ？」

「だつてそれとこれとは違ふもの、全く譯が違ふんだもの。」

「なぜ違ふの？ 同じぢやアないか。」

「僕は君のやうに絹布に包まつて生れやアしなかつたもの。」

「絹布が何だえ？ そんなものは何でも無いぢやアないか。」

「いやどうして、何でも大有だよ。君だつて僕の通りに知つてるぢやアないか。君が若し鳥野に來たら——かうなつては君はもう決して來てくれないに極つてるけども——僕の両親はその日暮しをして居る貧乏人なんだから。けれどもお直婆やの考へる通り、絹布が物を云つて、君の両親が金持なら、定めてえらさうな顔をして貧乏人なんか見向きもしないだらう。僕のやうなみじめな子供なんか寄せつ

けないに極つてるんだから——。」

「それなら僕も君と同じにみじめな子供ぢやアないか。」

「今はさうさ。けれども明日は君は金持の息子になるんだ。僕は明日になつたつて、今日のやうなみじめな兒で居るんだ。君の親達は君を學校へ遣るだらう。その上にまた先生を君に取らせるだらう。

僕は一人で——たつた一人になつて、死ぬまで大道を渡り歩きながら、君のことを思ひ出して暮すんだ。君もたまには僕の事を思ひ出してくれらうね。」

「おい、町也、全體君はどうしてさういふ事をいふんだえ。」

「僕は思ふ事を有の儘に云ふ迄さ、僕はどうしても君と一緒になつて喜んだり、嬉しがつたりする事が出来ないんだ。今迄僕はこんな事で、君と分れて了はうとは思はなかつたから、いつまでも今の通りの一緒に居るつもりで、後々の事を考へたり、夢を見たりして居たんだ。そりやア今の通りと云つて、何も大道藝人で朽果ようといふんぢやアないのさ。君と二人で一生懸命勉強した上、立派な晴の舞臺で演奏が出来るやうな眞實の音楽家になりたい、そして二人は一生離れずに居たいとたゞその事ばかりを僕は考へて居たんだ。」

「だつてその通りになるぢやアないか。僕の両親がほんとに金持だつたら、僕にして呉れる通りに君にもしてくれるさ。僕が學校へ遣られるなら、君も遣られようぢやアないか。二人はお互に勉強し合つて、どこまでも一緒に暮して行くさ。君がそれを望むのなら、僕だつて決して君に譲りはしない

から。」

「そりやア君の心持はよく分つてゐるけれども、今迄とは違つて、両親があるとなればもう君の自由にはならないぢやアないか。」

「だつてよく僕の云ふ事を聞給へ。僕の親達は僕を捜してゐる位なから、僕を大事に思つてゐる事は間違ひないだらう。さうすれば親達は僕を可愛がつてくれることも確かだ、僕を可愛がつてくれるならきつと僕の願を聞いて呉れようぢやアないか。僕の願といふのは、これまで僕が孤兒だつた間に、僕に親切にしてくれた人達を幸福にする事で、それは直を世話をしてやつたり、岩吉を牢から出してやつたり、お稻と太吉と辨吉と小菊を岩吉に返してやつたり、君を僕と一緒に學校へ入れて貰つたりする事なんだ。だから僕は、若し僕の親達がほんとに金持なら、どんなに都合がい、かも知れないと思つてゐるんだ。」

「僕はまた君の親達が貧乏ならどんなにい、か知れないと思つてゐるんで。」

「君はほんとに馬鹿だなア！」

「僕は馬鹿かも知れない。」

町也はその上には何も云はずにカビを呼んだ。

丁度晝飯の時刻なので、私等は道傍に休息した。町也は犬を兩腕に抱いて、一々云ふ事が解つて返事の出来る人間に物云ふやうに話し始めた。

「おい、カビ、お前も僕のやうに民の親達が貧乏で居ればい、と思ふだらう。」

私の名を聞くと、カビはいつものやうに、満足を表す啼聲を立て、胸のところへ前脚をやつた。

「民の親が貧乏だと、僕等三人は今迄の通り、自由な生活が出来て、英吉利でも伊太利でも好きなところへ行けるんだ。そして唯『見物お歴々』の御機嫌さへ伺へばい、んだ。」

「わん！ わん！」

「もしかまた親達が金持だと、カビ、お前は鐵の柵で圍まれた庭の中へ置かれて、犬小舎を當がはれて、そして鎖に繋がれるんだ。そりやア時々僕等が旅籠の厩などに繋ぐやうな荒縄なんぞぢやアないんだ。上等の鋼鐵の鎖なんだ。だがい、かえ、いくら上等だつて鎖はやつぱり鎖なんだぜ、金持の家のだだと、家屋の中へは入れないだらう、だからさうして鎖に繋がれてゐるんだ。」

私が直の話を聞いて以來、そのみに耽つて居る私の楽しい空想を町也が共に分たうとはせず、却つて私の兩親の貧困を希ふのを見ると、或點迄は腹立しく思はずに居られなかつたが、併し町也がかういふ常に似ぬ悲しい心持になつた譯を悟るには敢て困難は無かつた。町也は決して私の幸福を呪ふのではない。それはただ私に對する強い友愛と、別離に對する甚だしい恐怖の結果であると知ると、少しも町也に、不足をいふところは無かつた。否私は却つて町也の私を愛する深さの限りない事を知る幸福を味はつたのである。

若し私等がその日／＼の麵麩を求めめる心配が無かつたならば、いくら町也の苦情があつても私は駈

足の旅行を續けるのだらう。けれども私等は途中の大きな村や町では、例の興行をやる必要があつた。私の金持の両親がその金を私等に分てくれるのを待つ前に、私等はあつちこつちで汗水垂らして貰ひ集める三錢五錢の端金に満足しなければならぬのであつた。

普通なら鯖野から泥内まで真直に行つて了へば大した日日もかゝらないで済むのだが、私等は矢張途中、大房、山佐、小車、度志津などを興行して廻らなければならなかつた。

それも日々の麵麩だけの心配なら、それほどにして稼がずとも良かったのだが、私等はまた別に野心を持ち始めたのだ。私は直が私に向つて金持になつてからの土産よりも、貧乏の時の土産の方がどれほど嬉しいか知れないといった事を、よく記憶して居るので、私は丁度直を喜ばしたやうに、小菊も喜ばしてやりたいと考へたのだ。私が若し金持になれば、それはいふ迄もなく、小菊にも私の富を分てやるつもりで居るが、それは有る金を分てやるのだから、誰だつて出来る事だ。私は直にした通りに、自分が苦しい目をして稼ぎ出した金で、何か土産を持つて行きたい——「貧乏の時の土産を持つて行かう」かう考へたのだ。

そこで私は度志津までに稼ぎ貯た金で、人形を買つた。なか／＼貧乏人の土産には不似合な、見事な、大きな人形を。併し幸福とそれは牝牛のやうに高くはなかつた。

度志津から泥内までは、途中に鯉代がある外、あとは皆憐な村で、田舎廻りの音楽師などに構つて居るやうな百姓は居ないから、私等は急いで行くだけだ。前に美登里老人と鯉代を通つたのは、千島夫人に別れて間もない時で、ゼルビノやドルスを狼に食はれる前だつた。今私等は鯉代を出て、運河の岸を傳はつて行くのだが、岸の竝木の繁つた中、靜かな水の上を、馬に曳かれて滑つて行く荷船を見ると、千島夫人や淺雄さんと一緒に暮した「白鳥」の上の樂しかつた生活を思ひ出さずには居られなかつた。私等はその曳船の通りにして、かういふ繪のやうな運河を經巡つて居たのだ。

その「白鳥」は今どこに泛んで居るのだらう？

町也と一緒に南部地方を廻つて居る間でも、私は運河に出逢ふ毎に、丁度「白鳥」に別れてから、暫らくやつて居た通り、かう／＼いふ作りの、美しい遊船を見かけたものが無いかと尋ねて居た。どこにもその影が無いのを見ると、或はもう淺雄さんの病氣が癒つて、英吉利へ歸つて居るのかも知れない。どうもそれが一番信用の出来る考へだが、それでも私はこの運河の縁を通りながら、向うの方から馬に曳かれて来る曳船を見る毎に胸を躍らしては、若しや「白鳥」ではないかと待設けるのだ。併しその都度「白鳥」では無かつた。

今は時候が秋で、早く暮れるから、夏のやうに長い道中が出来ない。私等は夜に入らぬ中、なるべく早く村へ着いて、壻を求めなければならなかつた、でいよく泥内へ着くといふ日には、よほど急いで来たのだが、それでも村へ入つた時には、とう／＼日が暮れて了つた。

小菊の叔母のところへ行くには運河を傳はつて行けば世話はなかつた。お勝叔母の所天は閨門番を

して居るので、村の端に當る開門の傍の小きな家に住んで居たのだ。

だん／＼この家に近づいて行くと、私の胸は次第に動悸を打始めた。家の中では焚火をして居ると見え、それが赤々と窓に反射して、往來までも照して居た。

いよく傍に来て見ると戸口も窓もちやんと締てあつたが、窓には錠戸も窓帷もないので、外から中の模様がよく見えた。私は小菊が食卓に就て居て、お勝叔母がその傍に腰かけ、叔父さんらしい男がこちらに背を向けて、小菊の前に陣取つて居るのを認めた。

「今晚餐を食べてる、丁度いゝところだ。」と町也は云つた。

私は片手で静かにと制し、片手でカビを自分の後へ廻し、立琴を肩から卸して、それを弾く用意にかゝつた。

町也は小聲で、

「ウム、さうだ、暮夜吟樂を。こりやアいゝ考へだ。」

「いや、君がやちやアいけない。僕一人で弾くんのだ。」

私は歌はずに、只ナポリ節の手を弾き出した。歌へば聲で分つて了ふと思つたからである。

弾きながら窓の中を見て居ると、私は小菊が忽ち顔を擧げて聞耳を立始めたのと、その大きな限にサツと光が渡すのを認めた。

私は歌ひ出した。

すると小菊は忽ち椅子から飛降り、戸口の方に走つた。私は立琴を町也に渡す間もない位に、小菊を兩腕に抱取つたのである。

家の人が私等の中へ入らせた。お勝叔母は私を接吻してくれた後で、食卓の上に二人分の晚餐の用意をしてくれた。

「叔母さん。」と私は呼びかけて「どうぞモ一人分の用意をして下さい。小さなお客さんを連れて來たんですから。」

かう云つて私は、ボール箱に入れて大事に持つて來た人形を取出し、小菊の傍にあつた椅子の上へ坐らせた。

小菊がその時私に投た眼光は、私の一生忘れ得ぬところであつた。

若し私が巴里に行く事を急がなかつたならば、よほど長い間私等は泥内に逗留するところだつたらう、私と小菊はいつまで居ても、盡きぬ話の種を持つて居たのだ。

小菊は幸福と泥内に連れられて來てから、叔母夫婦に大變に可愛がられて居るのであつた。お勝は五人の兒を産んだが、みなこの邊の女がする通りに、産の兒は残らず見捨てて了つて巴里へ乳母奉公に行つて居たのだ。そして今は一人も兒のないところから、小菊を生の兒同様に可愛がるのであつた。

小菊はまたいろ／＼仕方、どういふ遊戯をして日を暮してゐるかを私に話し、私はまた別れてからの詳しい話は残らずして聞かした。

そして私の話の大部分は、金持の私の家族の見つかつたことで、私は町也に話した通りの事を繰返して、程なく小菊の父の岩吉を牢から出し、皆を幸福にしてやるからそのつもりで待つて居るがよいと語つた。

町也のやうに世渡りの経験のない小菊——また幸ひと、我太堀の學校のやうなところにも居た事のない小菊は、只簡単に金持ほど世の中に幸福なものはないと考へて居た。金さへあればどんな望みでも叶はぬものは無いのだと心得て居た。従つて町也のやうな事は云はずに、私の金持になる事を心の底から喜んだ。父の岩吉が牢へ入れられたのも、貧乏のためで、金持にさへなれば牢からも出られるのだ、此世に金で出来ぬものは何でも無い、その金持になるのは、私でも小菊でもそんな事には頓着しないのだ。二人の中誰が金持になつても、小菊には同じことだつた。そして私等二人は此上もなく幸福を感じた。

私等は只開門の傍で、話して過した許りでなく、町也と三人、人形とカビを連れて、森や野邊を、どんなに楽しく散歩して廻つたらう。

夕暮はまた家の前へ床几を出して——霧の多い時には家の中で、町也と私でいろくの藝盡しをして小菊に聞かせるのだ。けれども小菊は何よりも私のナポリ節が好で、寢際にはきつとそれを望むのであつた。

けれどもすぐに、小菊に訣別を告げて、こゝを去らねばならぬ時が来た。

私の小菊に向つての最後の言葉は、
「今度迎ひに来る時は、四頭立の馬車で来るからね。」
小菊は全くそれを信じて、待つて居るとの意を示した。

権藏の行方

泥内から巴里へ行く迄の間、私は若し町也が居なかつたならば、ほんのその日の麵麩代を得るだけの稼ぎにとめて、後は全速力で巴里へ急ぐことを考へたに違ひない。もう汗水流して働いたところでそれが何になるだらう。買つて行かうとする牝牛があるでもない、人形があるでもない。金を儲けたところで、それが私の兩親への土産になるでは無し、向うへ行けばもうどつさりお金が分けて貰へるのだ。

けれども町也は私のやうには道理をつけなかつた。

「でも稼げるだけは稼いで行かう、巴里へ行つたつて、すぐ権藏が見つかるかどうか分らないんだから。」

「なに、朝見つからなければ午には見つかるさ。六札町はそんなに長い事は無いから一軒づゝ尋ねて歩いてでも知れたもんだ。」

「若しや六札町に居なかつたら？」

「居るところを突止めて行けばいい。」

「ひよつとしたら権蔵は、君が見つからないので、鯖野に歸つて居るかも知れない。そしたら君手紙を出して、その返事の来る迄待たなけりやアならないんだらう。その間一文も無かつたらどうして食つて行くつもりだえ。君は巴里がどんなところか知らない事はあるまい。ジャンチエーの競馬場を忘れやアしないだらう。」

「そりやア忘れやアしない。」

「僕も飢死さうになつて、聖メダル寺の壁に凭れて居て、君に助けられた事を忘れない。僕は一文なして、飢しい目をして巴里に居るのはこりこりだ。」

「だつて僕の両親のそこへ行けば、立派な晩餐の御馳走になれるんだもの。」

「僕は夕飯を宛にして晝飯を抜にするのは厭だ。どつちもありつけなかつた日にやア、やりきれないからね。朝飯も晝飯もどつちも食ふ工夫をしようや。そしてまた君の親達に牝牛を買つて行くつもりで稼がうぢやアないか。」

それは如何にも分別のある忠告だつたに相違ない。けれども私はどうしても直の牝牛を買ふ時、または小菊の人形を買ふ時のやうな、熱心な態度で歌つたり弾いたりする事が出来なかつた。

「君は金持になつたら、怠惰者になるだらうねえ」と町也は云つた。

その中私等はだん／＼巴里近くなり、いつか私と町也とで、皮切に、婚禮の舞踏をさせた大きな百

姓家のある村へ来た。この新婚の夫婦は私等を覺えて居り、早速また舞踏の催しをして、私等に夜食と寢床を與へてくれた。

翌日こゝを立つて私等はその日いよく巴里へ入る事になつた。數へて見ると巴里を出てから丁度六箇月と十四日になる。

巴里を出た時に引かへて、時候は鬱陶しく寒くなり、空にはもう太陽もなく、地上には花もなければ緑もなく、たゞ秋の霧が野山を立罩めて居るばかり。道傍の塀の上から、私等の頭に滾れて来るのは、もう紫羅蘭花の花弁ではなくて、黄くなつた木からちぎれて来る木の葉であつた。

併し時候などは悲しくてもどうでも善い。私等の胸は喜びに満ちて居たから、華やかなのはたの景氣で心を紛らすやうな必要は無かつた、尤もこゝで私等と云つては正當ではないかも知れぬ。喜びに満ちて居たのは私だけらしくかつたから。

實際町也は巴里へ近づけば近づくほど滅入つて来るやうな容子で、ちつとも私に口を利かないで、黙つて歩いてるのだ。

町也はちつともその譯を云はぬけれども、私はきつとまた私と訣別れる取越苦勞をして居るのだらうと思ふので、今迄にもう何度も繰返した事をまた云つて慰めるのは煩はしいから黙つて居た。

すると私等がいよく巴里の堡壘の前へ来て、丁度時刻なり、また一足こゝを踏入れれば巴里なのだから、腹を拵へて行かうと云ふので、堡壘の土堤に腰を卸し用意の晝飯に取かゝつた時に、町也は漸

く口を開いて、今迄自分の胸に支へて居た事をいひ出した。

「君は僕が巴里へ入るので何を考へてるか知つてるかえ？」

「知らない。だけれども——。」

「僕は我太堀のことを考へてるんだよ——もう牢から出て居る頃ぢやアないかと思つて、僕は我太堀が牢に入れられた事だけを聞いて来て、残念な事に、いつ迄入れられてるんだか、それを聞かないで来たんだからね、今頃はもう牢から出されて、留心町に歸つて来るかも知れないぢやアないか。六札町も留心町も同じ界限なんだから、僕ひよつと六札町まで行つて、我太堀に見つかつたらどうしようと思ふんで……我太堀はあれでも僕の主人なんだし、伯父なんだしするから、捕まつたらもう逃げられつことはないんだもの。僕の我太堀が恐いのは、丁度今迄君の権藏が恐かつたのと同じ事なんだよ、一度我太堀に捕まつたらもう君とも逢へないし、郷里へ歸つてお母さんや妹を見る事も出来なくなるんだから……。」

私は自分の家族の事ばかりにのぼせ切つて居て、すつかり我太堀の事を忘れて居たのだ。なるほど町也の心配は無理もないところで、もし我太堀に見つかつたらそれこそ一大事である。

「それぢやアどうする？ 君、巴里に入るのは厭かえ？」

「なアに、留心町の近所へさへ行かなけりやア、我太堀に捕まる氣遣ひはないと思ふよ。」

「あ、それなら、君は六札町へ行かなけりやアい、僕が一人で行つて来るから。その代り夕方の七

時にとつかで逢ふ約束をして置かう。」

そこで私等はノートルダム大寺院の前で、七時に行逢ふ事に相談を極めて、いよく巴里に足を踏入れた。

伊太利廣場まで一緒に来て、町也にはそこで犬をつけて分れたが、何だか二度と逢はれぬやうな氣がして悲しく思つた。町也はカビを連れて植物園の方に降つて行き、私はそこから餘り遠くもない六札町の方へ志した。

この六ヶ月以來、私が町也もなし犬も無しに巴里の大道を一人で歩くのは始めてで、何だか悲しい辛い感じを覚え、泣きたいやうな氣がした。併し今私の家族が見つからうといふ幸先に、不吉な涙などを見せてはならぬと、われとわが心を勵ましたのである。

私はそこへ行けば大方権藏が知れるだらうと直に云はれた二三軒の家の名を手帳に書留めて来た。けれどもそれはたゞ用心のためだったので、私には手帳を出して見る必要は無かつた、手帳を見ずとも私はちやんと三軒の名を覚えて居る。それは三笠と八百吉と入舟と。

六札町へ入つてから最初に私がぶつかつたのが三笠で、それは汚い料理屋だつた。私は思ひ切つて中へ入つて見たが、私の権藏を尋ねる聲は震へて居た。

「何だ、その権藏といふのは？」

「鯖野から来て居る権藏で。」

「鯖野から來てる權藏だ？ 全體何をしてる男だ？」
私は權藏が舊石工をして居た男だと話し、權藏の人相——と云つても何年か前に巴里から歸つて來たのを見た時の人相を並べて見た。

「こゝにはそんなものは居ないぜ。丸で知らない男だ。」

私は禮を云つてそこを出て、今度は八百吉を尋ねた。八百吉といふのは果實店を出しながら家具附の部屋賃をして居る家だ。

私は店へ入りながら問をかけた。

始めの中私は無益に耳を澄して居た。夫婦とも取込中で、亭主は何でも渡蓑草か何かの挿身を、饅頭のやうなもので切つて居て、女房は買物に來たお客と、一錢多いとか少いとか云合つて居た。二人は私の方は見向きもしなかつた。

私は三度目に問をかけると、漸くその返事——

「おゝ、さう〜鯖野の權藏——何でも家へ置いたことがある。四年程前だつたらうな。」と亭主は女房に話しかけた。

「もう五六年になるよ。一週間分拂はずに逃て了はれたつけ。どこに居るだらうね、彼奴は？ ちつとも顔を見かけないが……。」

私の聞かうとする事を女房は聞かうとして居た。

私は失望しながら八百吉方を出たが、今度は心配が嵩み始めた。残つてるのはもう入舟だけで、もしそこで權藏の居處が分らなかつたら、どうしたらいいだらう。どこを探せば權藏の所在が分るだらう。入舟も三笠同様小さな料理屋だ。私が中へ入つて行くと、主人が料理場に働いて居て、大勢の客の切盛をして居た。

私が問をかけると、主人は今杓子で汁を客の皿に盛るところであつたが、

「權藏か？ 權藏ならもうこゝには居ないぜ。」

「ぢやアどこに居るんです。」と私は聲を震はして聞いた。

「さア、どこに居るかな。」

私はぐら〜と眼が眩んで、そこら中のもものが廻り出したやうに思った。

「でもどこへ行つたら權藏が見つかるでせう？ 後生だから、小父さん、知らして下さい。」

「權藏は處書も何も置いて行かないから、探しやうも無いなア。」

かう聞いた時の私の落膽した顔附は、よほどよく物を云ひ、そして餘程氣の毒に見えたのだらう。竈の傍の食卓で、食事をして居た一人の男が私に尋ねた。

「全體、お前は權藏を尋ねてどうしようといふんだな。」

私は事實を有のまゝに語る事は出来なかつたから、

「私は權藏の郷里の鯖野から、女房の消息を傳言つて來たんで、女房はこゝへ來ると權藏の居どころ

「が分るつて、私に云つたんですが——。」

主人は私に尋ねた男に言葉をかけた。

「若し、お前さん、權藏の居所を知つてるなら、この兒に云つてやつたらどうです。權藏の不爲になる事でもなささうだし……。なア小僧さん。」

「えい、さうですとも。」

私の胸は希望で躍つた。

「權藏なら大捨路地の寒垂旅館に居る筈だ、尤もその後逢はねえが、三週間ばかり前にはそこに居たんだ、今でも居るだらうよ。」

私は禮を云つてそこを出た。大捨路地といふのは多分大捨橋の近所にあるのだらう。それならそこへ行くのに丁度留心町の傍を通るから、町也に知らしてやるため、我太堀の消息を聞いて行かうと考へた。

例の路地へ来て見ると、初めて美登里老人とこゝへ来た時見た、同じよぼく爺が陰氣な庭の壁へ襦袢を引かけて居た。あの時からいつでも爺さんは襦袢をかうして引かけて居るものと見える、私は詞をかけて、

「お爺さん、我太堀親方は歸つて來てますか。」

爺さんは私を見たが返事をせず咳をした。私はその襦袢買の爺さんに、私が我太堀の居所をちや

んと知つてる事を會得せる方がよからうと思つたので、意味ありさうな容子をして見せながら、

「我太堀親方はまだ行つてるんですかね。どんなにか退屈でせうね。」

「さうよな、退屈だらうが、それでも日日は立つて行くわな。」

「お爺さん、だつて娑婆ほどは日日が早く立たないでせう。」

爺さんはハ、ハ、と笑ひかけたが、その笑ひが忽ち強い恐ろしい咳に變つて了つた。私はその咳のとまるのを待つて、

「まだすぐは歸つて來ませんか。」

「まだ半年先だ。」

我太堀はなほ六箇月牢に入れられて居るのだ。町也はほつと息を吐くだらう。またそれだけ間があれば、私の兩親に頼んで、我太堀とその甥をすっかり絶縁させる事も容易く出来るだらう。

私はこゝを出ると、足早に大捨路地に急いだ、心は喜びと希望に満ちて居て、そして權藏に對しても、大變に寛大な心を持つやうになつて居た。

多分權藏はその見かけのやうな、意地悪の根性曲りではないのだらう。今迄は思ひ出さずに居たが、私が多分權藏に廢兵院前で拾はれなかつたならば、その時死んで了つたかも知れぬのだ。お直に育てられたのも全く權藏に拾はれたからこそで、權藏を怨む道理はさらく無いのだ、かう道理をつけたながら權藏に逢つたら、なるだけ白い齒を見せてやらうと、いそぐ大捨橋へ來て道を尋ねると、

大捨路地はすぐ知れた。

寒垂旅館と云ふのは、古ぼけて如何にも見すばらしい宿屋で、頭が始終震へて居て、耳の半分聞えぬ婆さんが持つて居るのだ。

「鯖野の権藏はこゝに居りますか。」

私が斯う尋ねると、婆さんは自分の耳の後へ手をあてがつて、私に近く来て聞けと合圖した。

「私やね、ちつとばかり耳が遠いんだから。」

「私は権藏に逢ひたくつて来たんです、鯖野から來てる権藏に。権藏はこゝに來て居るでせう。」と、私は婆さんの耳の傍で大きい聲で云つた。

すると何うしたといふのか、婆さんは返事もせず、突然に兩腕を空に舉げて天井を仰いだから、膝の上に寝て居た猫がびつくりして床に飛下りた。

「あゝ！ あゝ！」と婆さんは溜息をつくのである。

それからまた頭を一層強く震はせながら、私の顔を穴のあくほど見て、

「まアお前さんがその兒なのかしら！」

「えッ？ その兒つてどの兒？」

「あの人の探して居た——？」

この詞を聞くと私の胸は締めつけられるやうに小震ひをした。

「あの権藏がですか？」

「さうさ、あの死んだ権藏が。」

私はよろ／＼と立琴に凭れて辛く踏止まつた。

「えッ！ 権藏は死んだんですか。」

私は婆さんに聞えるほど高く叫んだが、その聲は破れたやうに嘎れて了つた。

「あゝ、死んで了つたよ。聖アントニオ慈善病院でこの八日許り前に。」

私は忘心者のやうになつてそこに突立つた。権藏が死んで了つた！ 私はどうすれば兩親に邂逅るだらう。またどこを探せば私の家族が見つかるだらう。

婆さんは言葉を續けた。

「それではお前さんが、やつぱりその兒なのかえ？ 権藏が金持の親達に返へすと云つて探して居た——。」

私は若しやこの婆さんの口から何かの手がかりでもと、いくらか希望を持つて、婆さんの詞を遮ぎつた。

「お婆さんは、あの知つてるの？」

「権藏に聞いて知つてるんだよ、権藏の話では、十年前に拾つて育てて居た捨兒の親が、今度その兒を見つけてるので、探して返してやれば、どつさりお金になるからつてね、それで巴里へ探しに出

て来て居たのだが——」。

「そして私の親達といふのは巴里に居るんでせうか。」と私は息を喘ませて聞いた。

「お、それではやつぱしお前さんがその兒なんだよ。あのお前さんがその兒！ お前さんが！」
婆さんは懸命に顔を振廻しながら、また私の顔を横縦から眺め始めた。

けれども私はそんなに吟味させる間を興へず。

「お婆さん、願だから、知ってる事をみんな云つて下さい。」

「おや、まア、この兒——おや失禮……あの坊様、實はその外にもう何にも存じませんのでございませよ。」と俄に丁寧な言葉遣ひに改まった。

「權藏が私の家族の事について、何か云つて居ませんでしたか。何でも聞いた事を考へ出して下さい。私がこんなに途方に暮れて困つて居るのは、お婆さんにも分るでせう。」

婆さんは私に答へる代りにまた、兩腕を空に舉げた。

「まア飛んだ因果な話だ！」

丁度その時下女らしい女がこゝへ入つて来た。すると婆さんは私の方を打棄つて、その女に向ひ、

「まア飛んだ因果な話もあるものぢやないか。この兒が——この坊様がそれ、權藏の話をして居た一件の捨兒……お、失禮！、その……何なんだよ、權藏の探して居た坊様なんだよ、權藏があんなに血眼になつて探して居る時には見つからなかつて、今坊様が斯うしてお出になると、もう權藏は此世

に居ないんだもの、まア飛んだ因果な話ぢやアないか。」

成程因果な話といふものかも知れぬ。けれども私は因果か、因果でないか、そんな事には構つて居られぬ。

「えい、お婆さん、權藏は何か私の家族の事について云つて居ませんでしたか。」

「そりやア和君、十度も二十度も云つて居ましたよ、金は呻るほど銀行に預けてある大金持ちだつてね。」

「そしてどこに居ると云つてました？ 何といふ名か、それも云つて居ましたか？」

「あゝ！ それは……。」と婆さんは、肩を聳やかして「權藏はそれだけは誰が何と云つても、決して申しませんで、祕密にして居りましたよ、何でも一人で褒美のお金に預らうつてんで、第一あの人はなかく曲者でございましたからね。」

あゝ權藏はその死と共に、私の素性をも葬つて了つたのだ。

漸く手が届きかけたところで、私の足場は轉覆されて了つた。あゝ、今まで見て来た私の楽しい夢は！ 胸に養つて来た希望の数々は！

「それぢやアお婆さん、權藏が打解て話をして居た人でもあるなら知らして下さい。」

「權藏は決して他人に祕密事を打明けけるやうな人ではございませんでした。」

「誰か私の家族のものが、權藏を尋ねて来た事は有りませんでしたか。」

「いえ、一度もそんな方はありませんでございませよ。」

「誰か権藏の友達を知つてゐるなら云つて下さい。」

「あの権藏に友達は一人もございませんでした。」

私は兩腕で頭を抱へ込んだ。けれども此場合どうすればいいのか、もう考へも何も浮ばない、全く混乱して途方に暮れて、茫然とそこに佇んだ。

「お、さうく。」と婆さんは長い事考へた末、「二度書留郵便が届いた事がございましたよ。」

「お、どこから来たんです、それは？」

「いえ分りませんで……郵便配達が直接に権藏に渡しましたから。」

「ではその手紙がどこかにありさうなもんですね。」

「いえ、和君、これも探して見ましたが、見つかりませんで……。」

「どうして探したんで……？」

「あの坊様、それはかうでございますよ。権藏が死にました時、こゝへ置いて行つた持ちものを調べて見ましたので、いえ、それは決して好奇心にしたのではございません、女房さんに死んだ事を知らしてやらなけりやアならなかつたもんですからね。それで調べて見ましたのですが、和君、何にもございません。病院の方にも着物の中にも何一つ書類などは有りませんでございませよ。尤も鯖野といふ事をよく申して居ましたから、何でも鯖野で分るだらうと、計報は鯖野へあてて出しましてございませよ。」

「ちやア直は計報を受取つたんだ！」と私は呟いた。

この上何か尋ねて見る事も考へたが何も無い。婆さんはもう何にも知らないのだ。権藏は自分の儲口を嗅出されるやうな手掛りは何一つ残して置かなかつたのだ。

私は全く途方に暮れながら、婆さんに挨拶もせず、ふらく戸口の方へ出かけた。

「そして和君、どこへ行らつしやいます？」

「いえ、あの……友達が待つて居るんで。」

「おや、まアお友達がおりで？ あの巴里に住んでお出の方でございませるか。」

「なアに、友達と二人で田舎から今日巴里へ出て来たんで……。」

「それではお宿は？」

「宿なんぞはありません。」

婆さんは忽ち機會を捕まへた。

「お、お宿が無ければ私共にお泊になつては如何でございませよ。お誂へ向の居心のよい室が只今空て居ります。何も自慢を申すのではございませんが、私共は正直一方でございませよから、お泊の方にどれほど安氣かも知れません。その邊にある悪宿などにお泊り合せになると災難でございませよ。それに和君、若し坊様の御家族が権藏の消息のないにあぐみ果て、尋ねてお見えになればきつと私共で

ございませう、二三日にはお出になるかも知れません、私共の外に權藏の行方の判るところは無いのでございませうもの。ねえ和君、さうなさいまし、決して悪い事は申しません。坊様、私共を外にして和君の御家族を見つければ行く宛のあるところと申しては、どこにも無いではございませんか。この婆は坊様のお利益を思つて申上げるのでございませう。……そして和君のお友達は年長の方で居らつしやいますか。」

「いゝえ、僕より下なんです。」

「おや、まア！ 和君方お二人きりで巴里の真中へ！ この巴里と申すところは薄情なところでございませうから、お子供達ばかりで、外に附添人でもない、てんで相手に致しません。それに宿屋と申しましても、騒々しかつたり、悪い者が出入りしたりいたしましてね、私共ならちつともそんな心配はございません……まことに物靜かに安氣でございませう。第一この界隈が至つて靜でございませうから。」

私にはこの界隈が物靜かだとは受取れなかつた。それにこの寒垂旅館と云つたら、私は随分とそちこちの旅行中に汚い哀れな家も見ただけでも、まアこんな汚い見すばらしい宿屋は餘、見かけた事が無かつた。それは酷い宿屋にも泊り合したが、如何に私等でもこの婆さんの申出にはまづ二の足を踏むところであつたらう。併し今は實際そんな不足がましい事を云つて居られる場合では無かつた。若し私の家族がすぐにも見つかつたなら、大連の贅澤な旅館と一緒に泊るか、巴里に住んで居るのなら、その綺麗な邸宅の一室に安々と寝る事も出来たのだらうが、そんな事は考へて居られない。

この寒垂旅館ならまづ大した費用が掛らずに済むだらう。差當つてまづ費用から先に考へてかゝらねばならぬ身の上なのだ。あゝ今思へば泥内から巴里へ来る間一生懸命稼ぐ事を勧めた町也は私よりもよつほど賢かつた。若し私等が今懷中に七圓の稼ぎ貯がなかつたらどうするところだつたらう。

私は婆さんに向つて、

「私と友達と二人寝る室代はいくらです。」

「一日二十錢宛頂けばよろしうございませう。全くそんなお廉い室代では引合はないのでございませうが……。」

「それでは晩にまた來ますから……。」

「おや、それは難有うございませう。どうぞお早くいらつしやいまし。夜分巴里は險呑なところでございますから。」

これから町也に逢ふのだが、併し約束の七時迄には大分餘計な時間があるので私は仕方なさに、滅入きつて植物園の中へ入つて行つて、そして人の居ない隅へ行つて、櫛に腰を卸したが、もう歩く氣も何もないやうに落膽して了つた。

倫敦へ

私は餘りに急遽に、餘りに暴々しく、絶望の谷底へ蹴落された。私はあらゆる不幸といふ不幸に、

血潮を涸渴して了ふため生れて来たのだらう、私はいつでも確とした足場へ縋らうとして手を伸ばすと、いつでも捕まへた枝が折れて、地上へ振落されるのだ。

旅館の婆さんの云草ではないが、私に是非とも権藏の必要がある時には権藏は死んで了つて、私を探して居る人——きつとお父さんに違ひない——の名も番地も、知る傳手が無くならうとは、まア何といふ因果な話なのだらう。

私は常磐木の木下蔭の榻で、涙に眼を脹しながら、悲しく考へ込んで居るときに、一人の紳士と夫人が、小さな玩具の馬車を曳いた子供を連れて来て、私と向合つた向側の榻に腰をかけるのを認めた。

その夫婦は自分達が腰を卸すと、子供の名を呼んだ。するとその兒は馬車を放つて置いて、兩腕を開きながら兩親の方に駆けよつた。まづ初めに父親がその兒を抱へて房々とした髪に強く接吻したので、その音がよく私のところまで聞えた。父親は今度その兒を母親に渡すと、母親はまた同じやうにしてその兒を抱へて、同じところへ何度も接吻した。その間子供は嬉々と笑ひながら、その小さな小高の入つた、丸々とした可愛い手で、兩親の頬をびたくと叩いて居た。

私は兩親の幸福と子供の喜びとを見ると、思はず識らず涙を滾した。私は一度でも兩親にかうして可愛がられた事はないのだ。あ、これから先、果して兩親に接吻される望みがあるだらうか。ふと或考へが胸に湧いたので、私は涙を収め、立琴を取つてその兒のため、靜かに舞踏を弾出した。

た。するとその兒は小さな足で拍子を取始めて居たが、暫らくすると、父親が私の傍へ来て、一枚の銀貨を私に呉れようとした。私は丁寧な禮を云ひながらそれを押返して、

「いゝえ、そんなものは頂きません。可愛い嬢ちゃんに弾いて聞かして上げたんで、私が自分で樂しまうとしたのですから。」

紳士は驚ろいたやうに、親切な眼で私を見た。けれどもその時公園取締の巡查が来て、この紳士が私のために辯解して呉れたに拘はらず、すぐこゝを立去らなければ、公園規則違反の廉で警察へ拘留すると、荒々しく私を追立てた。

私は黙つて立琴の紐を肩に通しながら、そこを離れたが、何度も振り返つて見ると、その紳士と、夫人は氣の毒らしい顔をして、いつまでも私の方を見送つて居た。

植物園を出たが、まだノートルダムへ行くには時間が早いから、セイヌの河畔へ出て水を眺めながら河岸を逍遙始めた。

その中夜になつて、街燈に瓦斯が點り始めたから、私はそろ／＼二つの高い塔が、入日の後の紫ばんだ空へ、くつきりと黒く抜けて居たノートルダム大寺院へと目指した。

程なく寺の前へ来たが、まだ／＼時間が早いため、町也の姿は見えなかつた。私は餘程長い道中であつた。来て来たやうな疲労を覚え、足は何だか棒のやうになつてゐるので、そこで見出した榻の上にこれ幸ひと腰を卸し、またも悲しい考へに耽り出した。私は今迄つひぞこんなにも沮喪し元氣の無くなつた

事は無かつた、私の腕の中ばかりか私の周囲のものも、皆悲哀に閉ざされて見えぬものは無く、この晝を欺くやうな華やかな巴里、車馬の織るやうに行交ふ巴里の真中に居て、私は荒野の淋しい闇の中に、只一人残された迷ひ兒のやうに感じた。

私は只お寺の鐘を聞いて時間の進むのを注意しては、氣を紛らして居た。町也のあの優しい、晴やかな眼光を見て、その口から慰藉の言葉を聞くことは、この時の私に取つてどんなに必要であつたらう。

七時少し前に、私は忽ち嬉しさに吠える犬の聲を聞きつけたので、その方々向くと夕闇に白く眼に立つものが私の方へ走つて来た。カビが私の膝に飛びかゝつて、私の手を嘗め始めたので、突如カビを抱きかゝへると其顔に接吻した。

すぐ町也が姿を彼方に現して、

「どうだつたえ？」と遠くから聲をかけた。

「権藏が死んぢやつた！」

町也は私の傍へ駆て来たから、私は急がしく手短かに、聞いて来た事を話した。

町也は心からこの悲しい消息に同情してくれたので、私は悲しみの中に何とも云へぬ嬉しさを覺えた。そして私は、町也が私の家族を見つきたい考へは、その實私にも劣らぬのだと感じた。

町也は親切な言葉で私を慰め、取分け失望しては行けぬと勇氣づけて呉れた。

「君の両親は権藏の消息を待つてゐるに違ひないんだから、もし権藏の消息がないと、きつと心配になつて、寒垂旅館へ来るだらう。僕等はその寒垂旅館へ行つて居ようぢやアないか、何も君、落膽する事は無しよ、君の家族の見つかるのが、只少し後れるといふだけだもの。」

それは頭の震へて居るあのお婆さんも云つた事だ。けれども町也の口から聞くと、大變に力のある道理に聞えた。なる程今は只時日の問題だけなのだ。親達に邂逅ふ日が遅れるといふだけなのだ。少しも失望する事は無い。

私は漸やく心持が落ちついて来たので、今度は我太堀の事で聞いて来た事を町也に話した。

「おゝ。まだ半年！」

町也は斯う叫びながら、町の真中で踊り出したが、忽ち舞踏を止めて私の傍へ来ると、
「君の家族と僕の家族とは何といふ違ひだらうね。君は家族が見つかからないつて失望し、僕は家族を失したつて喜んでるんだ。」

「だつて伯父さんは——我太堀のやうな伯父さんは家族ぢやないぢやないか。君が若し妹の花ちゃんを無くしても、今のやうに舞踏を踊るかへ。」

「おゝ！縁喜でもない、そんな事云はないでくれ給へ。」

「それ見給へ。」

私等は河岸傳ひ、大捨橋迄上つたが、冴え渡つた秋の月に照されたセイヌ河は、いろくゝの感情に

充されて居た私の眼にも如何に美しく見えたらう。

寒垂旅館は正直な宿屋なのかも知れないが、その汚く狭苦しい事は入つて見るといよく驚ろくばかりだ。私等の案内された室といふのは、屋根裏の、一人が立つて居ようと思へば、一人は是非共寝臺に腰を掛けて居なければ、身體の動きが取れぬやうな小さな、ひどい室だつた。巴里へ来てこんな汚い豚小舎のやうな中に寝ようとは、私は決して夢に見て來なかつた。そしてその寢床と云つたら、色もなにもすつかり褪せて黄くなつた木綿もの、板のやうな布圍が掛てあるといふだけ、直があんなに云つて居た絹布物の私の産衣も一向物を云ひさうにない。寢しなに取つた晚餐の御馳走と云つたら、これまた麵麩に伊太利風乾酪を塗りつけたものだけで、これも私が巴里へ来て町也に御馳走してやらうと考へて居たとは、何といふ違ひ方であつたらう。

併し幸ひにまだ望が無くなつたといふ譯ではない、たゞ少し辛抱して待つて居ればいゝ譯なのだからと、私は無理に道理づけて、汚い床に潜り込んだ。

翌朝私は直に宛て報知やら悔やら依頼やらの長い手紙を書いた。そして若し直が私の家族から權藏の問合せか何かの手紙を受取つたなら、すぐ寒垂旅館まで知らして貰ふ事と、殊に私の家族の宛名番地を落さず知らして貰ふ事を求めた。

それが済むと、私のなさねばならぬ辛い事がまだ一つ残つて居た、それは牢屋に居る小菊の父岩吉に逢ひに行く事である。私は泥内で小菊に逢つた時に、私が巴里で私の富豪の兩親に逢へたら、まっ

さきに、岩吉を牢から出して貰ふ事にし、私自身が岩吉の迎ひに行くところと約束して來たのだ。

それを今手ぶらで行かなければならぬとは、

けれども私はお稲や、太吉、小菊等の消息を岩吉に傳へれば、どれほど岩吉を幸福にするかも知れぬと思ふので、氣を勵ましながら、早速クリシーの牢獄に行く事にした。

牢獄が見たいといふので、町也も一緒に連れて行つた。

今度は前のやうに牢門の前に長い事うろ／＼して居る心配は無かつた。すぐ牢門番の兵隊に頼んで入れて貰つた。例の面會所に待つて居ると、程なく岩吉が出來て來て、嬉しさうに、

「お、よく來てくれたな！」と云ひながら私を抱いて接吻してくれた。

私は早速太吉と小菊の無事で居る事を話し、それからお稲を尋ねなかつた譯を話さうとすると、岩

吉は遮ぎつて、

「そしてお前の親達は見つかつたか？」

「え、ちやアお父さん知つてるの？」

岩吉は今から凡そ二週間ばかり以前に、權藏が牢へ尋ねて來た事を話した。

「その權藏は死んぢまつたんです。」

「何だ？ 權藏が死んだ！ お前が逢はぬ中にか？ やれく。」

岩吉は權藏が自分を尋ねて來た次第を話した。それによると權藏は美登里老人の書残して行つた宛

名を便に、まづ留心町の我太堀を尋ねたのだ。ところが我太堀は入牢中なので、牢屋へ行つて面會し美登里老人が死んだ事と、私が水原村の花作り岩吉方に世話になつて居る事を聞取つた。で早速水原村へ出かけて行つたが、そこで岩吉がクリシーの牢獄に居る事を聞いたので、今度は牢獄へ来て岩吉に逢つたのである。

岩吉は權藏に向つて、私が今佛蘭西中を稼いで廻つて居る事と、どこに居るか心當りは少しもないが、どの途早かれ晩かれ自分の子供等の散つて居る先へ廻つて来る筈だと話した。そして岩吉は權藏に頼まれて、自分から泥内と割巢と繪砂人と、邯鄲へあてて手紙を出したのだ。泥内への手紙は、多分私が彼地を立つてから届いたのだらう。

「そして權藏は私の家族の事を何か云つて居ましたか。」と私は尋ねた。

「いやこれといふ程の事は何も云はん。只お前の親達が、癡病院の近所の警察署で調べて、何年の何月何日、癡病院前の大通りに捨てあつた兒は、鯖野の石工權藏といふものに拾はれて居るといふことを突止め、鯖野へ出かけて行つて權藏を尋ねたので、それで權藏はお前を見つけて居るのだと云つて居た。」

「親達の名を云つて居ませんでしたか？ またその親達がどこに住んで居るとか……？」

「己はそれも聞いて見たのだが、後で話すと云つて打明けないのだ。何でもお前の親達から取出す分前を減されては堪らんとお思つて、そこで秘密にして居るのだらうと感づいたから、己も是非聞かうと

もしなかつた。それに己は二年間お前のお父さんだつたところから己が仲間入をしたい量見でも起したやうに邪推し出したから、己は怒つて權藏を追返してやつたのだ。まさか死ぬとは思はなかつたが、かうなつて見るとお前は全く、彼奴の慾ばりのため、折角見つかかりかゝつた兩親をまた失つて了つたのだ。どうも氣の毒なもんだな。」

私は岩吉に向つて、まだ失望するには及ばない、兩親に逢ふことも今は只時間の問題だと思ふと話すと、

「いや、違ひない。お前の親達は鯖野で權藏を見つけたのだし、權藏はまた我太堀や己を造作もなく見つけた位だから、きつと誰ぞお前をその寒垂旅館に見つけに来るだらう。まア當分辛抱してそこに居るがよい。」

此言葉はまた少からず私を力づけ、私の氣分を引立てた。自分の話も濟んだから、今度は小菊の話、太吉の話、私が割巢で生理になつた話などを詳しくして聞せた。

岩吉は聞く事毎に驚ろきながら、
「何といふ恐ろしい職業だらうな。太吉奴、可哀相に……それに比べりやア紫羅蘭花を作つてる方がどれほど幸福か知れなかつたな。」

「またすぐさうなりますよ。」

「民、そんな願はしい事はないけれどもなア！」

私は両親が見つかり次第、頼んで岩吉を牢から出してやると云ひたかつたが、さういふ約束の滅多に出来ぬ事は、今度蹉跌したので分つてゐるから、ちつと堪へて了つた。

町也と二人牢を出ると、町也は私に向ひ、

「食はずに君の親達を待つてゐる譯には行かないから、今日は天気も上等だし、これから一つ稼いで歸らうぢやないか。僕に取つては巴里は家のやうなもので、どこへ行けば稼ぎが出来るか、すつかり心得てるんだ。」

私は町也の意見に従ふより外は無かつた。そして町也は全くよく稼ぎ場所を知つて居た。今度の経験でも分つたが、二人で稼ぐといふ事は非常な強味で、私等もモウ十分呼吸を心得たし、また氣候も悪くなつて居ないので、町也の導くまゝ、そこそこと打つて廻つて、寒垂旅館に寢に歸つて来た時は、懷中に五圓あまりといふ近來にない収入があつた。

翌日も私は無理やりに町也に連出されて、稼ぎ廻つたが、此日も四圓ほどの儲を見る事が出来た。丁度其處此處に秋祭禮などがあつて、稼ぐには大變都合がよかつたのである。

町也はほく／＼もので、

「かういふ工合なら、君の両親のお蔭が無くつても、僕等はすぐに金持になれるね。自分が儲けて金持になりやア、これほど大威張な事はないぢやアないか。」

寒垂旅館に滞在の三日間といふもの、私はいつも極つた間を宿の婆さんに發すると、婆さんはこれ

また極つた文句で——誰もまだ權藏を尋ねてまありません、また權藏なり坊様に宛た手紙もまゐつて居りません——と答へるのであつた。が四日目の朝は全く違つて居た。今日は坊様に渡すものがあると、婆さんは一通の手紙を私に取らした。

それは直の返事であつた。併し直は書く事も讀む事も出来ぬのだから、云ふ迄もなく代筆の手紙なのである。

その手紙によると、直は私の手紙を受取る前に、權藏の死んだ訃報を受取つた。またそれより少し前に權藏から直に宛た手紙をも受取つた。その手紙の中には、私の家族の手が、りがあるので、私に取つては必要な手紙だらうから、一緒に封じて送るとあつて、權藏の手紙が封じ込めてあつた。

「お、早くその手紙を讀んで見給へ。」と町也は眼を輝かせた。

私は胸を躍らせ、手を震はせて權藏の手紙を開いた。讀下す文面——

「己は今聖アントニオ慈善病院で死にかけて居る、もう二度と鱒野が見られさうもない。己は今手紙を書く氣力もない位だから、どうしてこんなに工合が悪くなつたか、其譯をお前に知らしてやる事も出来ない。併し知らしてやつた所で何の役にも立たぬから、肝腎な事を、生命のある中、急いでお前に云ひ残して置かう。それはかうだ——己がもし死んだら、お前は倫敦のリンコンス・イン、綠方地鎌田、鎌方合同法律事務所宛て手紙を出すのだ。此鎌田鎌方といふ人達は何でも民の親達の法律顧問で、民を探してゐるのも此人達なのだ。お前は其手紙の中に、民の所在を知らせる事

の出来るのは、お前の外にないと云つてやつて、何でもお前が出来ただけ禮金を取込む工夫をするのだ。其金さへ手に入れば、お前は老先を樂に暮して行けるだらう。それには今巴里のクリシー監獄に居る、花作り赤根岩吉といふものに手紙を出せば、民がどこに居るか、其中に分る筈になつて居る。併しくれんくも云つて置くが、手紙はきつと御堂の牧師様に書いて貰つて、決して外のものには頼むなよ。外の者に頼めば取返しつかぬ事になつて了ふかも知れぬ。併し己が死んだと聞かぬ以上は、決してお前が勝手に何もしてはいかぬぞ。左様なら女房、これが訣別だ。

權藏

「サア倫敦へ行かう！」と叫んだ。

私は今讀んだ手紙に喫驚して居たから、町也の意味がよく分らなかつた。

「倫敦の法律事務所へ君を探してゐるなら、君の親達は英吉利人に違ないぢやアないか。」

「だつて——。」

「君、英吉利人になるのは厭かえ？」

「僕は小菊や太吉と同じ國の方がいい。」

「僕はまた君が伊太利人ならいい。」

「だれでも若しか僕が英吉利人なら、淺雄さんのお母さんや、淺雄さんと同じ國なんだね。」

「もしか英吉利人ならだつて？ 君は英吉利人に定つてるさ。君の親達が佛蘭西人なら、佛蘭西に居る君を見つけるのに、何も倫敦の人を頼む筈はないぢやアないか。もう間違ひつこなしに英吉利人なんだから、英吉利に行くのが當然だよ。さうするのが一番君の兩親を見つける近道ぢやアないか。」

「でも倫敦の、その法律事務所へ手紙を出したらいいや。」

「君は今になつてぐづぐづするのかえ。君の兩親に早く逢ひたい事はないのかえ？ 手紙なんぞ出すよりか、口で話した方がよつぽど近道で、すぐ分らせる事が出来るぢやアないか。」

「さう云へばさうだが——。」

「君、倫敦へ行くのは譯はないよ。僕等は稼ぎが都合よく行つて、巴里へ来た時に七圓あつた上に、初の日の稼が五圓さ。次の日が四圓、昨日がまた五圓で、合せると二十一圓許りのところを、三圓ほどつかつたからまだ十八圓あるんだ。これだけあればきつと大威張で倫敦へ行けるよ。」

「だつて君は倫敦を知らないだらう。」

「さうさ、倫敦は知らないが、僕が二年ほど一座をして居た曲馬に、二人の英吉利人の道化があつてね、この道化がいつも僕に倫敦の談をして聞かせるんだ。それから僕に英語で話をする事を教へてくれたんだ。僕等は親方のお神さんに聞かれても分らないやうに、始終英語で談話をしてたから、僕大抵の英語なら話せるよ。だから倫敦へは僕が君を連れてつてやらう。」

「僕は英語は美登里老人に習つた。」

「だつて君はよほど前の事だから忘れてるだらう。僕はつい此間まで話してたんだから、君の通辯位はきつと出来るよ。そして僕が倫敦へ行きたいのは、君の通辯をしようと思ふ許りぢやアないんだ。實はその外にも理由があるんで——。」

「どんな理由が？」

「若し君の親達が君を見つげに巴里へ来たたら、きつと僕を英吉利へ連れて行かうと云はないに定つて居けども、若し僕が英吉利に行つて居れば、まさか僕を追返さうとはしなからうから。」

町也が私の兩親を疑つて、斯ういふ想像を下すのは、私には不快に思はれたが、併しそれも實際有得べき事なので、私はいよく町也の意見を容れる覺悟をした。

「それぢやアすぐ倫敦へ立たう。」

「ほんととかえ、君」

私等は二分とかゝらぬ中に、すつかり荷拵をして下へ降りて行つた。

婆さんは眼を丸くして驚きながら、

「坊様、これはまア何としたお立でございます。それでは御兩親様を、こゝでお待受にはならないの
でございますか。私共で手厚くお世話申して居りますところへ御兩親様がお見えになれば、嘸御満足
でございませうのに……。」

今は婆さんの雄辯に引止められる場合でなかつた。私は昨夜の仕拂をして出ようとする、

「それではお處書を書いてお出でなされまし。どなたが尋ねて見えぬとも限りませんから。それは尤もと思ふので、私は宿帳に、これから行かうと思ふ倫敦の鎌田鎌方法律事務所の處書を認めた。

「まア倫敦に！」と婆さんは叫んで「二人の子供衆が倫敦へ！あの海を渡つて！」

私等は武倫から船に乗る事にしたが、巴里を立つ前に、岩吉に暇乞をして行かうと、宿を出るなりクリシーへ来て牢屋を尋ねた。すると岩吉は、私が程なく家族を見出せる運びになつた事を喜んで、倫敦へ立つ事を祝つてくれた。私はまた追つて兩親と佛蘭西へ来て、岩吉に改めて禮を云ふつもりだと話すと、

「それでは程なく逢ふ。どうか都合よく行けば善いかな。そして若し思ふように早く佛蘭西へ來られなかつたら手紙をくれるがよい。」

「え、私はきつとすぐ來ます。」

此日私等は藻畦まで来て、百姓家の納屋を借りて宿つた。それはなるだけ入費を省いて、船賃に食込ぬやうにしたいと考へたからである。

巴里から武倫までの旅行の間、私は一生懸命町也から怪しい英語を教はりながら歩いた。私は嬉し
い中にもいろ／＼の氣が、りがあつた。私の兩親は佛蘭西語か伊太利語か、どちらか話すだらうか。
若し英語ほか話さなかつたら、どんなに氣術なからう。若し私の兄弟か姉妹でもあれば、どう挨拶し

たものだらう。言葉が通じなくつて談話が出来なければ、やつぱり私を他人のやうに思ひはしないだらうか。私は今度鱈野を出てからといふもの、いろ／＼の事を夢に描いて来たが、つひぞ言葉の事であんなに途方に暮れやうとは、考へも及ばなかつた。かうと知れば六ヶしいと後退して居た英語もかねがね習つて置くところであつたかと、今更悔んでも追つかない。

巴里から武倫へ来る迄に私等は八日かゝつた。それは今持つてる金を殖す事は出来ない迄も、せめてそれに手をつけずに濟む位の稼はして行きたいと、途中の目星い町や村では例の興行をやつて来たからである。

倫敦行の汽船は翌朝の四時に出帆するといふので、私等は三時過迄待合所で明し、出帆三十分前のまだ暗いに船に乗込んだ。そして甲板の上の澤山箱が積重ねてあつたその蔭に陣取り、濕つぽく冷たい北風を避けながら、出帆の準備の出来て行くのを見て居た。

一しきり滑車の滑る音、船底へ積入れる荷物の軋り合ふ音、水夫の誓り合ふ聲など騒々しく聞えて居たが、やがてさういふ音が汽笛の鋭い音に掻消されると、今度は鐘が鳴つて大綱が水へ落ちた。船は進み始めたのである——私の國を指して。

私は町也に向つて何度も、船の上に居るほど心持のいゝ事はなく、知らぬ間に水の上を滑つて行く愉快さは譬へやうもない位だと話して居た。そしてその都度私は南部の運河の上を「白鳥」で滑つて居た、その時の樂しさを思ひ出すのであつたが、併し愈々海へ乗出して見ると、海といふものが運河

などとは似ても似つかぬものであつた。

少し港を離れると、船は忽ち上下左右に揺れ出して、或時は海の底へ沈むかと思ふと、また空高く持上げられる、丁度頑頑戯にでも乗つてるやうな工合だ。今迄黙つて厭な顔をして居た町也は私に向つて、

「なるほど愉快なもんだね、船が水の上を滑るのは！」

私は答へずに黙つて居た。暗洲や潮流の關係から港口は殊に揺が強かつたのだが、併し今日はまた海も穏かで無かつた。

昨日海を見た時から町也は、厭な、汚い、陰氣な海だといつて、私が美しい海だといふのに反抗して居たので、今朝はこのしげにいよ／＼苦り切つて、黙つて屈んで居るのだ。その中に町也は突然に立上つたから驚いて、

「君、どうしたんだ。」といふと、

「僕、胸が悪くつて堪らなくなつて来たんだ。」

「君、海に酔つたね。」

町也は手欄のところへよろ／＼と駆けよつた。

やがて歸つて来た町也を抱へ、私の胸にその頭をあてがつて休息させたが、少しも町也の気分は癒らなかつた。そして時々手欄のところへ走つて行つては力なく歸つて来る。歸つて来る度に、半ば怒

り半ば笑つて、拳を英吉利の方へ向け、

「英吉利の海だからこんなに荒れるんだ。英吉利の性悪め！」

太陽は高く登つても、水蒸気は深く籠めて、空はどんよりと陰気に曇つて居た。その中に英吉利の岸の切立たやうな白い崖が見え出した。なほだん／＼進んで行くくと動かすにちつと停つて居る大きな船などが、そこ／＼に見えて来て、船の動揺も和ぎ、やがて運河のやうな静かなところへ、そろ／＼と入り始めた。

もうこゝは海では無かつたので、兩岸遙かに茂る樹木が朝霧の間に見え隠れして居る。船はテムムスの河口に入つて来たのだ。

「さア君、英吉利へ来たよ。」私は町也に聲をかけたが、町也はこの日出度い報告を喜ぶ風もなく、甲板の上に寝ころんだまゝ、

「いゝから、もつと僕を眠らしてくれ給へ。」

私はこの海峡横断の間ちつとも酔はなかつたから、睡気などは兆さなかつた。そこで町也を静かに寢せて置いて、私はカビを連れ荷物の上の一番高いところに上つて、腰をかけ、カビを股の間へ挟んで、船の進行につれて移りゆくバノラマのやうな美しい景色を眺めた。

やがて船の着くころには、町也も気分を回復して起出した。程なく私等は倫敦の真中に首尾よく上陸したのである。私等の風俗が違つて居るためか、みなが不思議さうに私等を見返つては通り過ぎる

のだ。併し言葉をかけるものは無かつた。

私は町也に向つて、

「さア君の英語を役に立てる時が来た。」

自分の英語の力について少しも疑つて居ない町也は、赤い鬚の生えた大きな男の傍へ行くと、帽子を取つて丁寧に緑方地へ行く道順を聞いた。

私には町也の説明が餘り長くかゝり過ぎるやうに思はれた。大男は何度も何度も、同じ言葉を町也に繰返させて、それを聞取らうとして居た。併し私は苟にも町也の英語の程度を疑ふやうな素振は見せなかつた。

「とう／＼それでも分つたと見えて、町也は私の傍へやつて来ると、

「なに、こゝから造作も無いんだ。このテムムス河についてどこまでも上つて行けばいゝんだ。」

ところが倫敦には巴里のセイヌ河の兩岸を見るやうな河岸通といふものが無い。いや寧ろその頃は無かつたといふ方がいゝかも知れぬ。兩側の家屋が皆河沿ひに建てられて居るから、河岸の通りやうがない。そこで私等は河に沿うて居るやうに見ゆる道路を見立てて、それを進んで行かねばならなかつた。

その道路と云つても、いづれも暗くつて、陰気で、泥だらけの馬車や、荷物や、大柵や、いろ／＼の荷包や何かで一杯になつて居て、その間を漕ぎ通る難儀は一通りでは無かつた。私はカビに綱を

つけて牽いて居た。また午後の一時だといふのに、どの店でも皆瓦斯をつけて居た。そして町には煤烟の雨が降つて居た。

私の倫敦を見た最初の感じは決して愉快なものでは無かつた。

千代呂木一家

私等は時々道を聞きながら進んで、もう大分来た頃、町也はまたリンコンス・インまではまだ遠いかと聞いた。町也が私に説明するところによると、何でも町の真中に大きな門があつて、町を塞いで居るところへ出るのだといふ。町の真中に門が立塞がつて居るといふやうな、そんな不思議な町があるだらうかと私は思ったが、併し町也が間違ひをして居るのだらうとは云兼て黙つて歩いた。

ところが町也はちつとも聞き間違ひをして居なかつたのだ。私等は實際大きな弓形の門が踏張つて居て、左右に二つの門が開いて居る町へ来た。それはテムブル門であつた。

そこでまた道を聞くと、右へ曲れと教へられたので、小さな町へ折り込んで行つたが、もうそこからは今迄のやうな混雑した大きな道路に引きかへ、同じやうな小さな淋しい不規則な小路ばかりが、入亂れて居るので丁度迷宮を歩いてるやうに、いつまで行つてもまた同じ處へ歸つて来るやうな氣がした。

私等は慥かに道を間違つたのだらうと思ふ時、忽ち小さな墓所の前に来て居るのに氣がついた。そ

こには澤山の墓があつて、その墓石はみな煤か靴墨で塗つたやうに汚く黒くなつて居た。それが縁方地であつた。

町也が通り合した人に尋ねてる間に私は立止つて早鐘のやうに打始めた動悸を静めようとした。私

はもう息が詰つて、身體はぶる／＼震へて居たのだ。町也の後からついて行くと、私等は戸口に嵌こんだ真鍮の板に鎌田鎌方法律事務所と記された建物

の前へ来た。町也は鈴を鳴らさうとするので、私は慌てて止めた。町也は驚き顔に、

「なぜ止めるんだ、君、……おや、君眞着になつたぢやアないか。どうかしたの？」

「なに、どうもしないが、ちよつと氣を落ちつけさせてくれ給へ。……さアよし。」

町也は鈴を引鳴らした。門番が来て開けてくれたので私等は中に入った。

私は只胸がわく／＼して居たから、自分の周囲の光景をよく見て置く餘裕などは無かつた。何でも瓦斯がいくつも點つて居て、その瓦斯の下で、二三人の書記のやうな人が書きものをして居たやうだつた。

町也が談話を始めたのは書記の中の一人であつた。云ふ迄もなく町也は私に頼まれて談話を引受けたのである。町也が何と云つてるのか私には分らなかつたが、子供とか家族とか権藏とか、私にもよく分る單語を何度も繰返して居るので、私は町也が私の事を、私の家族が権藏に頼んで見つけさせて

居る子供だと説明して居るのだらうと思つた。

権藏といふ詞が何でもすべてを説明したらしく、書記等は皆筆を休めて私等を見た。町也の話しかけて居た書記は立上つて、私等に合圖をしたから、その後について行くと、奥の方の室の扉を開けて私等の中へ入らした。

書類やら書附やらの一杯にある室で、一人の紳士が事務用の机に向つて腰をかけて居る傍に、髪を着て、黒い法衣のやうなものを被り、手に澤山青い書類を持つて居た一人の紳士が立つて居て何か話をして居た。

言葉少なに書記が私等の訪ねて来た理由を説明すると、二人の紳士は私等二人の頭から足の先迄を見つめた。

「お前達の中どれが権藏に育てられて居た兒か。」と腰をかけて居た紳士が佛蘭西語で尋ねた。

佛蘭西語で云はれたので、私はほつと安心しながら一歩前に進み、

「ハイ、それは私です。」

「権藏はどうした？」

「死にました。」

二人の紳士は互に顔を見合した。髪を被た方は何か云残した上、書類を抱へて出て行つた。

「それではお前達は どうしてこゝへ来たのか。」と机の前に残つた紳士は一向膠もない調子で尋ね始めた。

「巴里から武倫までは歩いて来て、武倫から倫敦までは汽船に乗つて来たんです。それも今着いた許りなんです。」

「権藏に旅費を貰つて来たのか。」

「いゝえ、権藏にはとうとう逢ひませんでした。」

「併しそれならどうしてこゝへ尋ねる事を知つて居たのか。」

私はなるたけ手短に私の旅行の顛末を話した。私は自分の物語をするよりは、早く私の家族の事を聞きたくて堪まらなかつたのだ。がそれで済んだ事かと思ふと、その紳士はまた私に向つて、私の生立ちから今日迄どうして暮して来たかそれを話して見るといふのだ。仕方がないからまた手短に、私が巴里の癡病院前で権藏に拾はれた事、九つ迄育てられて美登里老人に賣られた事、美登里老人が死んでから花造りの赤根岩吉に養はれた事、岩吉が牢へ入れられてから、また舊の大道生活を始めた事を語り出した。

紳士は手帳に書留めながら、私の話を聞いて居たが、じろくくと私を見る容子は何だか私に厭な感じを起させた。その言葉遣ひ同様、紳士の顔つきも少しも愛相がなく、時々漏す微笑には譎詐の影が閃いて居た。

「そしてその連の子は何ものか。」と紳士は町也を筆で指さしたが、それは丁度町也に矢を擬したや

うであつた。

「私の友達で、仲間で、兄弟なんで。」

「フーム、大道で知合になつたといふ譯だな。」

「眞實の兄弟よりも仲善なんです。」

「ウムさうか。」と紳士は冷淡に聞流した。

今こそ私の疑問を發する時が來たと思ふので、

「あの伺ひたいんですが、私の家族は英吉利に住んでるんですか。」

「ウム、倫敦に住んで居るのだ、少くも今は。」

「それでは私はすぐ逢へるんですか。」

「あ、逢へるとも、早速家族のものゝところへ案内させてやらう。」

さう云つて紳士は呼鈴を鳴らした。

「一寸待つて下さい。モ少し伺ひたい事があるんで……私はお父さんがあるんですか。」

「いやお父さんばかりではない、お母さんもある、兄弟もある、姉妹もある。」

「お、！」と私は眼を丸くして叫んだ。そして町也を見たが、町也の眼は涙で一杯になつて居た。

丁度その時屏が開て書記が現れると、紳士は何か命する風であつたが、それは私等を私の家族まで送り返すためであつた。

その男に伴はれてこの室を出ようとすると紳士は私を呼びとめて、

「いや、一寸云忘れて居たが、お前の家族の姓は千代呂木といふのだ。千代呂木重作これがお前の父の名だ。」

私は紳士の無愛相にも頓着せず、その手を取つて接吻しようとしたが、紳士は振拂つてその手で扉を指さした。

私等を案内して行かうといふ書記は、顔の蒼白い、皺だらけになつた、小さな男で、垢摺のした怪しげなフロックコートを着こなし、時代後れの絹帽を被り、白い襟飾をして居た。私等が戶外へ出ると、この男は雙方の指の關節をこきくと鳴らして、腕を振廻した。それから自分の穿いてる踵の減つた靴を、出来るだけ向ふへ放り投げるといふやうな恰好をして、兩脚代るゝ振動かし、それが濟むと今度は鼻を青空に向けて、強く深くそこから中に充ち渡つて居る霧を吸込み始めた。

「君、二階がきな臭いんだよ。」と町也は伊太利語で云つた。

書記は睨むやうに私等を見たが、黙つてたゞ「ブシツ！ ブシツ！」と丁度犬を呼ぶやうに齒の間で音を立てた。それは私等に後からついて來いといふ合圖だと知つて、はぐれぬやう黙つて踵について行つた。

私等はすぐ馬車の往來の激しい大通へ出た。書記は巴里などで見るのとは丸で違つて、屋根の上に馭者が乗つてゐるやうに見える馬車を呼んで、其中へ私等を入らせた。忽ち屋根の上と中とで問答が始

まった。私は何度もベスナル・グリーンといふ名を繰返すのを聞いて、何でもこれが私の家族の住つて居るところに相違ないと思つた。私は英語のグリーンといふ文字は縁を意味する事を知つて居たら、きつと私等が今行かうとするところも美しい木の植わつた場所、餘程住心地の善いところなのだらう、そしてそれは倫敦のこんな陰氣な暗い眞黒の煤けた建物ばかりある、厭な町とは似ても似つかぬ別天地なのだらうと想像した。

上と下の談判は長い事續いた。何だか馭者はそのベスナル・グリーンがどうしても分らないで居るらしい。私はカビを股の間へ入れ、町也と一緒に窮屈に腰をかけたが、その談判を聞いて居たが、私は心の中でベスナル・グリーンのやうな美しくいところを倫敦の馭者が知らないのは妙な事だと思つて居た。そして今迄見たところ、どこを通つても煤からでつち上げられたやうな倫敦に、青葉の茂つた界限がさう澤山あるだらうかと驚いた。

さうする中にどうやら分つたと見えて馭者は馬に一鞭あてた。馬車はかなりの速度で、大きないくつかの町を走り、また小さな幾つかの町を過ぎ、また大きな町のついでいてるところを走つた。霧が深く籠めてそこら中が朦朧して居るから、私等はよく町の有様を見る事は出来なかつた。殊に寒氣が霧と共に加はつて来て、何だか私等は息が詰るやうで苦しくなつて來るのだ。

併しこゝで私等と云つたのは私と町也だけの事で、私等の案内人は一向そんな容子も見えず、口を開いたまゝ、鼻息を流し、一生懸命息を吸込んで肺の中に出來るだけ空気の貯蔵をするらしい、また時々手の節を鳴らしたり、脚の節を伸ばしたりして居た。何でもこの男は何年か坐つたまゝ、身動きもせず呼吸もせずに閉ぢ籠つて居たのらしい。

馬車はいつでも走つて居るので、もう事務所を出てから餘程になるのに、まだ行着かぬところを見る時、私の兩親は多分田舎に住んで居るのだらう。程なく馬車はこんな汚ない狭い町を離れて、田舎の晴れやかなところへ出るのだらうと、私は考へて居た。

けれども馬車は田舎へ行く代りに、一層狭苦しい小路の中へ入り込んだ。私は何だか氣が、りになり出して、まだ私の兩親の家へ行着かぬのかどうか、案内者に尋ねる事を町也に頼んだ。町也の返事はちつとも私の心を引立てる性質のものでは無かつた。町也はこの鎌田鎌方合同法律事務所の書記は、かういふ盗人の棲む界限へは來た事がないから知らぬと答へたといふのだ。疑ひもなく町也は間違ひをしたのだらう。でなければ書記の答へた事がよく分らないのだ。

併し町也は間違ひではないと云張つた。書記は盗人といふ詞を使つたので、それは佛蘭西語の盗人と同じ意味だと云つた。私はいよく驚いたが、併しすぐに、書記は田舎へ行くので、道は淋しくなるから盗人を怖がるのだらうと察した。この考へを町也にいふと、町也も同意して書記の臆病を笑つた、都會から出たことのないものは、何といふ物識らずだらう！

けれども馬車は決して田舎へ出ない。私は英吉利といふ國は、どこまで行つても石塊と泥ばかりの倫敦といふ都會から出來て居るのかと思つた。その泥はすっかり馬車の上まで翹上つて、殊に馬車が

眞黒な泥々の水溜りを通ると私等の顔まで上つて来るのだ。そしてもう可なり長い間何とも云へぬ悪臭が町に充ちて居るのを私等は感じて居た。それは明かに私等が今倫敦の最も下等な場所に煮かゝつて居る事を示すものであつた。多分これがベスナル・グリーンに行く最後の場所なのだらう。こゝさへ脱ければ廣やかな田舎へ出られるのだらう。

暫らく前から馭者は時々馬の歩みを弛めては、もうどう行つていゝか知らぬといふやうな煮切らぬ態度を取つて居たが、とうとう馬を止めて了つて、何か私等の案内人と談判を始めた。いや寧ろ口論を始めたやうに私には思はれた。町也にどうしたのかと聞いて見ると、馭者は迎も道が分らないからもう先へ行くのは御免を被る、併し道を教へてくれたら行くといふと、案内の書記は、こんな盗人の巢窟へは来た事がないから、道は知らぬ、併し誰かに尋ねて約束のところまで行けと云つて居るのだと説明した。なるほど私は盗人といふ言葉を聞いた。

たしかにこゝへはベスナル・グリーンでは無い。

馭者と書記の談判はいよいよ喧嘩腰になつて、高く叫び合つたが、書記は怒つて錢を拂ひながら馬車を下つて了ひ、また例の「ブッシー！ ブッシー！」をやつたから、私等にも降ろといふのだと合點して馬車を下りた。

私等は霧に閉ざされた泥だらけの町の中にならんと突立つたが、忽ち一軒の明々と照輝いた陽氣な店に氣がついた。點し連ねた瓦斯の光が、鏡に反射し、室中の鍍金に反射し、積重ねた酒樽に反射して、霧を通し、往來の泥水へちらちらと火影を漂よはして居た。それは英吉利人が杜松子酒官殿と呼ぶ酒舗で、杜松子酒を始め、いろいろの強い酒を吞ますところだ。「ブッシー！ ブッシー！」と私等の案内者がまたやつた。

そこで私と町也はこの男についてその御殿の中へ入つた。私等が悪い下等の場末へ来たと思つたのは飛んだ早合點だつたのだらう。私は今迄こんな贅澤なきらびやかな店へ入つた事がない。店中鏡だらけ、鍍金だらけで、酒賣場などは銀か何かで出来て居る。私は實に大したものだと思つた。けれどもその立派な酒賣場の周圍に集つて立吞をして居るもの、或はまた壁に凭れて吞んで居るもの、或はまた酒樽に腰を卸して吞んで居るものなどの容子を見ると、皆汚い服装をして、中には靴のない泥足で居るものさへあつた。みんな下等な人間ばかりで、紳士らしいのは一人も見えなかつた。

書記は酒賣場へ行つて、何か白い酒を注がせ、丁度少し前に霧を吸つて居たその同じ恰好をして一息に吞干して了つた。さて酒を飲んで了ふと勘定を済ました上、傍に居た男と何か話を仕始めた。

それは道を聞いて居るのだと、町也の通譯がなくとも分つた。

酒舗を出ると私等は一生懸命大股に歩いて、案内に後れぬやうにその踵について行つた。

今は兩側がますます狭くなつて、霧が深いにも拘はらず、よく兩側の家を見る事が出来た。そしてこの兩方の家からは綱を往來の上に張渡して、その綱に洗濯ものやら襪を吊渡してあつた。

私等は全體どこへ行くのだらう。私はよほど心配になり出した。町也は私の心を讀まうとするやう

に時々私を見たが何とも云はなかつた。

かういふ狭い町を出たり入ったりして行く中に、兩側の人家はいよ／＼見すばらしいものになつて来た。いくら佛蘭西の汚い町でもこんなに酷いところはない。家と云つても物置小舎か何かのやうで女や子供の氣配がしなかつたなら、人の住む家とは思へない位だ。その女等は皆蒼い顔をして居て、子供等は殆んど裸で、背中に襤褸を當てて居た。或町では往來の眞中に豚が泥をこねて居て、悪臭は鼻を突いて居た。

忽ち私等の案内者は立留つた。何でも道に迷つたのだらうと思ふと、そこへ巡査が来て、二人は話を始めた。すると巡査が先へ立つて案内するので、私等は黙つてその後からついて行つた。

何でも曲りくねつた町やら辻やらを通つて、眞中に小さな池のやうな溜水のある廣場へ來ると、巡査は立留つて、

「赤獅子庭」と叫んだ。

なぜ巡査はこゝで留つたのだらう。ベスナル・グリーンがこゝの管は素より無い。それとも私の両親がこんなところに住んでるだらうか。

私が呆氣に取られて居る間に巡査はこの廣庭に面した、一軒の板圍の納家のやうな家の戸を叩いた。私等の案内者は禮を云つて巡査を返した。さては私等は到着したのだらうか。

私等の手を放さずに居た町也は強く私を締めたので、私も強く町也の手を締めた。私等はよくお互に了解する事が出来た。私の胸に迫つた苦惱は町也の胸にも迫るのであつた。

私は全く心が混亂して了つたから、どうして戸が開いたのか何か少しも覺えて居ないが、何でも私等が中へ入つた時には、大きながらんとした室が、たゞ一個の石油燈と燧燵の中に燃ゆる石炭の火に照らされて、そこに居た人影を臚げに私の眼に寫し出した。

その火の前に藁を編んで作つた安樂椅子に凭れ、少しも動かずに居る、頭に黒い頭巾を被つて、眞白な鬚を伸ばした年寄が居た。少し離れた食卓の前に、この年寄と向合つた位置に男と女が竝んで腰をかけて居た。男は四十二三の年輩、鼠の天鷲絨の衣服を着て居て、はき／＼とした、けれども氣六ヶしさうな顔をして居た。女は五つ六の年下らしく、淡褐の髪を胸で合した黒と白の市松格子の肩掛の上に垂して居た。どんよりと曇つた眼光をして、一向物に注意を惹かぬといふやうな、懶げな容子が、昔は美しくかつたらうと思ふ顔中に充ちて居た。この室の中にはその外にまた四人の子供が居た。二人は男、二人は女で、皆母親と同じ髪の色をして居り、男の兒は十三と十二位、女の兒は一番小さいのが三つ位で室の中を覺束なく歩いて居た。

私は私等の案内者が何か説明して居る間に、一目でこれだけを見て了つたのだ。

鎌田鎌方法律事務所の書記は何を云つたのだらう。私は聞きもしないし、聞いても分らなかつたのだが、その説明が濟むと、皆の視線が云合はしたやうに町也と私の上に注がれた。ちつと作りつけの置きもの、やうに動かずに居た年寄さへもこちらを見た。只赤兒だけがカビに注意を取られて居た。

「お前等の中どつちが民だえ？」と天鷲絨を着てる男が佛蘭西語で尋ねた。

「私です。」と私がいふと、

「お、お前が民か、それではこゝへ来てお前のお父さんを接吻しろ。」

私はお父さんに初めて逢ふ時は、自然に何もかも忘れて飛んで行つて抱きつくやうになるだらうと想像して居た。ところが實際は決してそんな氣持になれなかつた。なれなかつたが、私は矢張り進んで行つてお父さんを接吻した。

お父さんは私を放して、

「さア今度はそこに居るのが お前のお祖父さんだ。これが お母さんで、子供等はみんなお前の同胞だ。」

私はまづお母さんの傍へ走つて兩腕にお母さんを抱きかゝへた。お母さんは黙つて私に接吻したが、私に接吻しては呉れなかつた。只私に二言三言云つたが私には少しも分らなかつた。

「お祖父さんと握手して来るがいゝ。」とお父さんは云つて「併し靜に行けよ。お祖父さんは中風なのだから。」

云はれるまゝ、私はお祖父さんに握手をして、今度は二人の 弟に手をやり、それから 妹とも握手した。そして一番小さな妹を抱取らうとすると、一心にカビに構つて居るので、私をはねつけた。

かうして一人々に握手しながら、私は私自身に對して情なく思つた。なぜ？ 長い間憧れて居た私の家族が見つかつたといふのに、私はちつとも嬉しさを感ぜなかつたからである。私はお父さんが出来、お母さんが出来、同胞が出来、お祖父さんまで出来たのだ。それに私の心は氷のやうに冷たいのだ。私はどんな熱を以て、またどんなに短氣に、家族と邂逅ふ此瞬間を待つて居たらう。私は自分が家族を持つといふ事——私を愛して呉れる兩親を持つのだといふ事を考へると、嬉しさにもう狂氣のやうになつて居たのだ。それに今私は何とも云へぬ失望に打たれ、唯私の家族等の顔を眺めては、親切な言葉など云現さうといふ心は少しも起らず、また何うしていゝか分らず茫然と突立つて居るのだ。私は全體鬼か悪魔の心を持つて生れたのだらうか。家族など持つ價值のない人間に生れついたのだらうか。

それとも若し私の家族が、こんな粗末な物置のやうな家に住んで居らずに、立派な御殿の中で見出されたなら、今とは全く違つた。そして豫想して居たやうな感じを持つ事が出来たのではあるまいか。

この考へは私に一種云ふ事の出来ぬ廉恥を感じさせた。この刹那の感じは私を驅つて再び母親の前に走らせた。そして兩腕に母親を抱せ、その唇に接吻させた。素よりお母さんは私が斯うして接吻しに行つた動機を知らう筈もない。私に接吻を返してくれる代りに、その懶げな眼光で私を眺め、それから靜かに肩を聳やかしながら、お父さんを見て、何か私のちつとも分らぬ事を二言三言いふと、

お父さんは他事のやうに笑つた。お父さんもお母さんも、全く私を他人扱ひにして居るやうなこの笑ひ聲は、私の心を破るに十分であつた。折角私の心盡しはこの通りにして私の兩親に受取られたのである。

私は悄氣返つて考へ込んだが、併しお父さんはその間も與へず、町也を指さして、
「これ民、その兒は何だえ？」

私は町也との深い關係を、熱心に説立る勇氣は無かつた。唯簡單に譯を話すと、

「あゝ、さうかえ、それぢやア倫敦の見物にでも來たといふ譯か。」

私が答へやうとするのを町也は横取して、

「えゝ、全くさうなんです。」と自ら答へた。

「そして權藏は？ なぜ權藏と一緒に來なかつたのだ。」

私は巴里へ來て見ると權藏の死んで居た事、それから直の手紙に緒を見つけて、町也と二人倫敦へ來たことを話すと、お父さんはこれをお母さんに翻譯して聞せる容子であつた。お母さんは何度も——それは都合がいゝ、それは都合がいゝ——と云つた。それは私にも分つた。併しなぜ權藏の死んだのが都合がいゝのだから、私には分らなかつた。

「お前、英語は話せないか。」とお父さんは聞いた。

「話せません。伊太利語なら少しは話せます。それは權藏から私を買つた師匠に教はつたんで——。」

「ウム、美登里とかいふ藝人か。」

「お父さん、知つてゐるんですか。」

「ウム、この間己がお前を探しに佛蘭西へ行つた時、權藏に逢つて聞いたのだ。ところでお前は己がこの十四年間といふもの、お前を探さずに放つて置いて、今度急に探し始めたのを、嘸不思議に思ふだらうな。」

「えゝ、どうも不思議でならないんです。」

「ぢやア火の傍へ來い。詳しい事を話してやらう。」

入る時に私は立琴は壁に立てかけて置いたが、背囊はまだ背負つて居たから、それを外してお父さんに指された場所へ行つた。

併し私が濡れた泥まみれの足を火の方へ伸さうとすると、丁度腹を立てた古猫のやうに、お祖父さんが物も云はず、私に唾を吐きかけた。お祖父さんが怒つた譯を知るには説明も何も入らなかつたら、私は急いで足を引込めた。

その時お父さんは私に向つて、

「いや、構ふ事はない。年寄は自分の火の前に人を寄せつけまいとするのだ、併しお前は寒いだらうから遠慮なく足を出してあたるがいゝ。何もこんな年寄なんぞに遠慮する事はない。」

私はこの老さらばへた白髪のお父さんがこんな話すのを聞いて驚いた。私はよし外の人

には遠慮せずとも、こんな年寄には遠慮するのが當然だらうと思つて、濡れた足は椅子の下に引込めて居た。

お父さんの物語によるとかうである——

私はお父さんの總領息子で、お母さんと結婚してから一年後に生れたのだ。そのころお父さんは可成りの身代だつた。お父さんが結婚した時、豫て外にお父さんを戀慕つて居て、お父さんも憎くはないと思つて居た女があつて、お父さんが自分に結婚を申込むものとはばかり思つて居たのに、私のお母さんと結婚したから、その女は恐ろしい嫉妬を起し、人知れず復讐を計畫して居た。

お父さんとお母さんはちつともそんな事には気がつかないで居ると、私が生れて六箇月になつた時、その女が或機會に私を盗み、佛蘭西へ連れて行つて、癡病院前へ捨てて了つた。お父さんやお母さんは大騒ぎをして私を探したけれども、まさかパリ界に捨てられて居ようとは思ひもよらぬから、佛蘭西迄は手が届かなかつた。どうしても行方が分らぬので、もう死んだものと思つて、泣く泣く諦めて居た。

ところが今から三箇月程前、この女が重い病氣にかゝつて死んで了つたが、その死ぬ前始終の事を残らず懺悔したのだ。そこでお父さんは早速佛蘭西へ出かけ、私を捨てた場所の所轄警察署へ行つて調べると、私が鯖野の石工權藏といふものに拾ひ上げられ養育されて居る事が知れた。

そこでお父さんは鯖野迄出かけて行つて權藏に逢つて見ると、私が美登里老人に賣られて、佛蘭西

中を渡り歩いて居る事が知れた。併しお父さんはその美登里老人の後を追つて、佛蘭西中を尋ね廻る事は出来ぬから、權藏に旅費をやつて、私を探させる事にし、若し知れたらお父さんの懇意先の鎌田鎌方法律事務所まで知らせる事にした。自分の番地を云はなかつたのは、この一家が倫敦に居るのは冬分だけで、その外の季節になると、お父さんは一家残らず引連れて英吉利中を行商に出て留守にするからであつた。

お父さんはその通りを話した上、

「さア、これが今度お前を見つけた出した筋道だ。合點が行つたか。まる十四年といふものはお前は留守にして居て、今度歸つて来た譯だ。まだ馴染が出来ぬから怖けて居るらしいが、いやそれも無理でない。それにお前には皆の言葉が分らんし、皆もまたお前の言葉が分らんから、自然工合が悪いが、なに、それも暫時の間で、今にすぐ馴れて心易くなるだらう。」

それは勿論馴れるに相違ない。両親や同胞と一緒に住まふやうになつて、馴れる事が出来なければ、それはよつほど何うかしてるのだ。

産衣の絹布はとうとう物を云はなかつた。直や小菊や岩吉に向つては、この上もない不幸だ。私は逆も今まで夢に見て居たことを、この人達にしてやる事は出来ない。多寡が田舎廻りの行商人——別して物置の中に住んでるやうな身分で有餘の金のありさうなことはない。併しそれも構はぬ。私の求めるのはその富よりも、優しい家庭の愛情である、その愛情さへあれば、私は大きい満足を感じる

のだ。

お父さんの物語の間、お母さんや妹などが食卓の上に晩餐の支度を仕始めた。金の大きな皿へ、牛肉の大きな切身を蒸煮にしたのを盛り、その周囲へ馬鈴薯を並べたのが食卓の真中へ持出された。

「お前達は腹が減つたか。」とお父さんは私と町也に尋ねた。

町也は笑つて白い歯を見せた。

「さア、それなら食卓に着くがよい。」

かう云ひながらお父さんは、まづお祖父さんの安樂椅子を押し来て、お祖父さんを食卓に向はせ、自分も火を背中にして椅子に着き、それから主人役に金の皿を取寄せて、その大きな煮牛肉を切つて上等の切身を、馬鈴薯と一緒に私等に取つてくれた。

町也の疑

私は弟妹等の容子を見ながら食事を取り始めた。私は文明の作法などといふものは素より知らず、また躰といふものも少しも無くて育つて来たのだが、それでも私はこの食事の光景に驚いた。弟や妹等は肉又や剪刀を措いて、手掴で肉や馬鈴薯を食べ、また指を汁につけてはそれを嘗たりした。そしてお父さんもお母さんも一向気がつかないやうな顔をして居た。またお祖父さんはお祖父さんで、

一人が食べる事ばかりにかゝつて居て、ひつきりなしに口を動かしては、その使へる方の手を皿に運んで居た。そしてお祖父さんが肉を口へ入れようとして、自由が利ぬため、手元から落したり何かすると、弟等はそれを嘲弄して居た。

晩餐が済めば一家打寄つて楽しく世間話でも仕合ふのだらうと思つて居ると、お父さんがもうお前達は寝るのだと云つて、蠟燭をつけて町也と私を寢室へ案内した。それは馬車を入れて置く車庫の中で、その中には普通行商人の使用する、二臺の大きな馬車が入れてあつた。お父さんは一臺の馬車の戸を開けると、そこには上下二段になつて寢床が設けられてあつた。

「さア、こゝでゆつくり寝るがよい。」と云捨ててお父さんは出て行つた。

お父さんは出て行く時蠟燭を置いて行つてくれた。けれども馬車の戸はちやんと外から錠を卸して閉て了つた。私等は寝るより外無かつた。また實際私等はいつものやうに寢物語もせず、今日の印象も語り合はず、只一語、

「お休み、町也。」

「お休み、民。」

これだけを云合つて無言で各自の寢床へ潜り込んだのだ。

私がちつとも町也に話をしようといふ氣がない通りに、町也も私に話をする氣が無かつたのだ。そして私は町也が黙つて居てくれるのを難有いと思つた。

話をしたくないと云ふのは、何も寝たいといふのではない。蠟燭は消したが、私の眼はどうしても塞がらない。今日の光景を思ひ出しながら、悲しく、情なく、狭い寢床のなかで寝返り許り打つて居た。

私の上に寝た町也も、一向寝つけぬらしく、私の通り寝返り許りして居るのだ。私は小聲で、

「まだ寝ないの？」

「何だか眠れない。」

「工合でも悪いの？」

「い、え難有う、気分はもうすつかりいゝんだ。たゞ僕の周囲のものがみんな廻るやうでね、まだ船に乗つてるやうな気がするんだよ。丁度この馬車が持上つたり沈んだりするやうで。」

町也が寝つかれないのは全くそのためだらうか。私の考へてると同じ考へが、町也の睡を妨げて居るのでは無からうか。町也は私を深く愛して居るので、今は二人の心が自然に通ふばかりに結びつけられて居るのだ。

眠れぬ中に時は刻々と進んだ。そして何か取止のない恐怖の念が時の進むにつれて昂まり始めた。私は始め悲しみ、不安、當惑などの凡ての感情より、なほ強く私を支配し始めたこの感覺を何とも知る事が出来なかつたが、だんくんにそれは恐怖の念だと知れた。何に對する恐怖？ それは私にもちつとも分らない。たゞ確かに恐怖の念なのだ。そしてそれは初めの想像とは全く違つたベスナル、グ

リーンのこの悪い界限の真中の、がらんとした車庫の中で寝て居るためでは決して無い。私はこれ迄の大道生活に寂しい田舎の空家や物置で寝た事も少くなかつた。それから思へばすべての危険から保護された車庫の中はどれほど安全か知れない。けれども何だか私には恐ろしいのだ。そんな道理は無いと思つて、氣張れば氣張るほど、心細くなつて來るのだ。

どれほど時間が立つたのか、こゝへは大時計の音も何も聞えて來ぬから、さつぱり分らないが、何でも眞夜中過にはなるだらう。突然私は車庫の戸を叩く音を聞いた。それも表の廣場に面した方の戸ではなく、裏口の方の戸口なのだ、そして規則正しい間隔を取つて、何か合圖でもして居るやうに靜かに叩いて居るのだ。

忽ち光明がどこからか閉めきつた私等の車の中へ射込んだので、私は驚きながら周囲を見廻した。同時に私の寢床によりかゝつて寝て居たカビは眼を覺して吠え立ようとした。この光明は馬車の壁に切つてある窓からさしたので、そこには窓かけがあつたので、私は氣がつかずに居たのだ。そしてこの窓は半分は町也の床の方にかゝり、半分は私の方にかゝつて居た。

私はカビが家中を驚かすのは好まなかつたから口に手をやつて靜まらせ、その窓からそつと外を窺いた。

手提燈をさげて車庫の中へ出て來たのは私のお父さんで、靜かに今叩いた戸を開て靜かにまたその戸を閉た。開けた時に重さうな荷物を肩に負つた二人の男が入り込んだ。

お父さんはすぐ二人の男に、自分の唇へ指をあてがつて見せ、それから私等の寝て居る馬車を指し示した。それは寝て居る私等を起してはいけないといふ注意のためだと知った。

その注意は私の心を動かした。私はまだ起てるのだから、そんなに遠慮して貰ふには及ばないとお父さんに云はうとしたが、それでは今よく寝入つたらしい町也を起すからと思つて黙つて居た。

お父さんは二人の男に手傳つて荷物を卸させた。そして母屋の方へ引返して行つたが、今度はお母さんを連れて来た。お父さんがお母屋へ引返した間に二人の男はその荷物を解いたが、一つには反物類、一つには帽子、肩掛、編もの、下襦、靴足袋、手袋といふやうなものが一杯であつた。

初めに私は驚ろいたが、すぐこれは商人が私の親達に行商の原料を賣りに来たのだなと悟つた。お父さんは品物を一々燈を照して見てはそれをお母さんに渡すと、お母さんは鉄で品物についてる商標を切取つては、それを隠しに入れて居た。

どうも其が私には分らなかつた。それにかういふ真夜中に商品を賣りに来るのも怪しいと思つた。お父さんは商品を吟味して居る間、何か小聲で二人の男と頻に話し合つて居た。若し英語を聞ける力があつたら分つたのかも知れなかつたが、英語の分らぬ私には、何を云つてるのかちつとも聞取れなかつた。たゞ、巡査といふ詞を繰返したのが私の耳に留つた。

さてその商品調べが済むと、親達と二人の男は母屋へ入つて行つたから、車庫の中はまた舊の闇に返つた。云ふ迄もなく四人は鐵動定をするため入つて行つたのだらう。

私は心の中で今見た光景は何の不思議もない事だ、兩親は只商品の受渡しをした丈だと道理をつけようとしたけれども、どうしてもわれとわが得心をする事が出来なかつた。なぜこの二人は真夜中に裏門から入つて来たのだらう。なぜこの人達は小聲で巡査の事を話して居るのだらう。なぜお母さんは買取つた品物の商標を一々切取つて居たのだらう。

私はどうしてもこの疑問に答へる事が出来なかつた。そしてそれを考へまいとすればするほど考へずには居られなかつた。暫時すると私はまた光明が馬車の中に射込むのを認めた。私はまたそつと顔を上げて、窓掛の裂目から光明の射して来る方を窺いた。初めに私が窺いたのは全く自然で當然の事だと思ふのだけれども、今度目窺いて見る事はひどく氣が咎めた。窺いてもいけぬ、知つてもいけぬと、私の心の聲が咎めるのだが、併し私は窺いて見ぬ譯にはいかなかつた。

二人の男は歸つたと見えて、もう居なかつた。お父さんとお母さんだけで、お母さんは品物を包み直して居る間に、お父さんは箒で車庫の隅の方の土の上を掃いて居た。そして箒の柄で、そこを刳ると忽ち大きな揚蓋が現はれた。お父さんがその揚蓋を取上げたところへ、お母さんが二つの大包を引摺つて来た。揚蓋のあつた下は大きな穴になつて居て、その深さは分らぬが、お母さんが燈で照すと、お父さんは二つの包へ綱をつけて、その穴の中へ降し、再び揚蓋をすると、また箒でその上へ砂を掃寄せ、少しも分らぬやうにした許りか、その邊に散つて居た藁屑を持つて来て振撒いた。さうして置いてお父さんとお母さんは母屋へ歸つて行つた。

私は母屋の戸が締つた時、町也の床が動くやうに思った。

町也は今まであつた事を見て居たのだらうか？

けれども私は町也に聲をかけて見る勇氣は無かつた。私の恐怖の正體はもう明かになつた。私は頭から足の先迄、すっかり冷汗に濡れて了つたのだ。

私は終夜かうして悶えて居たので、その中どこかで鶏が鳴いたので、もう夜が明けると知つた。その鶏を聞いてから私は却つて眠つた。併し悪夢にばかり襲はれ通してあつた。

錠前の音で私は眼を覺した。誰か馬車の戸を開に來てくれたのである。私はそれがお父さんだらうと思ふので、寢たふりをして顔を隠してると、町也が聲をかけて、

「開てくれたのは君の弟だよ。もう行つちやつた。」

私等は起出した。町也は私によく寢たかとも何とも聞かなかつた。私も町也には何とも聞かなかつた。たゞ一度私は町也に顔を見られたから、私はすぐ眼を外して了つた。

私等は母屋の食堂へ入つて行つたが、お父さんもお母さんもそこには居なかつた。お祖父さんは、例の安樂椅子に凭れて、夕べからそこを動かずに居たやうに、火の前に陣取つて居た。おり糸といふ年上の妹は食卓へ拭巾をかけて居て、金造といふ上の弟は室を掃いて居た。

私は二人の傍へ握手をしに行つたが、二人は見向きもせず、その仕事をつづけて居た。それではお祖父さんに挨拶しよう、火の傍へ行くと、お祖父さんはまた私に唾を吐きかけたから、私は立縮んで了つた。

そこで泣きたくなるのを堪へて、町也に向ひ、

「お父さんとお母さんはどうしたのか、君、お祖父さんに聞いてくれ給へ。」

町也はお祖父さんに怖々話しかけた。ところがお祖父さんは町也が英語で話しかけたのを見ると、忽ち顔色を和げて、快よく返事を仕出した。そして今聞いた事の返事としては大分量が多かつた。

「君、お祖父さんが何と云つたえ？」

「お父さんは今日は一日留守で、お母さんは寢てるつて、そして僕等は勝手に遊びに行つてもいいつて。」

それでは翻譯が少し短か過ると思ふので、

「君、お祖父さんはそれつきりほか云はなかつたかえ？」

町也は當惑したやうな容子をしながら、

「後は僕何だかよく分らなかつたから……。」

「では分つただけ云つてくれ給へ。」

「何でもね、僕等が外へ出たら、よく人の油断を見済してやらなけりやアいけないと云ふんだよ。何をやるんだか知らないが……そしてお祖父さんはかういふんだよ——人の物はわが物と思へつて。」

お祖父さんは慥に、町也が私に説明して文句を察したのだらう。私等の方を見ると、中風になつ

て居ない方の手で、物をポケットへ詰込む真似をし、同時に眼をぐりぐりとさせて見た。

「君、外へ行かう。」と町也は促した。

何でも私等は二三時間その邊を歩いて来たが、併し道に迷ふと大變だから、この界限だけを歩いて見たのだ。晝見るとこのベスナル・グリーンは夜見たより一層ひどいところで、家屋の體裁といひ、人間の服装といひ、驚くほど悲惨なものであつた。

私等は時々顔を見合はせたが、併し何にも云はなかつた。

やがて家へ歸つて来て見ると、お母さんは寢室から出て来て居た。戸口のところから私はお母さんが食卓に頭をつけたまゝ、動かずに居るのを見た。何でもお母さんは病氣なのだらうと考へたが、言葉をかけて事は出来ないから接吻しようと思つて、お母さんの傍へ進んで行つて、お母さんを抱いた。

するとお母さんは頭を擧げて私を見たが、多分お母さんのどろツとした眼には私が見えなかつたのだらう。唯私はお母さんの熱い呼吸が顔にかゝるのを覺えたが、その息は強い酒の臭がした。私が身を引くと、お母さんはまた頭を食卓の上に伸した左右の腕の間へ落して、鼾をかき始めた。

「杜松子酒だ。」とお祖父さんは笑ひながら私を見て云つて、何か附加へたが素より私には分らなかつた。

私はすべての感情を身體中から抜取られたやうに茫然となつて突立つたが、間を置いて町也の顔を見ると、町也は涙ぐんだ眼で私を見て居た。

私は町也に眼顔で合圖をして、二人はまた戸外へ出た。

可なり長い間私等は互に手を確と取り合ひながら無言のまゝ、どこといふ宛もなく、足の向く方へ眞直に歩いて居た。

暫時すると町也は案じ顔に、

「君、かうしてどこへ行かつもりだえ？」

「どこか知らない。併しかうして行けばどこか君と談話の出来る靜かなところへ出られるだらう。僕、君に話したい事があるんだ。こんなに人の居るところは厭だから……。」

私は美登里老人の學校でちやんと仕込まれたので、町や村の眞中では決して大事を云はない事に定めて居るのだ。その習慣の故か、通行人があると、すぐ氣を取られて折角浮んだ考への緒を失して了ふ。で今この場合私はちつともはたに氣を取られぬところで、町也に改めて話をしたことがあるのだ。

その中私等は廣い淋しい大通へ出たが、この大通りの端には立木が見えるらしいから、何でもそこはもう田舎なのだらうと思はれた。そこで私等はその方角へ進んで行つた。併しそれは田舎ではなかつたが、大きながらんとした公園地で、蒼青な廣々とした芝生があり、ところどころに若木の森があつた。

話をするには屈竟のところであつたから、私等は芝生の上へ腰を卸した。

「君はよく知つてゐるだらう、僕が君を思つてゐる事を。僕が君をかうして僕の両親のところへ連れて来たのも、全く僕が君を思つてたからさ。そして君のためになると思つたからさ。僕が君をどんなに思つてるか、君だつてほんとに知つてゐるだらう。」

私が斯う云ひ出とす、

「何だ、詰らない！ 今更そんな事——。」

「そして僕——。」私は急に胸が迫つて来たので「君、笑ふかも知れないが、家では泣きたくつても泣けなかつたんだ。君とでなくつて、僕は誰とも泣く人は無いんだから。」

私はいきなり町也の腕に身體を任せて、涙に咽入つて終つた。私が孤獨の孤兒であつた間には、嘗てこれほど迄わが身の不幸を感じた事は無かつたのである。

私は暫らく咽返つて居た後、漸く自ら勵まして涙を収めた。私がこの公園地へ町也を連れて来たのは何も自分が泣くためでは無かつた。町也の憐れみを求めるためでは無かつた。それは全く私のためでは無くて、町也の爲に話をする事があつたからであつた。

「それでね、君、話といふのは外ではないんだが、君に早速こゝを立つて佛蘭西へ歸つて貰ひたいんだ。」

「お、！ 君を一人残してよそへ行く事は決して！ 僕にどうしてそんな事が出来るものか。」と町也はきつぱりと云放つた。

「僕は君がきつとさういふだらうと思つて居た。君がさう云つてくれると、僕はどんなに嬉しいか知れない。併し僕はそれだけで満足するんだ。君はどうしてもこゝを立たなければいけない。佛蘭西へ歸るなり、君の郷里の伊太利へ行くなり、英吉利にさへ居なけりやア、どこでも君の好きなところにいゝんだから、早速この倫敦を立つてくれ給へ。」

「そして君は？ どこへ君は行く？」

「僕？ だつて僕はこゝに残つてなけりやアならないよ、僕の家。両親の傍に居るのは僕の義務なんだもの……。さア、君、こゝに使ひ残りの錢がある。僕はもう一文も要らないから、この金で歸つて呉れ給へ。佛蘭西へ渡る位はまだ残つてゐるだらう。」と私は財布を出して町也の前に置いた。

町也は手にも觸れずに、

「そんな他人がましい事を云はれるのは厭だ。僕は決して佛蘭西へ歸らない。若し二人の中で、誰かこゝを立たなけりやアならないなら、それは僕で無くつて、却つて君なんだ。」

私は驚いて、

「なぜ？」

「なぜつて……。」

町也は云切らずに止して了つた。そして私の疑問の眼つきに出逢すと、その眼を外して了つた。

「おい、町也、僕は君に聞く事がある。僕には何の遠慮も要らないんだから、正直に有のまゝに、ち

つとも恐れずに答へて呉れ給へ。君は昨夜眠らなかつたらう？」

町也は眼を落して、息の詰つたやうな聲で、

「僕は眠らなかつた。」

「君は見たか？」

「みんな見た。」

「そして君にはみんな分つたか？」

「あのいろ／＼の品物を持つて来た奴等は、あれはみんな買つて来たんぢやアないんだ。君のお父さんは、彼奴等がなぜ表の戸を叩かずに、車庫の戸を叩いたんだつて怒ると、彼奴等は、表の方には巡査が居るからだと言つて居た。」

「さア町也、分つたらう、君がこゝを立たなければならぬ譯は。」

「僕が立たなければならぬなら、君だつて立たなければならぬ譯は。二人とも全く同じ事なんだ。」

「まづ聞き給へ、僕が君を倫敦へ連れて来たのは、直の話や何かから、全く僕の親達を身分のある金持か何かとばかり思ひ込んで、その親達は僕と君と一緒に學校へやつて仕込んで呉れるだらう。さうすれば二人は何もかも同じにして、別れずに居られると、かう思つたからなんだ。ところが来て見るとこんな譯で、めてがすつかり外れちやつたんだから……もうどうしても君と僕は別れなければならぬ譯は。」

「決して！」

「そんな事云はずに、よく聞いて呉れ給へ。此上に僕の苦痛を増さずに置いて呉れ給へ。……僕は君に聞くがね、若し巴里で僕等がひよつくら我太堀に逢つて、君が我太堀に取返へされたとする、君は僕にも我太堀の弟子になつて一緒に居ると勧めるかえ？……勧めはしないだらう。丁度僕が君に今云つて通りの事を云つて、我太堀のところを僕を置くまいとするだらう。」

町也は黙つて返事しない。

「え、どうだえ、君、僕のいふ事が當つたら當つたと云つて呉れ給へ。」

町也は一寸考へ込んだ末、

「いや、僕のいふ事を今度は君が聞いて呉れ給へ。鯖野で君の家族が君を探してる話を聞いた時は、僕は實に悲しく思つたんだ。君の親達が見つかるといふ目出度い事なんだから、僕は喜ばなけりやアならないのに、自分の事許り考へてそれを悲しんで居たんだ。僕は心の中で、定めて君は男の同胞もあるだらう、女の同胞もあるだらう、君は僕のやうに、いやきつと僕よりもその同胞の方を可愛がるだらう。そして君の同胞はみんな立派な驍を受けた坊ちやんだり、お嬢さんたりするだらうと思つて、僕は嫉妬を起したんだ。僕はそんな自分勝手な性分だつたんだ。今すつかり君に白状するから、それでも若し君が許せるなら、許すと一言云つて貰やアどれほど嬉しいか知れない。」

「おゝ！ 町也。」

「え、君、許せるなら許すと一言云つて呉れ給へ。」
「君と僕との中で許すも許さないもないぢやアないか。僕そんなこと位でちつとも怒りなんかしないよ。」

「自分の事だけれども、君は餘り人が好過る。性の悪いものには怒つてやるのが當然ぢやアないか。僕は君が許してくれたつて、自分で自分が許せないんだ。君はまだ知らないけれども、僕にはまだまだ君に濟まない事があるんで……僕は始めて英吉利へ来る時自分で斯う云つたんだ——僕は英吉利を見たいから民と一緒に英吉利へ行く、けれども民が幸福になつたら、もう僕の事は餘り思つてくれなからうから、さうなつたら僕は何と云はれても聞かずに、英吉利を逃出して鳥野へ歸つて来て、そして妹を接吻してやらうつて……ところがこんな譯なんだから、僕はもう英吉利から逃出しなにかしないんだ。もう僕は妹なんか接吻しなくつてもいゝんだ。僕の接吻するのは、たつた一人の僕の友達で、僕の兄さんのこの民きりなんだ。」

かう云ひながら町也は私の手を取つて強く私に接吻した。私の眼は忽ち涙に満されたが、その涙は今までに覺えぬ苦い、そして熱い涙であつた。

私はひどく感動したけれども、私の決心を醸す事は出来なかつた。

「君はどうしても家に居ちやアいけない。お願だから佛蘭西へ歸つて呉れ給へ。佛蘭西へ歸つて、直や岩吉や小菊やみんなに逢つて、僕が約束して来た事の出来ない譯を話して呉れ給へ。君は唯僕の親達かと思つたやうに金持で無かつた事を話してくればいゝんだ。さうすればみんな僕を許して呉れるだらう。ねえ君さうぢやアないか、金持でないのは少とも恥辱ぢやアないもの。」

「でも君が僕にこゝを立つてといふのは、君の親達が金持でないからぢやアあるまい。だから僕は決して立たない。」

「おい、町也、後生だから僕に安心させるやうに、こゝを立つて呉れ給へ。それでないと僕はどんなに辛いかわれないんだから。」

「君は親達が貧乏だから、僕に佛蘭西へ歸れといふんぢやアないんだ。ねえ、さうだらう。若し貧乏で僕を養へないといふなら、僕は君の親達のために稼いで手助けになる事も出来る。だからそれで君は歸れといふんぢやアないんだ。それはなぜと云へば——君は昨夜見た事から、若しや僕が君の親達のため——。」

「おい、君、それはもう云はないで——。」

「盗人の持つて来た商品の商標を、鋏で切らせられるやうになつては大變だと思ふからなんだ。」

「おい、それを云はないで——後生だから町也。」

私は恥ぢて眞緒になつた顔を両手で隠した。

町也は言葉を次いで、
「若し君が僕の身の上を、その通りになつたら大變だと心配するなら、僕だつて同じところぢやアない

か。僕はどんな事をしたつて、君に盗んだ品の商標を切らせる事は厭だ。だから君、僕もこゝを立たないとは云はない。その代り君と一緒に立たう。直や小菊や太吉に逢ふため佛蘭西へ一緒に逃げて歸らう。」と町也は思ひ込んで云つた。

「だつてそんな事出来ないぢやアないか。君は僕の両親にも何でもないから勝手だけれども、僕には大事な両親なんだもの、僕はどうしたつて家族と一緒に居なくちやアならないよ。」

「君の家族——！ 中風で君に唾を吐きかけるお祖父さんと、酔つばらつて食卓に寝てるお母さんか！ そんな家族なんか——。」

私は睨むやうにきつと町也を見て、命令の調子で、

「おい、町也、僕はいくら君だつてそんな失敬なことは云はせないんだ。中風だつて僕のお祖父さんぢやアないか。酔つて居たつて僕のお母さんぢやアないか。僕の両親やお祖父さんなら、どこまでも尊敬して、さうして愛さなけりやアならないんだ。だから君にだつて尊敬して貰はなけりやアならない。」

「そりやア僕だつて分つてるさ。だから眞實に君の両親ならさうしなけりやアならないさ。だけれども若し、君の眞實のお祖父さんでなかつたら、お父さんでもお母さんでもなかつたら？ それでも君は尊敬して愛さなけりやアならないかえ？」

「だつて君は僕のお父さんの話を聞いたぢやアないか。」

「だつてまだ何も證據がある譯ぢやアないさ。あそここの家では君と同じ年の子供を失して、今度その子供と同じ年の君を見つけたのさ。」

「そんな事云つたつて、その兒は巴里の廢病院前へ捨てられたんで、僕はその廢病院前で、同じ日に拾はれたんだから間違ひツコはないぢやアないか。」

「だけれども廢病院前に同じ日に二組の捨兒が無かつたとして云へる？ その君でない違つた方の捨兒の親に、警察では君の方を知らしちやつたんだ。だからその親が間違つて鯖野へ行つたのさ。」

「馬鹿な、そんな馬鹿な事があるもんか。」

「そりやア馬鹿かも知れないさ。けれども僕の話の仕方がまづいから馬鹿に聞えるんだ。僕の頭が馬鹿なんだから、僕は馬鹿にほか云へないけれども、誰か僕でない恰憫な人が云へば、きつと馬鹿には聞えないんだ。その話は決して馬鹿ぢやアないんだもの、馬鹿なのは唯僕の頭だけなんだもの。」

「だつてそんな事が！」

「そればかりぢやアないよ。僕は君にちやんと云つて置くが、君は家の人の誰にもちつとも似てやしないよ。お父さんにもお母さんにもお祖父さんにも、髪の毛の色だつて君の同胞とは違つてるんだ。君、見給へ、君の同胞はみんな顔が似てるだらう。けれども君だけはちつとも似てない。それに僕が不思議でたまらないのは、金持でもない君のお父さんが、大金を使つて君を探した事なんだ。……そんな事を考へると、君はきつとこの千代呂木の家のものぢやアないんだ。だから僕は君と一緒に逃げよ

うってんで、それともどこまでもここに居るといふんなら、僕も君と一緒に居る。僕はちやんと決心してゐるんだから何と云つたつて駄目だ。併し君、お直婆やのところへ手紙を出して、詳しく君の産衣の事を云つて貰つたらどうだい。その返事でどんな産衣だつたつて事がちやんと分つた上で、今度は君のお父さんに産衣の事を聞いて見るといふ。さうすると眞實の事が分るぢやアないか。さうだ、是非ともさうし給へ。それまでは僕は挺でも動かないよ。毎日君と一緒にカビを連れて稼ぎに出てたらいぢやないか。」

町也のこの疑惑は少からず私の心を搔亂す基となつた。

私等はなほ長いこと話し合つた。晝餐には麵麩を買つて来て食て、この美しい公園を終日散歩して居た。

私等が赤獅子庭へ歸つて来たのは、もう日が暮れてからであつた。

盜賊犬カビ

町也と二人家へ歸つて見ると、お父さんはもう歸つて居て、お母さんもちやんと起きて居た。併しお父さんもお母さんも、私等が長い事遊んで来たのを何とも云はなかつた。たゞ晚餐が済むとお父さんは私等二人に話をする事があると云つて火の傍に呼んだ。お祖父さんに眼を刺れても構はず、煖爐の前へ行くと、お父さんは私等に對つて、

「お前等二人はどつ云ふ風に、佛蘭西で湖口をして来たのか、少しそれが聞きたいんだ。」
そこで私等の稼ぐ模様を私が摘んで話した。

「お前等はそれで乾干になる心配は無かつたのか。」

町也がそれに答へて、

「一度だつて乾干になつた事なんか有りません。それ許か二人で稼ぎ貯た金で牝牛迄買つた位です。」

「牝牛を買つた？ どうして？」

「お直婆や——民の乳母に土産に買つたんで、八十五圓もした上等の牝牛なんです。」

「ウム、それではお前等はよほど藝が巧いに見えるな。めい／＼にこゝでやつて見てくれ。」

私は立琴を取つて来て、一曲弾いた。けれども十八番のナポリ節は聞かせなかつた。

「よし、よし。」とお父さんは肯首いて、今度は、町也に向ひ「町也、お前は何か出来る？」

町也はまづヅオロンを弾いて、それから喇叭を吹いた。

町也が喇叭を吹いた時、私等の周圍に集つて居た私の同胞等は、皆手を拍つた。

「それからカビは？」とお父さんは犬を見て「この犬も何か藝が出来さうだな。お前等が唯餐澤に犬を飼つて置く筈はないからな。きつと此奴も自分の食料位は稼ぎ出すんだらう。」

私が何よりも誇としてゐるのはカビの藝だつた。それは嘗にカビに對する誇ばかりでなく、私の死んだ師匠に對する誇でもあるのだ。カビが私に命ぜられてゐる／＼の藝をすると、子供等の喜びは一通

りではなく、いつもどこでも受る通りの大當りを取った。

「い、金の蔓だ、この犬は！」とお父さんは感心して叫んだ。

カビが賞られたので喜びながら、私はこの犬が何でも教へ込まうと思ふものはすぐに覺えて、外の犬の通常出来ぬ事まで仕込まれるといふ話をした。

お父さんは私の云つた事を英語で翻譯して皆に聞かせ、そして何か私の知らぬ事を附加へて云つたが、それを聞くと皆が笑つた。お母さんも笑ひ、子供等も笑ひ、お祖父さんまでが笑つて、眼をくりくりさせながら、何度もい、犬だと云つた。その詞は私にも分つたのだ。

お父さんは言葉續けて、

「まづさういふ譯なら一つこゝに相談があるんだが、その前に聞きたいのは町也、お前の身の上だ。どうだ、お前は英吉利に居て己達と一緒に暮す氣はないか。」

「私は民と一緒に居たいんです。」と町也は力を入れて云つた。

この答への裏に、どういふ意味があるかは知らぬお父さんは、さも満足したらしく、

「ウム、それならい、都合だ。そこで相談だが、此方等はこの通り貧乏人なんだから、めい／＼働いて暮さなくつちやアならない。時候がぼか／＼暖かくなつて来ると、英吉利を行商して廻るんだが、かう寒くなると商賣がなくなるから、仕方なしに倫敦で冬籠をするんだ。そこで其間も大勢が遊んで暮す譯にいかんから、民と町也にはやつぱり佛蘭西でやつたやうに、彈いたり歌つたりして稼いで貰

ひたいんだ。きつと倫敦では稼ぎがあるに違ない。殊に基督降誕祭近くなれば、ウンと儲けがあるだらう。それから金造と長吉にも只遊ばして置く譯にいかんから二人にはカビをつけてやつて、いくらなりと儲けさせようと思ふんだ。」

私はカビを手放す事がどうして出来ようと思ふので、慌てて言葉を插み、

「だつてお父さん、カビは僕でなくつちやア藝をしませんから……。」

「なアに、伶俐な犬なら、すぐ金造や長吉と一緒に稼ぐやうになるだらう。かういふ手配りをすれば、餘計に稼ぎが出来るといふもんだ。」

「ですけれども私と町也だけではそんなに稼がれないんです。カビが居なけりやアそんなに稼ぎは出来ないうで——。」

「いや、もうい、己が斯うしろと云つたらば斯うするんだ。それが己の家の掟なんだ。お前も己の家の人になつたからは、この掟に従はなけりやアならん。い、か、分つたか。」

私はもう何とも云返す事が出来なかつた。カビをどうしてかうしてと思つて居た夢さへも、今はこの通りになつて了つた。私はカビと分れなければならぬ。何と悲しい事だらけだらう。

私等は寝るため例の馬車の中に入つた。併しお父さんは今夜は馬車の戸に錠前を卸さなかつた。

私はすぐ寝て了ふと、私より着衣を脱ぐのに手間の取れる町也は、後から私の枕に近よつて、聲を殺しながら、

「ねえ、君、分つたらう。君のお父さんと云ふ人は、お父さんらしいところはずつとも無いんだ。子供等を養つてゐるのはたゞ稼がせる爲なんだ。君の犬までも取つちやつたぢやアないか、だから君、い加減に眼を開き給へ。明日はお直婆やに手紙を出すとしようや。」

併し明日はカビによく因果を含めて、教へ込まなければならなかつたのだ。私はカビを抱いて、静かに何度もその顔に接吻してやりながら、私と別れて、金造や長吉と一緒に稼がなければならぬ事か説明した。あ、憐れなカビ！私を見詰めて、一心に聞いて居るそのいぢらしさ！

いよ／＼カビの綱を金造に持たす時にも、私はなほよく三聞かした。カビはほんとに恰憫な柔順しい犬だから、さも悲しうな容子をしながら、ちつとも反抗せず二人の兄弟に従つて出て行つた。

町也と私はお父さんが自分から、一番稼ぎの出来さうな、場所柄のいゝところへ連れてつて呉れた。私等は長い倫敦を突切つて、立派な家の揃つて居る町、そしてそこ、に記念碑やら彫刻像などがあつて、兎事な花園に取巻れて居るやうなところへ来た。幅の廣い人道には、もう私の家の近所で見るとな襦袢を着て裸足で居たり、三日も四日も物を食べないやうな顔をして居るものなどは一人も見えない。眼に入るものは立派なお化粧をした女や、鏡のやうに光る黒塗馬車や、頭に髪粉を塗つて、でぶくと太つた馭者と、遅い光澤のいゝ馬ばかりだつた。

私等はこんなところで一日稼いだ。そして家へ歸つた時はよほど遅くなつた。なぜなら私等の稼いで居た西倫敦から私等の家までは大變な道程だからである。歸つて見て嬉しかつたのはカビが尾を

振つて飛んで来た事で、随分泥だらけにはなつて居たが、それでも上元氣であつた。

私等は寝る前に、乾いた藁でカビを擦つて、すつかり泥を落してやり、私は羊の毛皮を着せて、寢床と一緒に寝せてやつた。カビも嬉しかつたらうが、私の方がモ一つ幸福だつたかも知れぬ。

私等は毎日この通りにして、幾日か稼いで来た。カビは毎日金造や長吉に連れられては藝をして見せて居た。すると或夕方お父さんが私に向ひ、明日は金造と長吉に家に居て貰はなければならぬ用事があるから、犬はお前等が連れて出ていゝと云つた。それはどんなに、私等を喜ばせたか知れなかつた。私と町也は明日こそみつしり稼いで、ウムと儲け、なるほどカビを引離して置くのは損だといふ考へをお父さんに起させようと計畫した。

翌る朝私等はカビにすつかりお化粧をさせ、今までの経験で一番稼ぎの出来るホルボーンから牛津街の方へ出かけた。

ところが不幸せにも昨日からの霧がまだ霽す、却つて今日の方が深い位で、もう五六歩先が見通せないのだ。差迫つた用事のある人でもないしと外へ出ないので、往來も甚だ淋しい。いつもならカビが藝をすると、家の中に居る人は姿をあけて見物するのだが、今日は窓からでは霧のためちつとも見えないのだ。私等の稼ぎ高の手薄かつた事は素よりいふ迄もない。町也は頻りにこの倫敦名物の霧を呪つて居たが、少し後でこの霧が私等のため大變な役に立たうとは思はなかつたのだ。

私はカビを自分の踵について歩かせ、決して傍を離れぬやう、時々言葉をかけながら歩いて居たが、

その中私等はホルボーンに來た。こゝは人も知る倫敦で聞えた繁華の商業街である。ところがこゝで私等は突然カビの姿を見失つて了つた。そこら中を探して見たが居ない。こんな事は今迄決して無かつたのだ。併し待つて居れば來るだらうと、一寸横道があつたから、その角に立留つて待つて居た。遠くから私等の姿は見えぬから、私は絶えず口笛を吹いて居た。

私はひどく心配になり出し、もしや誰かに盗まれたのではあるまいかと案じて居ると、忽ちカビが霧の中から私等の處へ飛んで來た。見ると口に羊毛の靴足袋一足を咥へて居る。そして尾を振りながら、前脚を私に凭せかけ、それを取つて呉れといふのだ。一番六ヶしい藝當の出來た時、満足を表す通りの誇をその眼に示して、私から賞美の詞を待設けて居るのだ。

私はどうした譯と呆氣に取られて居ると、町也は矢庭にその靴足袋を、カビの口からもぎ取り、私の腕を掴むと、急いで横道へ引張り込んだ。

「早く！ 早く！ けども駆出しちやアいけない。」

五六分この通りに、息も吐かず急いで、町也は漸く歩みを弛め、逃げ出した譯を説明した。

「僕も君の通り靴足袋をどうして持つて來たらうと喫驚してる時、忽ち街上で男の怒鳴る聲を聞きつけたんだ——盗賊犬はどこへ行つたつて——それで急いで逃出したんだが、分つたらう、君、何もかも。若し霧がこんなにならなかつたら、僕等はカビぐるみ捕まっちゃうところだつたんだ。」

私には分り通るほど分つた。私は何とも云はれぬ凄ましい感情で胸が詰つて了つた。家のものがカビを盗賊へにして了つたのだ。この上もない美しい性質を持つた、正直なカビを！

「すぐ家へ歸らう！」と私は色を變へて云つた。そして私は手早く綱を取出してカビを括つた。

町也は一言も云はず、私に同意した。私等は急ぎに急いで、ベスナル・グリーンに歸つたのである。

家へ歸つて見ると、お父さんもお母さんも子供等も、食卓を取巻いて反物を疊んで居た。私が顔色を變へて入つて行き、持つて來た靴足袋を食卓の上に投出したのを見ると、金造と長吉は面白さうに聲を立てて笑つた。

「この靴足袋はカビが盗んで來たんです。カビはそんな犬ぢやないんですから、家の人が盗賊をするやうに教へたんです。併しそれは——きつと面白づくにさしたんで、本氣にさしたんぢやないんです。僕はそれを聞きたいんです。」

私の斯ういふ聲は震へて居た。併しこの時私はつひぞ持つた事のない強い決心を有つて居た。

お父さんはじろりと私を見て、

「もし本氣だつたらどうする？ それを一つ聞かう。」

「私は——私はカビの首を荒縄で括つて、テームス河へ沈めて了ひます。私はカビが可愛くつて仕様が無いんですが、カビを盗賊にするよりか殺した方が増しです。私だつてさうです。若しひよつと私が盗賊にされるやうな事があれば、カビと一緒に私もテームス河で死んぢまひます。」

お父さんは私の顔を睨みつけて、私を擲りつけようとするやうな身構へをした。お父さんの私を睨んだ眼は燃ゆるやうであつた。けれども私はちつとも自分の顔を下げなかつた。ちつとお父さんを見つめて居た。さうするとだんくにお父さんの顔が優しくなつて来て、

「いや、お前のいふのは道理だ。何も本気で盗みなどはさせやアしない。金造や長吉とでは、思ふやうに稼ぎも出来ない容子だから、明日からはカビをお前に歸してやる。」

案外な結果になつて、カビと私はもう決して離れぬ事になつた。

私が柔しくするにも拘はらず、私の弟等はいつとも私に敵意を表すので、二人ともたしかに私を兄とは認めて居ないのだ。殊にカビの一件があつてから、その敵意は一層甚しくなつた。そして二人は折があれば、カビを酷い目に逢せようとするので、私は口ではいふ事が出来ないから、その都度握り拳を拵へて、少しでもカビをいぢめたら、利かないぞといふ意氣込を見せるのだ。

私は男の同胞は無いものと諦めて、せめて女の同胞には同胞らしくしたいと、おりゑの機嫌を取らうとするのだが、おりゑも私を兄らしく取扱はない事は弟等とちつとも異らぬ。そしておりゑは一日でも私に性質の悪い悪戯を企ますに過ぎた事はないのだ。その點においておりゑは年に似ぬ悪智慧を持つて居た。

弟等には邪魔にされ、おりゑには寄せつけられぬから、外に私の相手になるものと云つては、まだ眞意ない三つの新ちやんがあるだけになつた。私に對する同胞等の排斥運動に加擔するには餘に小

さいから、新ちやんだけは局外中立で勝手に私に可愛がらせる。そして私が時々カビに藝をさして見せてやるし、また毎日稼ぎ先から歸つて来ると、見物の子供等がボン／＼や蒸菓子などを、カビにと云つて呉れるのを、ポケットに入れて来ては、新ちやんのお土産にやるので、新ちやんだけはひどく私に懐くやうになつた。

船で英吉利へついた時は、胸を躍らせながら、あゝして斯うしてと思つて居た私の家族の中で、快よく私の愛情を受けて呉れるものは唯新ちやんだけなのだ。

お祖父さんはその後相も變らず、私が火の傍へ寄ると唾を吐きかけるし、お父さんは毎晩私等の稼いで来た金高を數へて受取るより外には、私に優しい言葉一つかけられるでもなく、お母さんはどこへ行のか留守勝の事が多く、金造と長吉とおりゑは今いふ通りの有様、新ちやんが私に懐いてるのでさへも、私が毎日ポケットにボン／＼を入れて来るからなので、ボン／＼が無かつたら笑顔一つ見せないのかも知れぬ。

あゝ何といふ情ない事だらう！

私は苟にも両親を疑ふやうな心を起してはならぬと思ふので、始めの間町也が直に手紙を出して産衣の問合せをしるといふのを拒んで居たが、このごろでは何だか両親を疑はなければならぬやうにもなつて来た。若し私がこの家の子なら、いくら他國で育つて来たとは云つても、いくら言葉が話せないからと云つても、もつと親子らしく取扱つて呉れるだらう。家中が皆他人扱ひにして居るの

はあんまり酷いと、愚癡を起さずには居られないやうにもなつた。

町也がそれを見て取ると、

「ねえ、君、お直婆やに手紙を出して、問合して見たらい、ぢやないか。」

私等はどうく手紙を書いて直に出したが、家へ返事が来ては大變だから「局待」で出した。二三日たつてからといふもの、私等は毎日出がけに郵便局へ廻り道をして、直の返事が来て居るかと寄つて見るのだが、随分長い事無駄足をした後、漸くその返事を受取つた。

郵便局の中は決して物を讀むのにはいゝ場所ではないから、そこを出ると靜かな場所を求めて、躍る胸を靜めながら、直の手紙を開いた。それはいふ迄もなく、鱈野の御堂の牧師の代筆である。

「私の可愛い民、

私はお前の手紙で喫驚しました。亡なつた權藏がこれまで始終云つて居たことや、またお前を探しに鱈野へ来た人が歸つた後で、權藏の私に云つた事などを考へ合せて、私はお前はきつとよほど家柄の善い、そしてお金持の家へ生れたに違ひないと思ひ詰めて居たのです。

さう思ひ込むのも一つはお前が巴里で權藏に拾はれた時、着て居た産衣や襪襪が、よほど善いところの兒でなければ着られぬもの許りだつたからです。お前はどんな産衣を着て居たか、それを知らしてくれとお云ひですが、それは造作もない事で、私はちやんと證據に取つてあるから、一々詳しく書いて上げます。

お前がその時身につけて居た品々といふのは——金糸や絹糸で編んだ、それはそれは美しい帽子、レース附の絹布の下着、白羊毛の靴足袋、絹房つき白の編靴、白フランネルの長上衣、同じフランネルの布圍、美しい刺繡をした白カシミヤの被ものつき長外套と、これだけです。それに云つて置きたいのは、この品々には徽章といふものが、少しもなく、普通徽章の繡取をして置く筈の、布圍の下衣の端のところは切取られてあつたのです。

若しお前に入用があるなれば、いつでもこつちから産衣を送つてやります。

お前は私にお土産が送れないからと云つて、何も悲しがるには及びません。お前がその日の麵麩を減して買つてお呉れの牝牛は、私の眼には世界中の寶にも劣りません。その牝牛はいつも壯健で、善い乳が相變らず澤山出ます。それだけで私はもう大變に幸福に暮して居ます、そして牝牛を可愛がつてやる度に、私はお前と、町也の事をきつと思ひ出して居るのです。

時々手紙で安否を知らしておくれなら私はそれを楽しみに生きて居ます。お前の家はお金持でなくとも、お前はほんとに優しい善い兒だから、きつとお前の兩親にも兄妹にも可愛がられて、幸福せに暮しておいでなのだらう。それがまた何よりといふものです。

左様なら、民、身體を大事に、町也にも傳言をしておくれ。

直より。」

この手紙の後の方の文句はどれほど私の胸を迫らしたらう。直は私を可愛がり抜いて居るのだから、

世間の人は誰でも直のやうに、私を可愛がると思つて居るのだ。

「あ、嬉しい、お直婆やが僕の事を思つて呉れた。」と町也は此上もなく喜びながら「君この通り詳しく産衣の事があれば占めたもんだ。君の家で盗まれた兒の産衣とはきつと違つてるんだから、君のお父さんの説明と合はないに極つてる。」

「もうお父さんは忘れてるかも知れない。」

「なアに、大丈夫だ。その時着て居た産衣の外には何も證據がないんだもの、その證據を忘れて居て子供を探す事なんか出来ないぢやアないか。」

「それはさうだが、併しねえ、君、お父さんの返事を聞く迄は、この事はもう云はないで居てくれ給へ。お願いだから。」

此日は何氣なく家へ歸つたが、併しお父さんに向つて、私が盗まれた時の着衣はどんなだったと、改まつて尋ねて見るのは、その寛容の事では無かつた。若し私が無心に聞くのなら至つて無造作な譯だけれども、底に物があるので、どうしても臆病になつて云出し兼ねるのだ。

二三日とうく云ひそびれて居たが、或日稼ぎに出ると雨になつたので、私等は早く歸つて来た。お母さんも子供等も居なくつて、お祖父さんとお父さんばかり家に居たので、話をするなら此時と、私は漸く勇氣をつけて質問を切出して見た。

お父さんは私の心の底を讀まうとするやうに、ぢつと私を見た、そしていつも私が機嫌に逆らつた時に、する通りの鋭い眼光で私を睨んだが、私は大膽にお父さんの顔を見て、「返事を聞かなければ承知しない決心を見せた。」

私はお父さんが怒つてどうかするかと思つたら、この間の時のやうに、その怒が見る間に和いで笑顔に變つた。それは恐い、針のある笑顔だつたけれども、笑顔はやはり笑顔だつた。

「それを聞きたいなら、民、譯のない話だから云つてやらう。その産衣の手掛があればこそ、お前が見つかつたといふものだ。よく聞いて居れ。い、か、金糸や絹糸で編んだ帽子に、レースで飾つた麻布の下衣と、フランネルの上着と布圍、白い毛の靴足袋と、白の編靴、それから白のカシミヤに繻取をした外套と、それだけをお前が身につけて居たんだ。そして下着や布圍には千代呂木重吉の頭文字を繻取して置いたんだが、それはすつかり切られて了つて居た。い、か、その千代呂木重吉といふのはお前の本名だ。己はお前が宣禮を受た時の登記書も、ちやんと貰つて来て取つてある。どれ、序だからそれも見せてやらう。」

かう云ひながら、お父さんは珍らしく機嫌よく、物入の抽斗を長い事掻探した末、いろくくの印の捺つた大きな紙を持つて来て私に見せた。

併し私には讀めないから、

「町也に見て貰つてもい、んですか。」と聞いて見ると、

「い、とも。」

町也にはどうやらかうやらそれが讀めた。それによると私は——年八月二日千代呂木重作とその妻倉田増江との間に生れた長子なので、名は正しく千代呂木重吉！私にはこの上もう何の疑問が残つて居ようか？ 私は正真正銘紛ふ方もない千代呂木重作の小供なのだ。

けれども町也はまだ満足しなかつた。例の馬車へ入つて寝る時、また私の枕元に屈んで、「話はよつほど巧く拵へてある。けれども行商人や何かがレース編の帽子や、縫取をした外套を赤兒に着せられる筈が無いぢやないか。」

「きつと行商人だから廉く出来るからさ。それにお父さんはそのころはこんな貧乏して居なかつたと云つたぢやないか。」

町也は口笛を吹きながら頭を振つて、それからまた私の耳に口をあて、

「僕の頭の中にある考へを話さうか、君は千代呂木重作の兒ではなくつて、重作が盗んだ兒なんだ！」かういふなり町也は自分の寢床へ入つて了つた。

千島剛三

若し私と町也と地位が轉倒して居つたら、私は町也同様、或はもつといろくの想像を繰らしたかも知れぬ。けれども私の地位は私に想像の自由を許さぬのだ。町也に取つては千代呂木重作は、唯の

千代呂木重作だが、私に取つてはお父さんの千代呂木重作である。

町也のやうに唯の千代呂木重作で考へて見ようとすると、お父さんの千代呂木重作がすぐ私を壓へつける。町也は唯の千代呂木重作だから、何とでも勝手な想像を下して差支ない。私にはお父さんを尊敬しなければならぬ義務がある。

お父さんにしては、お母さんにしては、またお祖父さんにしては、いろく腑に落ちぬところがあつても、私は町也のやうに考へて見る自由を持つて居らぬのだ。

他人を疑ふといふ事——大は町也の自由である。父を疑ふといふ事——夫は私に禁ぜられてある。どうも町也の疑つた事柄が尤もだと思ふ時でも、私は町也に沈黙させる義務を持つて居た。けれども私は町也を沈黙させ得ぬ場合が屢々あつた。

町也はいつでも次の問を發するのだ。

「なぜ金造と長吉とおりゑと新ちやんとみな似てるのに君ばかり似てないか？ 兄妹の髪の毛がみなお母さん通りの淡褐なのに、君の毛が違つてるか？」

「なぜ家中のものが、まだ頑是ない新ちやんの外は、皆君を除けものにして、疥癬かきの野良犬みたやうに取扱ふか？」

「君の小さい時どうして、貴族の子供のやうな服装をさせて居たか？」

これ等の疑問に對して、私が町也を信用させ得るやうに解釋を與へる事は素より出来なかつたが、

それでも私は次のやうに反問するのだ。

「若し私がお父さんの兒でなかつたら、私の行方が判つたからと云つて、放つて置さうなものぢやアないか？、なぜ権藏に大金を興へて私探さをしたのか？、なぜ権藏ばかりでない、鎌田謙方法律事務所といふやうな、立派な看板を出してゐるえらい人にまで依頼したのか？」

町也はこの反問に對しては、それだけは不思議で判らないと云つた。

「けれども君、それが判らないと云つたつて、僕の云つた事が間違つてゐる證據にはちつともならないぜ、これが若し僕でなかつたら、僕のやうな馬鹿な頭を持つてゐるものでなかつたら、きつとよく、どうしてあの重作親爺が、あんなに金までかけて君を探したんだか、判るに違ひないんだが、唯これが僕だからよく判らないんだ。僕は悪黨の事なんかちつとも知らないんだから……けれども君はどうしたつて重作の兒ぢやアない。譯は云へないけども、僕の頭にちやんと分つてゐるんだ。何の、君が重作の兒でたまるもんか。それはきつと今に分る事があるから……たゞ君が頑固で僕のいふ事を聞かないでゐるから、分つてもきつと遅くなる。なアに、僕だつて君がお父さんを尊敬しようとしてゐるのを、何も悪いと云やアしないが、こんなにしてこゝに居ると、君はだんだんに盲目になつちまふから、僕がそれが心配なんだ。」

「ぢやア僕がどうすりやアい、といふんだえ？」

「僕は君を連れて、佛蘭西へ逃歸りたいんだ。」

「そんな事が出来るもんか。」

「それは君が家族に盡す義務があると思つてゐるからさ。だつて君、君の家族で無かつたらい、ぢやないか。」

かういふ議論はいつまでたつても果が無ければかりか、私をますます不幸に導くものであつた。

あゝ世の中に疑といふものほど、人の心を賊するものはない。

疑つては悪いと思ひながら、私は疑はずに居られなくなつた。

このお父さんは私のお父さんなのだらうか？、このお母さんは私のお母さんなのだらうか？、この家族は私の家族なのだらうか？

私が斯んな疑を打明けけるのは何といふ恐ろしい事だらう。孤兒で淋しさに泣いて居た時の方が、今の私に取つては、遙かに幸福で、そして遙かに苦痛が少かつたのだ。

私はかういふ悲しい辛い思ひに閉され乍らも、毎日立琴を弾いて、歌つたり笑つたりしななければならなかつた。

私等に取つて一番幸福な日は日曜日で、巴里と違ひ倫敦の往來では、日曜日に音楽をやらぬから私等は稼業を休んで、勝手に悲しい思ひ出に耽る事が出来た。そして私は町也とカピに伴はれて、元氣なくその邊を散歩して居た。一二箇月前の私とは何といふ違ひだらう。

或日曜日、私が例の通り一緒に散歩に出る用意をしてると、お父さんが私に向つて今日はお前に少

し用事があるから家に居ろと言渡し、町也だけを遊びにやった。今日は珍らしくお祖父さんは寢室から出て来ない。お母さんはおりんと新ちやんを連れてどこかへ行つた。二人の兄弟も遊びに追やられた。つまりお父さんと私と二人だけが残つて居た譯だ。

凡そ一時間もすると、誰か戸を叩くものがあつた。お父さんは戸を開けに行つたが、忽ち一個の人を導いて入つて来た。その人はいつもお父さんに逢ひに来る友達などの人柄とは丸で違つて居る。それこそ英吉利人のいふ「紳士」で、立派な衣服を着て絹帽を被り、上流社會の人のやうな人相をして居たが、只生活に疲れたといふやうな面影の見える、年頃五十位の人であつた。私の驚ろいたのはその笑顔で、上下の唇の運動につれて表れる白い齒が、丁度小犬の齒のやうに尖つてるのだ。それがこの紳士の著しい特徴で、その通り唇を締め、齒齦まで表して笑ふところを見ると、笑ふといふよりは、人を噛まうとするのではないかといふやうに、私に見えた。

此紳士はお父さんと何か英語で話しながら、その間始終私の方を見て居た。併し私の眼と紳士の眼と打かると、紳士はすぐ眼を外して了ふのだ。

何のためにこの紳士が来たのだらうと驚ろいて居る中、紳士は英語を止めて佛蘭西語で話し出したが、その佛蘭西語が實に易々と出て、英吉利人の佛蘭西語によく見るやうな抑揚がなかつた。「それではこの兒かな、お前さんが乃公の役に立つだらうと云つたのは？ 身體は丈夫らしく見ゆるが、どうかの？」と紳士は私の方を見た。

「これ、民、返事を申し上んかえ？」

「お前、身體は丈夫かの？」と紳士は私に尋ねた。

「ハイ、丈夫です。」

「今迄に病氣になつた事はないかの？」

「一度肺炎を患つた事があります。」

「フ、ム、どうして肺炎を患つたかの？」

「恐ろしい寒い時、お師匠さんと二人で雪の中へ寝てたからで、お師匠は死んぢまひましたが、私は助かつて肺炎になつたんです。」

「それはいつの事かの？」

「三年ほど前です。」

「その後にはちつとも肺炎の氣が出ぬかの？」

「ちつとも。」

「夜寢汗でもかくやうな事はないかの？ 何か、斯う人より早く疲れるといふやうな事もないかの？」

「寢汗なんかかきません。あんまり歩き過ぎる時は疲れますが、疲れたつて病氣になるやうな事は有りません。」

紳士は立上つて私の傍へ来た。そして私の腕をまくつて見たり、脈搏を取つたりした。それから上

衣を取らして私の心臓のところへ手をやった。私の胸に耳を當がつて駈て来た時のやうに強い深い息を吐けと云つた。それからまた咳をして見ると云つた。

それが濟むと紳士は、長い事ちつと私の顔を見詰めた。今度こそいよく嘔みつかれるのではないかと思つた。

私には何にも云はずに、紳士はお父さんの前へ行つて、また英語で話し始めた。そして直に二人は外へ出て行つた。表の戸からではない。例の車庫に行く戸口から出て行つたのである。

私は一人取残されながら全體何の事だらうと考へた。紳士は何のためにいろ／＼の事を聞糺したのだらう。何だか給仕にでも私を使つて見る氣で来たやうにも思はれる。あゝもしさうだと私は町也ともカビとも分れねばならぬ！ けれども私は、いくらお父さんが何と云つたつて、他人の給仕なんかにはならないと決心した。別して笑ふのだから嘔みつかうとするのだから分らぬやうな、あの氣味の悪い紳士の給仕には決してならぬと覺悟した。

暫らくする中にお父さんは一人で歸つて来た。そして私に向つて、あの紳士はお前を使つて見るつもりで来たのだが、都合で止めになつたから、お前は今から勝手にどこへでも行つて遊んで来るがいと云つた。

私は外へ遊びに行つて見ようなどといふ考へは少しも無かつた。けれどもこんな悲しい家の中に居たところですから、氣を腐らすばかりだ。それよりは散歩でもした方がましかも知らんと考へた。

雨がしとしと降つて居たから、私は羊の毛皮を取つて来るため、馬車の中へ入つて見て驚ろいた、散歩に行つた筈の町也がそこへ、この寝をして居たのである。

私が聲をかけようとすると、町也は慌てて私の口に手をやり、小聲で、

「靜かに車庫の戸を開けて、戸外へ出給へ。僕はそつと君のあとからついて出る。僕がこゝに居た事が知れると大變だから。」

私は容子のあることと驚きながら、手早く羊の毛皮を取つて身に纏ひ、馬車を下りて、靜かに車庫の戸を開いた。幸に誰も出て来なかつたから、私について出た町也の姿は人に見られなかつたのである。

往來へ出ると、

「君、今家へ来た紳士ね、あれを誰だと思ふ？」

「誰だと思ふと云つて？」

「君の尋ねてる淺雄さんの叔父さんだよ。千島剛三といふ人だよ。」

私は往來の眞中に化石のやうになつて立止つて了つた。町也は私の腕を取つて歩き出させながら話を續けた。

「僕はね、外へ一度散歩に出ただけでも一人ではあるし、雨は降出したし、寂寞とした倫敦の日曜なんか、ちつとも面白い事はないから、いつその事書信をしてやらうと思つて、裏口から歸つて來